

東日本大震災後、4年目の語り。

7つのケース、宮城の9人の声の記録

ART  
SUPPORT  
TOHOKU-  
TOKYO

# 東日本大震災後、 4年目の語り。

7つのケース、  
宮城の9人の  
声の記録

— 雄勝 — 女川 —  
— 牡鹿 — 塩竈 —  
— 山元 — 仙台 —

ART  
SUPPORT  
TOHOKU-  
TOKYO

# 東日本大震災後、 4年目の語り。

7つのケース、  
宮城の9人の  
声の記録

— 雄勝 — 女川 —  
— 牡鹿 — 塩竈 —  
— 山元 — 仙台 —

ART  
SUPPORT  
TOHOKU-  
TOKYO

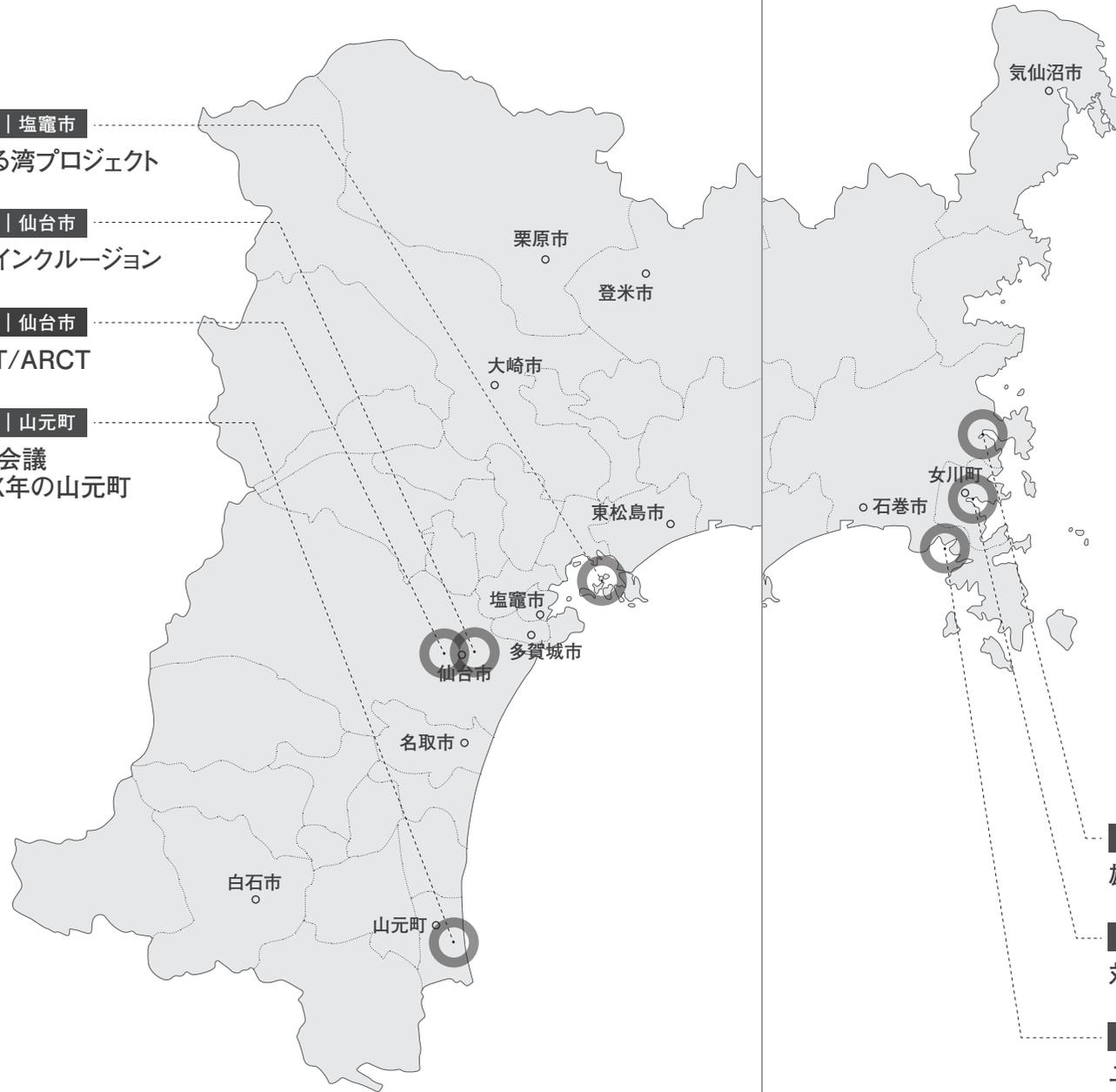
## 被害状況と各CASEの地域

**CASE7 | 塩竈市**  
つながる湾プロジェクト

**CASE2 | 仙台市**  
アート・インクルージョン

**CASE6 | 仙台市**  
ARC>T/ARCT

**CASE5 | 山元町**  
井戸端会議  
～201X年の山元町



### 東北地方太平洋沖地震

発生日時 2011年3月11日(金)14時46分

マグニチュード9.0 最大震度7(宮城県栗原市)

### 【宮城県の被災状況】(平成27年1月31日現在)

死者(関連死を含む) 10,530 人

行方不明者 1,255 人

重傷 502 人

住家被害 全壊 82,993 棟

半壊 155,126 棟

一部損壊 224,176 棟

床下浸水 7,796 棟

### 【宮城県の津波に関する記録】

浸水面積 327km<sup>2</sup>

東京ドーム25,154個分

被災6県の浸水面積合計の約6割に相当

高さ 7.2m(仙台港) 8.6m以上(石巻市鮎川)

宮城県土木部の痕跡調査結果によると、  
女川町の津波最大遡上高は34.7m

宮城県WEBサイト「震災・復興」ページより  
<http://www.pref.miyagi.jp/site/ej-earthquake/>

**CASE3 | 石巻市雄勝町**  
雄勝法印神楽 舞の再生計画

**CASE1 | 女川町**  
対話工房

**CASE4 | 石巻市桃浦**  
ユイノハマプロジェクト

## はじめに

東日本大震災から丸4年が経過した。

東北の沿岸部に山積みになっていた瓦礫やそこに漂う魚の匂いは消えたが、かつてあった街は、今も無い。三陸地方の国道を重機やトラックが行き交い、海岸付近には盛り土が高く積み上がっている。災害公営住宅の完成数は2015年1月末現在で2割弱（被災42市町村合計、河北新報2015年3月2日付）に留まっている。東京電力福島第一原発事故の影響で整備が遅れていた常磐自動車道が3月1日に全線開通したが、一部区間の放射線量は1時間あたり5.4マイクロシーベルトを記録した（河北新報同日付）。内陸部には平穏が戻っているが、被害の大きかった地域の復興はもちろん、仮設住宅で暮らす高齢者の見守りや、震災の記憶の風化を防ぐ取り組み、防災教育に奔走する人びとのニュースが地元紙に溢れている。

この本は、このような時点で作った。

2011年8月、全国から寄せられた絵本を被災地の子どもたちに届けるボランティア活動をしていた私は、えずこホール（仙南芸術文化センター）の水戸雅彦所長から「東京都による芸術文化を活用した被災地支援事業（Art Support Tohoku-Tokyo、以下ASTT）」のために働かないかというお誘いをいただいた。事業の企画主体である「東京文化発信プロジェクト室（以下文プロ）」というところは、東京の街中で市民とともに取り組む「アートプロジェクト」というものをしているらしい。えずこホールは、ASTTの宮城県事務局を担当していた。よくは分からなかったが、少しでも被災したみなさんの力になれるならと、お引き受けすることにした。

私はそれまで、「アート」の分野に関わったことは無かった。演劇や美術鑑賞が比較的好きではあったが「普通の人より少しは詳しい」というレベル。1990年代から盛んになったという「アートプロジェクト」のことなど、まさに「初耳」だった。とりあえず、文プロのみなさんが言うことに耳を傾け、どんなことをしようとしているのか理解しようとする。文プロと協働することになる、現地で支援をする方々のことを知ろうと現場に通った。訪れた被災地ではどこも言葉を失うような光景に出会い、その被害規模の大きさに途方に暮れたが、現地の人たちはもう立ち上がって動いていた。過酷な現実の中に少しでも光を灯そうとする人びとと、そこに対して支援をしようとする人びとの間に

立って、現場と事業がなんとかスムーズに回るよう、分からないながらも一緒に走ってみた。そうして、瞬く間に4年が経過した。

この本に収録したインタビューは、この4年間に宮城県内でASTTと協働した9人の方に行ったものである。前半の4人（海子輝一氏、村上タカシ氏、八巻寿文氏、大島公司氏）には2014年の初春、後半の5人（岩間賢氏、阿部結悟氏、鈴木拓氏、澤野正樹氏、高田彩氏）には秋から冬にかけてインタビューを行った。それぞれ取り組みの内容は異なるが、CASE4のユイノハマプロジェクトとCASE6のARCT/ARCTでは同じプロジェクト内でも視点の異なった2人に話を聞いたので、7つのケースにおける9人の、現時点での声の記録となっている。

インタビューでは、人によって差はあるがおおよそ2時間程度、震災が発生してから3年間ないし4年間を振り返ってもらい、現時点での課題や思いを聞いた。ASTTが関与したのはその人のたどってきた時間のごく一部であるので、話の内容はASTTと協働したものに限らず、多岐にわたっている。話者の語り口も私との関係性によって異なっているが、そのままの雰囲気を感じながら読んでいただけたらと思う。

また、7つのケースは全て、状況も、アプローチ方法も、インタビューの立ち位置も、

ASTTとの関わり方も異なる。「被災地」や「支援」、「芸術文化」といった言葉で括ることのできない現場の試行錯誤を感じ取っていただけははずである。なお、CASE1からCASE6まではASTTとの協働事業は2012年度までに終了しているが、CASE7の「つながる湾プロジェクト」のみ、現在も事業を継続している。

何人かのインタビューが語っているが、震災から4年が経過し、他地域はもちろん、東北でも、記憶の風化が加速している。だが、現場はまだまだ現在進行形である。CASE1で海子輝一も語っているように、むしろ「まだ始まったばかり」である。めまぐるしく移り変わる「震災後の世界」を生きる私たちの、ある通過ポイントの記録として、9人の声に耳を傾けていただけたらと思う。

Art Support Tohoku-Tokyo コーディネーター 谷津智里

「MAP」被害状況と各CASEの地域

2

はじめに

4

CASE  
1 対話工房【女川町】

11

海子揮一(建築家)

12

CASE  
2 アート・インクルージョン【仙台市】

33

村上タカシ(MIX Lab代表)

34

CASE  
3 雄勝法印神楽舞の再生計画【石巻市雄勝町】

55

八巻寿文(せんだい演劇工房10-BOX二代目工房長)

56

CASE  
4 ユイノハマプロジェクト【石巻市桃浦】

77

大島公司(クリエイター、獵師、花火師)

78

岩間賢(美術家)

102

CASE  
5 井戸端会議〜201X年の山元町【山元町】

117

阿部結悟(一般社団法人からつとーほく代表理事)

118

CASE  
6 ARCT/ARCT【仙台市】

137

鈴木拓(boxes inc.代表)

138

澤野正樹(ARCT代表)

162

CASE  
7 つながる湾プロジェクト【塩竈市】

175

高田彩(ビルド・フルーガス代表)

176

おわりに

196

解説 もつひとつの4年間

200

【資料】Art Support Tohoku-Tokyo宮城 実施記録

204

写真クレジット・URL一覧

207

# 1 CASE

## 対話工房

---

女川 *— Onagawa —*

対話工房は「日常を失ってしまった人々に  
表現と対話の場を共に作り出す」ことを目標に  
女川町で活動する団体である。

建築家の海子揮一が、女川町で津波被災した岡裕彦の  
自宅兼店舗の設計者だった縁から、  
海子の知人であったアーティストや  
メディアクリエイターに協力を得て結成された。  
津波の被災地域の中でも甚大な被害を受けた女川町で、  
町内外の人びとの交流の拠点となる  
コミュニティカフェの活動支援や、  
津波で被災した家族がお盆に自宅跡地で  
小さなたき火を囲む「迎え火プロジェクト」など、  
小さくとも顔の見える関係を長く継続することを  
大切に活動が特徴的である。

女川の人びとはお祭り好きである。住宅総数の実に90%が被害を受けた町で震災から1年後に行われた「復興祭」はたいへんな人出で、津波が市街地を根こそぎ浚ったままの灰色の平地に車の灯が長く連なる光景は、この町の底力を感じさせずにはおかなかった。対話工房のメンバーの一人である岡裕彦は女川町で生まれ育ち、祭り好きの男たちが夜な夜な集まるバーの店主をする傍ら、町の獅子舞の中心メン

バーを担ってきた。対話工房の活動はこの岡と、名取市(宮城県南部)に住む建築家の海子揮一が旧知の仲だったことに端を発している。岡とその仲間たちは、被災後の女川でも当然、キーパーソンとなる。海子のもとに沖繩、京都、東京などから集まったアーティストやクリエイター達は、コンスタントに女川に通いながら彼らの声に丁寧に耳を傾け、規模は小さくとも確かな手触りのあるいくつか

のイベントが生まれた。

女川の人びとは一見明るく社交的だが、海子が語るように思いは一樣ではなく、心の中に抱えるものは計り知れない。定期的に他の土地から通ってくる「仲間」と語り合う時間と、故郷を知るための小さなイベントが、彼らが長い道程を行くためのささやかな日常を支えていくのかもしれない。



## 海子揮一

Kiichi Kaiko

建築家

宮城県出身。世界の民俗建築を巡る大陸横断の放浪を経て、建築設計の実務に携わる。主に住宅・店舗のデザインを手がける傍ら、「アート屋台プロジェクト」、「対話工房」を立ち上げ、人と土地の新しい関わりの場を作り続けている。

海子 2006年に、今「おちゃっこクラブ」

(※1)を切り盛りしていて対話工房のメンバーでもある岡裕彦さんの、ご自宅兼店舗のリフォームデザインをさせていただいたのが、女川とのもとの関わりでした。海に近いのもわかっていましたから、震災が起きた直後からとても心配をしていたんです。2週間ぐらい経ったところで岡さんと連絡がついて、その後4月に炊き出しの一員として女川に来て、岡さんと再会しました。

来る前に「自分ができることは何だろう」とずっと考えていて、もちろん岡さんのこれからの生活が一番心配ではあったんですが、同時に、福島原発事故で僕らが偏った情報に振り回されていた状況があつて。女川に原発(※2)があることは知っていましたので、原発があることで女川のありのままの情報が伝わりにくくなっているのではないかという危惧もあり、その二つが、女川に来て何か関わりたいと思った動機でした。

岡さんの所に行くとき、震災以前から取り組んでいた「アート屋台プロジェクト」(※

3)のコンセプトで何か関われないかと思つて、1枚のスケッチを持参して行きました。

移動式の屋台でカフェを営んでいるような絵なんですけれど。僕は建築の設計士ですが、設計士として関わることは難しいだろうと確信していましたので、アートの可能性で何か、岡さんや女川の人が希望を生み出すようなことができないかと考えて、その話を思い切つて岡さんに切り出したところ、「ちょうどそれを求めていた」と言われたんです。当時、岡さんたちは体育館で避難所暮らしで非常に疲労が積み重なっている状態で、「愚痴も泣き言も笑いも交わせる場所がない」と嘆いていた、ちょうどそんなタイミングでした。それで、スケッチが岡さんの手に渡った直後に、女川町復興連絡協議会が官民をつなぐ組織として立ち上がることになった。その立ち上げの会議で、町長とか協議会の理事の前で岡さんが絵を見せて、人が集まれるカフェの必要性を力説して、それが「おちゃっこクラブ」を作るきっかけになったんです。その3

カ月後ぐらいに、企画段階から関わってほし

※1 女川町のコミュニティスペース。

震災後、女川町地域医療センター内にできたプレハブを利用してオープンした。

※2 東北電力の女川原子力発電所。

※3 海子が2008年から参加している、宮城県仙南地域の住民有志による活動。地域住民の相互理解やコミュニケーション、地域資源の再発見を目的に、文化ホール、公園、駅前広場などでオープンな形式のアートイベントやワークショップを行っている。

いとお話をいただきました。その頃、東北に對して思いを寄せる全国の友人たちが連絡をくれていて。その中でも「アート屋台」の主旨を理解してくれる人、被災した女川でちゃんと一緒に対話をして共感して、外にもリアリティーを持って伝えてくれる人に関わってほしいと思って、最初に相談したのが美術家の小山田徹さん(※4)だったんです。それで小山田さんを女川にご案内して、小山田さんが教鞭を執られている京都市立芸術大学の学生たちと9月に「手遊び(てすさび)カフェ」というのを仮設住宅で開きました。そのときに、プロデューサーであったり、映像とか写真をやっている今の対話工房の核となるメンバーが集まって、「人が対話する場」を創ること、あるいは「女川の状況をリアリティーを持って伝え、人をつないでいく」ネットワークを作ろうという話をして、対話工房ができたわけです。

その頃に「おちゃっこクラブ」の建物がありましたんですが、当初は単純に病院に来た人が休む場所として箱だけが用意されたので、内

装は非常に無機質であまり居心地がいい空間ではなく、どうしようかと思っていた時にASTTの支援があるというお話を聞いて。それで、住民の方にも参加してもらうコミュニティカフェ・ワークショップ(※5)を2011年の11月から行って、居心地のよい場所になるよう手を加えていきました。

**谷津** ワークショップを通して、岡さんが「必要だ」とおっしゃった「人が集まる場所」「つながる場所」を作り始めたんですね。

**海子** そうですね。もともとの岡さんのお店は「ダイヤモンドヘッド」というんですが、昼間はカフェで、夜はライブなどもやっている、いつも近所の人たちが集まってワイワイ話を交わしているような非常にぎやかなお店だったそうなんです。女川の人たちが夢や希望や悩みを交わし合う、手作りの対話スペースだったんですね。だから、そういう場所を再生させることがこれからの女川に必要だというのが、復興連絡協議会の方にもすんなり受け入れられたんじゃないかと思います。

**谷津** 協議会の皆さんも「ダイヤモンドヘッ

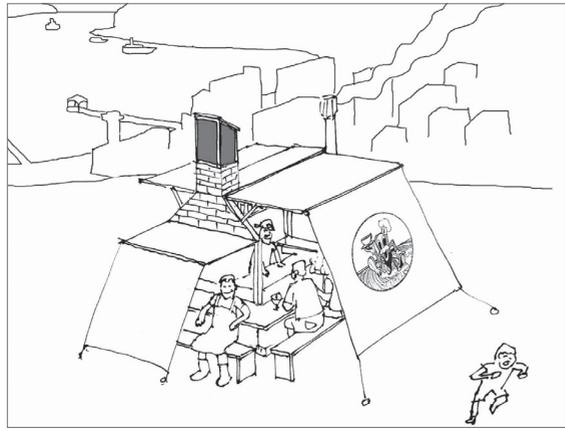
ド」に集まっていたメンバーだったんですか？  
**海子** そのようです。「次の『みなと祭り』をどうしようか」とか「シャッター街をどうしていこうか」とか、酒を飲み交わしたりドンチャン騒ぎをしながら語り合っていたらしいです。僕は当時は設計でしか関わっていませんでしたので、知っているのは岡さんだけだ

ったんですが、建物が存在していた約5年間の間に、町の中に迎え入れてもらえる下地が出来ていたのだと思うと、とても幸運だったと思います。

**谷津** 「おちゃっこクラブ」は今、「ダイヤモンドヘッド」が果たしていた機能を果たしているんでしょうか。

**海子** それ以上に機能しているんじゃないかと思います。お酒を出せないとか、昼のみの営業というところは大きく違いますが。病院にきた方や、離島に行くのに船が出るのを待つ方なんかをここを利用して、何気なく話したり無料でお茶を飲めますので、まず町内の対話の場として機能していると思います。それだけではなくて、女川を一望できる場所なので、町外から来た方がまずここを訪れる。それで、町内の人と町外の人が出会う場にもなっています。時々ここにきて座っているだけで、そういう光景が展開しているのを見られます。それは前のお店にはなく、震災後だから生まれている状況です。

**谷津** 外とつながれるポイントになったんで



海子が岡に見せたスケッチ(海子揮一画)



震災前に岡が営んでいた「ダイヤモンドヘッド」(海子揮一設計)

※4 対話工房メンバーで美術家、京都市立芸術大学教授。

※5 2011年11月から2012年2月にかけて4回実施。住民と現地フィールドワークやワークショップを行い、おちゃっこクラブのプレハブの内壁を漆喰で塗るなどした。

2012年1月、おちゃっこクラブのある高台から女川港を望む。ここにはかつて街があった。



すね。

**海子** そうですね。意識も変わったと思います。「ダイヤモンドヘッド」のときは、店の中が通りから見えないようにしてほしいというのが岡さんの要望だったんです。昼間にお茶を飲んでいると「なんだあいつ、暇なのか」って言われるからと。意識が閉じていたんです。ここが引き渡された時は、窓が全部曇りガラスだったんですけど、やっぱりこういう眺望のいいロケーションですから透明にしようということになって。内側目線だったのが、外に向けて窓を開けようという意識になったのは「おちゃっこクラブ」だけの話ではなくて、震災後、そうせざるを得ない状況になったんだと思います。そういう外に開いたコミュニティスペースというのが、「おちゃっこクラブ」ができた後、僕が知っている範囲で5、6軒できてますよね、女川町内に。ただ喫茶店をやるだけじゃなくて、衣料店がカフェコーナーを併設してるとか、デザイン事務所がカフェコーナーをやっていたり。「おちゃっこクラブ」が一つのモデルになっ

たんじゃないかと思ってるし、そうであってほしいと思っています。

**谷津** 対話工房は全国にメンバーがいて、少しずつでも長く通い続けることで顔の見える関係になって支援をしていくんだと、当初からおっしゃってましたね。岡さん自身も対話工房のメンバーとして、町外のメンバーと対話をしながら活動されてきたわけですが、全国のメンバーと女川のメンバーがつながることが、どんな影響を与えているんでしょうか。  
**海子** 町外のメンバーとの出会いによっているんかなと。生まれてるのが一番大きいんじゃないかなと。「迎え火プロジェクト」は特にそうですね。お盆の時期に、震災前まで町があった場所でご家族で小さなたき火を囲んでもらうというものなんですけど、これは「おちゃっこクラブ」を作っている最中にみんなで鍋を食べたときに出た話から始まっていて。小山田さんは以前から、強力な共有空間を発生させる「小さな火」の魅力に着目していたし、鈴木さん(※6)は人を迎え入れるようなイベントができないかと思っ

ました。

た。それと、震災直後にみんなでたき火を囲んだ時になんともいえない安心感があつたとか、希望の灯に見えたっていう感覚を、なるべくつないでいきたいと。どうしても時間が経つと忘れていきますので、お盆にはもう一度、火の周りに集まって、3月11日やいなくなってしまう人を偲ぼうということになり



おちゃっこクラブ内観。海に向かって大きく窓を設け、屋外にはデッキも作った

「うみやまさんぽ」という企画もそうやって生まれました。対話工房で地域研究家の山田創平さん(※7)をお招きして、女川の歴史の調査をしていたときに、出島(※8)にある縄文時代のものといわれている石の遺跡を見ていただいたんですが、「これは古代人の歴だったんじゃないか」ということだったんですね。遺跡がある山のちょうど向かい側に、尖った三角の石投山という山があるんですけど、遺跡のある場所から見ると、夏至の太陽がちょうど石投山の山頂に沈むんじゃないか。逆に石投山から見ると、遺跡のある方向から冬至の太陽が昇るのではないかと。その話を、しばらく経ってから女川ネイチャーガイド協会(※9)の藤中郁生さんにお伝えしたところ、「非常に面白いからぜひ確かめたい」ということになって。それで、プロジェクトにして参加者を募って、冬至の日に石投山に登ったんです。対話工房で招いた人が発した言葉に住民の方が夢とロマンをいだいて、これまでと違う視点でもう一

※7  
地域研究者、社会学者、京都精華大学人文学部総合人文学科准教授。対話新聞(後述)で連載をしている。

※8  
女川町の離島。女川港から高速船「しまなぎ」で約20分。

※9  
女川町の山林自然環境を守りながら新たな観光資源として活用する目的で活動している団体。

度地元を見てみようというアクションになった。女川の方が今まで見ているようで見えていなかった自分たちの暮らしの文化だったり魅力をも、外からの目線で新たに発掘するきっかけになったと思います。

**谷津** 地元の方が興味を持って動き出して、対話工房が支援してプロジェクトが始まったんですね。

**海子** そうですね。まあ今回はノリでやったようなところも大きかったですけど(笑)、募集をしたらずくに、参加者が10人ぐらい集まっちゃったんですね。今回の話は空想に近いことかもしれないですが、土地の歴史というものにはそのぐらい、ワクワクするものがあるんですね。真冬の夜に山に籠って朝日を眺めるなんて、そういう機会でもなければやろうとも思わないと思うんですよ。

**谷津** それで、日の出は確認できたんでしょうか？

**海子** できなかつたんです(笑)。前の日、雪が降って登山自体が危うい状態でしたが奇跡的に晴れて、みんなで山の上で待ったんで

すけど、低気圧の雲が水平線上に垂れ込めていて、よく分かりませんでした。

**谷津** じゃあ、また今年確認しないとですね(笑)

**海子** はい(笑)。でも、非常に良い時間でしたね。山に登ってみて、自分たちはまだまだ女川のほんの一部しか知らないとわかったんですね。やっぱり町と人というのは、共通の自然なり歴史をバックグラウンドに持っている、その安心感というか、無意識に共有しているものに支えられている部分が確かにあると感じました。

今、復興のための工事で町民の方の活動エリアはどんどん狭くなっています。震災直後から復興連絡協議会の鈴木さんが「子どもたちの安全な通学路が欲しい」とか「遊び場が必要だ」とおっしゃっていたんですが、それは今でも、というか、さらに窮屈な状況になっています。それから、離島の出島に何回か通っているうちに、同じ女川町内でも半島部と島ではかなり意識に違いがあるのも分かりましたし、島に残った人々と出て行った人々では

180度違う声が聞こえてくる。女川では流出人口をどうするかが今一番大きな問題で、それを考えないと未来も描けない。そういったことを考えると、やっぱり女川町内の地域間でお互いを知るきっかけを作ることが、今の時期は、より必要なんじゃないかと思います。

**谷津** 対話工房の活動に関わりを持ってくださる町民の方は、ずっとここで暮らしていると思う方が多いように思います。もう少し冷めた目線で見ている方たちには関わってもらえていないという面はあるんでしょうか。

**海子** そこはありますね。「残りたいからいる人」と、「残れるからいる人」と、「出られないからいる人」がいるんですよ、今の女川には。もともと非常に陽気で祭り好きな町民性なので、決して暗い話では語らないですけれども、心の中にはいろいろ抱えている。心の底に潜んでいる思いに耳を傾ける意味でも、少しでも長く顔の見える関係を続けていかなくてもならないと考えています。

**谷津** そうですね。対話工房は、町を復興さ

せようと行動し続けている鈴木さんや岡さんのような方たちの「こんなふうになりたいんだ」という話を定期的に聞いて、いろいろなスキルを持ったメンバーがそれぞれの得意なことです。少しずつ実現を支えている。全体としてはそういう活動なのかなと思います。

**海子** 「地元の人の表現を取り戻す」というのが対話工房の理念のひとつです。表現というのは、必ずしも絵を描くとか、文章を書くということではなく、草花を愛でるとか、あるいは、生きがいを持ってできる仕事を見つけてるとか、そういうことも「表現」だと考えてるんですよ。1人だけではできなくて、その人を取り巻く家族だったり友達がいって、その中で何かしらの自己表現をすることを通して対話も生まれる、そんなことです。町が分断されている今の状況を考えると、例えば山歩きや歴史マップの活動にしても、自然を守るためとか健康増進のためだけじゃなくて、「あ、こんなに妄想全開で歩いてもいいのね」なんて楽しめるような、そういうものを提案していきたいですね。時間はかかる

とは思いますが。

**谷津** 外の人間がやってあげるのではなく、地元の人たちでやれるように手渡していくことを意識してやりたいとも言われていたが、その辺りについてはいかがですか。3年間やってきてみて。

**海子** 岡さんとか鈴木さんとか、いわゆる町のキーパーソンになる方とずっと懇意にさせていたでるので、何か企画をする際には彼らが地元の若い人や、もつと上の人とのハブ的な役割をしてくださっています。それがもつと自然な形で町の新しい習慣だったり、催し物として定着していくには時間がかかるだろうとは思っています。今はいたるところで仕事をしていたりして状況が常に変わっているので、「迎え火」も今年(2014年)はまだ会場をどこにするのか決められない状態なんです。非常に流動的です。でも嬉しいことに、「今年も手伝いますよ」という声は町内外のいろんな人からいただきます。だから共同作業でいいんじゃないかと僕は思っています。外から来る人と一緒に一つのを創る



「迎え火」の風景。かつて自宅があった場所で小さな火を囲む家族

ということが、希望になってるんじゃないかと。岡さん、鈴木さんが「(「迎え火」を)50年、100年やるう」と言っている以上は、もう対話工房メンバーは来なくちゃいけないな、と(笑)。参加できるメンバーや状況は変わっていくとは思いますが。最終的には、復興した女川の各家庭の玄関先で、それぞれに小さ

な火がたかれている状態を目指したい、という話をしています。

**谷津** 「迎え火」の運営体制はどんな感じなんですか？

**海子** 主催は女川町復興連絡協議会で、共催として対話工房。あと協力で京都市立芸術大学とか、いろんな他の協力団体の方がいらっしやいます。町内だと女川の若者で組織している「女川福幸丸」という団体だったり、外から人が来てもらうきっかけにしたいという地元の方の希望があったので、観光協会も入っています。最初は地元主導でやってもらいたいというのがあったんですが、実際のマネジメントは対話工房でやらなければならなくて、理念と実態のズレはあったように思います。あまり急に地元の人に全て任せるということではなく、対話工房がやらなくちゃいけないものはやろうという感じですね。

**谷津** 「迎え火」への地元の方たちの反応はどうですか？

**海子** アンケートを読んだり、実際会場でお会いした人のお話も聞きましたが、それぞれ

一人一人、各家庭ごとに、思いは違ってきますよね。ただ、「迎え火」に参加したことで久しぶりにご近所さんと顔を合わせた、という声を一番多く聞きました。

**谷津** それだけ、震災前とは生活の状況が変わってしまったっているんですね。

**海子** そうですね。1年目のときは、まだ敷地の境界や基礎など、自分たちが暮らしていた家のイメージが残っている状態だったんですけど、2年目になると土地を売却してしまってる人もいて。そうするとやっぱり意識も離れてしまうということはあるみたいですが、自分の場所ではないという感覚になってしまふのかもしれないですね。

**谷津** 「震災によって見えない境界線ができてしまった」ということはいろいろなところで言われていて、対話工房はそれを個人的なレベルでいいから乗り越えて、顔を合わせて話をする場を作ることいろいろなプログラムで取り組んで来られたと思いますが、全体としてどのような成果があったと考えていますか？

**海子** 成果ですか。成果は：なんでしょね。小山田さんと最初に女川に来たときから、お金だったり制度だったりというものが、被災者の方を津波の第3波、第4波のように襲うだろうと話していて、そういうった困難が来たときに抗う手段として対話の場が必要だというイメージはあったんです。で、まさしく今抗っている状態なので、まだ成果としてはなんとも言えないような気がします。本当にまさしく今、第3波、第4波が押し寄せていると強烈に感じていて、これからは本当の正念場だと思つてます。制度というのは線を引かざるを得ないもので、でもどんな人が線を引いても、誰もが納得できるようなものにはならない。それが、各個人の経済状態だったり家庭環境だったりあるいは哲学というか考えなり感情なりを分断していくんですよ。補助金を受けられる人、受けられない人、商売をやるのに場所を借りられる人、借りられない人、通っていた小学校が閉校した人、そういうものが、今、新しい町を作つていこうとする過渡期にあつて非常に軋轢を生んでいる

と思います。それに耐えられなくて町外に出ていく人もいるし、商売をするためには人口が多い所に行こうと考えて町を出ていく人もいます。震災から3年経った今、まさに分水嶺になつていていると思います。震災直後はみんなつながっている感覚があつたけれど、仮設住宅に入ったり、それぞれが働き口を見つけていく中で、あの時の空気が薄らいでいってしまうという声は、随分早くから聞いてはいたんですよね。それは日常が戻つてきたということなのかもしれないんですけど。治りかけが一番つらいというのは、なんでもそうだと思いますよね。

**谷津** 成果が出るのはまだ先だということですね。ではこの3年間を振り返つて、対話工房の活動でできたこと、「これはできたな」と思うことは何でしょうか？

**海子** 「居場所」は作れたと思いますね。それは町民の方にとつてだけではなくて、町外のメンバーにとつてもなんです。非常に基本的なことかもしれないですけど、安心して訪れられる場があるというのは、誰にとつて

もやはり大事だと思うんです。安心できる環境がなければ、当然対話も生まれえないし、自分の言葉を安心して吐くこともできない。それはできたんじゃなかなと思ひます。普段の暮らしの中で、居場所を作ろうと思つてやることつてなかなかないと思うんですね。だいたい気がつかないうちに身の周りに纏つていたり、包まれたりしているものだと思うんです。それが突然あらざら流されてしまった女川の方たちは、よりその大切さを実感されていると思ひますので、それを目に見える形で取り戻すことを「迎え火」だったり「コミュニティカフェ」といったアクションで示せたというのは、一つの成果だと思います。このあいだ、親しくさせていだいて奥さんから「対話工房さんのように、女川が楽しいって言つて来てくれる人つて本当にありがたいんです」って言われたんです。そう言つていただけるのはこちらも非常にありがたいなと思つてお聞きしたんですけど、楽しいとか、ドキドキワクワクする気持ちを感じるだけの余裕がなかなかないと

いうことだと思ひますよ。来年はどうなつてるんだろうとか、10年先、20年先はどうなるんだろうということではいづばいになる。本当にずつと頑張つていて、無理されると思ひますよね、皆さん。それを「無理をするな」とはとも言えないので……。だから、たき火のようにちよつとホツとするような、ちよつと足を止めるようなものというのが、際立つて見えるんだと思ひます。

**谷津** 火をたいてそこに人が集まるような、ちよつとした余白が必要だと町のみなさんが感じられているからこそ、対話工房が受け入れられているということでもありつつ、町民の方が自分たちでそれをやつていく余裕はまだ無いということかもしれないですね。

**海子** そうですね。発信したり、語れる人はまだバランスが取れてると思ひますけれど、本当に引き籠もられているようなお年寄りとか障がいを持つてる人とか離半島部の方つていうのは、まだまだ表現を取り戻すのに時間がかかると思ひますよ。岡さんが4月からキッチンカーで仮設住宅を回るんですが、ま

さしく、最初のイラストの屋台のイメージにエンジンが付いた。3年たって、ようやく最初にやろうとしたことが始まったのかなと思ってるんですよ。本当に始まったばかりなんです。それを一つの成果と言ってもいいんですけど、ようやくスタートラインに立ったということでもあるんですよ。それだけ時間が必要なんだと思います。

ういう中で、東京や京都や沖縄にいるメンバーが変わらずに真剣に女川を思い続けてくれていることは本当にありがたいと思つています。距離は変えようもないし、日常は共有できないんですが、女川を想う日常をそれぞれが送るようになった。対話工房のメンバーも、女川での共通体験があつて初めてみんなで話し合える。女川の日常のために何ができるのかを、メンバーとも地元の人とも辛抱強く対話しながら考えていかないといけないと思います。

**谷津** 海子さんは宮城県に居て、女川の方と、対話工房のメンバーをつなぐ役割を果たされていると思うんですが、県外のメンバーの方たちには、この3年間の間に何か変化はありましたか？

**谷津** 草本さん(※10)が岡さんの息子である鈴之助さんの写真をずっと撮り続けることを決めて行動していたり、今年から対話工房で制作している「女川カレンダー」にも写真を提供していますよね。あれは本当に、自分

**海子** あの震災では京都ですら揺れを感じたんですよ。ある意味日本全国が震災を体験し、被災地に共感できるベースがあつたと思うんですけど、やはりそれは時とともに、当たり前ですけど、遠い所から薄らいでいくんですよ。3年経過した今、被災地を語る言葉が伝わりにくくなってるんじゃないかな。それも自然なのかなと思うし、なんとかならないかとも思うし、そのせめぎ合いです。そ

で見つけた例だと思えます。住民の方が「女川カレンダー」(※11)をちゃんと冷蔵庫の所に貼ってくれていたというお話も聞いたんですが、外からの視線で女川のいいところをすごく綺麗に撮った写真がもらえたら、やつ

ぱり嬉しいだろうなと思います。

**海子** そうですね。距離を隔たりに変えないで、可能性にしたいんですよ。それは最初から思っていたことですし、いろいろな方法でうまく噛み合わせていきたいと考えてるんです。小山田さんが勤める京都市立芸術大学では震災があつてから毎年チャリティーオー

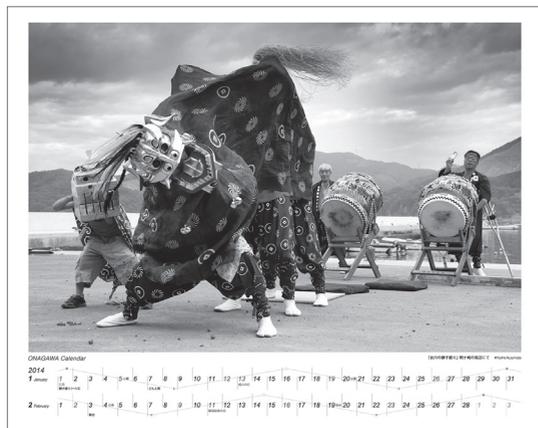
クションをしているんですが、去年はそこからいただいた寄付金で京都と女川をさらにつなぐような枠組みを作りたいということ、京都の学生さんたちに2カ月に一度女川に来てもらいました。今年はまだ少しそれを広げられないかと考えています。交換留学のよう

なものを構想しているところですね。そうした交流をしているうちに、女川を全く知らないかった京都の学生が女川を自分の故郷のように思ってくれるとか、逆に女川の人が、京都で水害が起きたとなれば心配して声を掛けるという関係が、少しずつ生まれてきています。

**谷津** 他にも対話工房の活動として、展示やトークで女川のことを伝える場を持つということをしていました。

**海子** 1年目は神戸と沖縄でトークをして、

東京ではアサヒ・アート・フェスティバル(※12)の企画で登壇する機会が2、3回ありました。あと、ドイツのハイデルベルグ。吉田美弥さん(※13)というキュレーターの方が小山田さんと昔からの友達で、東北の今をハイデルベルグ市民と共有しているこうと企画を



対話工房メンバーの写真家・草本利枝による写真が美しい「女川カレンダー」

※10  
対話工房メンバーの草本利枝。京都市在住の写真家。

※11  
2014年から対話工房が隔月で発行するカレンダーで、写真家の草本利枝が女川を撮影した写真を全面に配している。裏面は対話工房企画・編集による女川町のコミュニティ情報紙「対話新聞」になっている。

※12  
全国の市民グループやアートNPO、アサヒビールなどが協働で2002年より開催している。

※13  
インディペンデントキュレーター。ドイツ・ベルリン在住。

持ちかけられて。少なくとも5年は、小さい規模であつても続けていこうと。ちょうど今、展示をしています。

**谷津** それらの「伝える活動」については、やってみていかがですか。

**海子** 伝える人の個人的な思いが伝わると記憶に残るし、女川での実際の体験から話し手に生まれた感情が、聞いた人が何か行動を起こす一番の熱、エネルギーのようなものになるのかなと感じています。感情的なものというのは冷めたり熱くなったり取り扱いが難しいものではあるんですけど、でもそれが無いと、今女川で起こっている一人一人の物語も単純にただの一つの情報としてしか伝えられないんじゃないかと思っていて。間に入った人が女川の人たちの声をどれだけ翻訳して聞く対象に伝えられるか。伝えるメンバーそれぞれに関わり方だったりスタンスだったりスキルが違うので、それぞれの表現方法で伝えていますね。別府で一昨年の10月に「ベップ・アート・マンス」(※14)というアートのイベントがあつたんですけど、そのときは岡さん

が暮らしている仮設住宅の間取りを原寸大でギャラリー空間に描きました。別府は草本の故郷なので彼女を中心に、女川の人はどういうことを感じているのかとか、実際どういう暮らしをしているのかを、なるべくイメージしやすく伝えるよう工夫して展示し、フリートークの場も設けました。その時たまたま女川に縁のある方がいらしたんですが、とても感謝されました。「自分たちは遠い所に来てしまったけれど、こうして伝えてくれたので、知ることができました」と。女川を知っている方でも、遠くにいると今の状況を共有するのは難しいんだと思いますね。

**谷津** 全く知らない人であればなおさらですよ。テレビであれだけ津波の映像を見ていても、その結果現地がどういことになるかということまでは想像力が及ばないものなんだと、私もいろいろな場面で感じます。

**海子** そうなんですよね。女川で知ったり体験したことは僕にとつてはリアリティーがあるんだけど、その体験がコミュニティの壁になるときもあります。知らないことが

劣っているわけじゃないんだけど、伝わらないもどかしさはあつて。同じ感情を伝える言葉でも、一方通行の発信で終わったら、余計にその溝は深まっていくんじゃないかな。

来場者の方が「触れたくても触れられない日常」に直面する上でのブリッジになれるような発信方法を考えています。今回は震災の被害を受けていない所でも、これから先何か大きな災害が起きるかもしれないというのもあるし。沖縄では戦争の災下を生き抜いてきた方たちにお会いして(※15)、そういう人たちが震災を考えるとときにどんな言葉を発するかというのは、逆にこちらが本当に聞かせてもらいたくて。女川から伝搬するだけではなくて、遠い先から逆に学んで持ち帰ることもできるわけですよ。伝えることと聴くことを両方意識して、発信だったり展示をしないといけないとは思いますが。

**谷津** そうやって、分断されてしまったものをつなごうとする活動をされながらも、時間の流れや「制度」が溝を広げていく感覚があるんじゃないでしょうか。

**海子** そうですね。抗っている気持ちはありますが、どうしようもないこともある。例えば忘却というものは、人にとつて救いの面もありますよね。だから、あまり悲観してもしようがないかなと思っんですよ。むしろ山登りをした、その瞬間瞬間のホッとするような笑顔だったりとか、寒い夜にたき火をしながらみんなでカップラーメンを食べて火にまつわる思い出を交わしたりとか、くだらない話で笑い転げたりとか、そういう小さな共通体験がもつと個々に生まれるようにしていきたいです。

**谷津** 3年が過ぎて、この後やっていきたいと思われることはありますか？

**海子** 女川町民の方がよりお互いを知って魅力を高め合うようなきっかけ作りがしたいですね。「対話新聞」を始めたのは、そういう理由もあります。「女川の良さ」が復興後の町でも残るように。それは外の人間の一方的な視点かもしれないけれど、女川の人もそれを守りたいと思っっていると思うし、そういう女川の人々を対話工房のメンバーも愛してい

※14 大分県別府市内で開催される、文化・芸術に関わるイベントを集めた市民文化祭。NPO法人BE PUPU PROJECTが運営。

※15 2012年5月に沖縄市で「災いの彼方此方 オナガワ×オキナワ 故郷の行方」と題したトーク・写真・映像展示を行った。



# 2 CASE

## アート・インクルージョン

仙台 - Sendai -

アート・インクルージョンは「障がいのあるなし、年齢、性別、国籍、アートの基礎知識やスキルなど関係なく誰もが自由に参加できるバリアフリーのアートプロジェクト」を掲げ、仙台市の副都心である長町地区を中心に活動している。商店街の関係者をはじめ、アートNPO、福祉NPOおよびその他の賛同者が協働で組織しており、音楽と美術（アート）を通して障がい者の社会的自立を支援し、人にやさしい街づくりを行うことを目指す。東日本大震災後、もともとの活動地域であった長町地区に大規模な仮設住宅が建設されたため、仮設住宅を含めた周辺地域一帯を意識したプロジェクト展開を行っている。

### 対話工房 | 活動の記録

2011年	3月	東日本大震災発生
	4月	海子揮一が女川町に岡裕彦を訪ねる
	9月	小山田徹らが「手遊び屋台」を実施。対話工房が結成される
	11月～	「女川コミュニティカフェプロジェクト」実施
2012年	3月～	「常夜灯～迎え火プロジェクト」開始
	8月	「女川常夜灯2012(迎え火プロジェクト)」開催
	10月	「触れられる未来in九州」展開催(大分県別府市)
2013年	3月	海と山と火の物語企画第1弾「やまさんぼ春分」実施 地域研究家・山田創平氏と女川の地域研究を開始
	8月	「迎え火プロジェクト」開催
	12月	うみやまさんぼ2「冬至・縄文キャンプ」を実施
2014年	1月	「女川カレンダー/対話新聞」発刊開始
	6月	うみやまさんぼ3「夏至・出島キャンプ」開催
	8月	女川常夜灯2014「送り火プロジェクト」開催
	11月	トーク「対話工房の「対話の場」東北沿岸・女川町から」 開催(大分県別府市)
	12月	うみやまさんぼ4「冬至・縄文キャンプ」実施

※他にも多数のトークや展示に参加

村上タカシが関わる現場は、量で他を圧倒している印象がある。取材時に手渡されたチラシは十数枚におよび、その口からは次から次へと異なる企画の名前が飛び出してくる。また、彼が手がける現場はポップである。障がいを持つ人によるアートやサブカルチャー的な作品、若手芸術家によるコミュニティアートなどを垣根なく取り入れ、いつも忙しそうだが、何よりも本人が、そうした状況を楽しんでいる

ように見える。

「被災地支援」を仕事としてやれる人は少ない。ほとんどの人が、収入源である仕事と二足、三足の草鞋を履くことになる。有名人の慰問ラッシュによる「イベント疲れ」が多くの被災地で問題になったが、そうした一発火花ではない長期的な支援を地元の支援者が継続するためには、そのための条件が整う必要がある。アート・インクルージョンは、それを福祉業界と

の連携という形で軽やかに実現させ、開催実績を積み重ねることでイベントの存在を定着させているのだ。

一見雑多なその現場に批判的な人もいるかもしれない。だが、町に広く受け入れられ、広報力を持ち、長く活動する基盤を作っているという点において、村上は間違いなく、他の者ができていないことを実現している。



## 村上タカシ

Takashi Murakami

MMIX Lab代表  
アート・インクルージョン理事  
宮城教育大学准教授

熊本県出身。美術家として東京で活動し、国内外の展覧会やアートプロジェクトに多数参加。2003年より仙台でまちを使ったアートプロジェクトなどを協働で展開。東日本大震災以降、震災を後世に伝える「3.11 メモリアルプロジェクト」やアートを運ぶ「アートポンプ計画」等を展開中。

**村上** アート・インクルージョンがスタート

したのは震災前なんです。2010年の夏に実行委員会ができて、11月に長町(※1)で第1回目をやりました。もともと付き合いがあった福祉系NPO法人「ほつぶの森」の白木さん(※2)から「長町でバリアフリーのアートフェスティバルみたいなことをやりたいから手伝ってくれないか」と言われたのがスタートですね。それでいろいろ話を聞くうち、白木さんの考えていることは「ソーシャルインクルージョン」(※3)だと思つて。じゃあ、アートとソーシャルインクルージョンで「アート・インクルージョン」というのはどうでしょうと提案したらそれが通つて。商店街も主催に入つてもらつてアートフェスティバルをやったのが1回目なんです。そこへ翌年に震災が起きて、長町に「あすと長町」という巨大な仮設住宅が5月くらい、すごく早い時期にできたんです。233世帯で450人ぐらいの大きな仮設住宅です。「アート・インクルージョン」は「障がいのあるなしとか国籍とか性別とか専門的なスキル

のあるなしに関わらず、アートで町を元気にしよう」という企画ですから、震災で他の土地から避難してこられた方々もインクルードするのが当然だろうということで、自然と仮設住宅への支援が始まりました。

それと震災直後に、僕らも含めてこの辺りで活動していたNPOが参加して仙台宮城緊急支援対策本部ができて。物資が山ほど来て、それを仕分けして配送していったんですけど、そのときのつながりから「3.11NPO+」(※4)というNPOの連携体ができたんです。そうやってアート関係以外の支援団体とのつながりが震災を機にできていたことも、仮設住宅支援に自然な形でつながったと思います。

「あすと長町」ができて、福祉系のNPOや生活困窮者支援のNPOは、見守りなどそれぞれの専門領域の活動を始めました。僕たちは「アート・インクルージョン」を知つてもらうために、まずは仙台市の社協(※5)と組んで「隣人祭り」という企画を5月の末ぐらいにやりました。仮設住宅の方たちと「まずはご飯を一緒に食べましょう」とい

※1 仙台の副都心である長町地区。

※2 障がいのある人の就労支援をしている「特定非営利活動法人ほつぶの森」理事長の白木福次郎。

※3 社会包摂。

※4 NPO法人ワンファミリー仙台(社会的生活困窮者支援)、NPO法人ほつぶの森(障がい者支援)ほか、複数のNPOが連携し、行政の手が行き届かない指定外の避難所への物資提供など支援活動を行った。

※5 社会福祉協議会。

う会だったんですが、そのときにちょっと音楽をやったりもして、6月5日に駅前広場でやる予定だった「アート・インクルージョン」の紹介をして、会場で使える「プロジェクトマネー」を1人3000円分ぐらい配りました。当日は、環境系NPOはフリーマーケットをしたり、福祉系NPOは体を動かすブラスや法律相談をやったり、僕らは子どもが楽しめるワークシヨップとか、歌とか踊りのプログラムをやったんですけど、そこに仮設住宅の人にも来て楽しんでもらうという企画でした。

そうやって仮設住宅への支援が始まって、じゃあ季節ごとにやりましょうということでも12月には「クリスマスプロジェクト」を「あすと長町」の中の広場でやって。その後も継続的に集会所でワークシヨップをやったりとか、お雑煮を作る会とか、おしるこを食べる会をちょこちょこやっていって、そこから「おしるこカフェ」という企画もスタートしました。以前から一緒に活動しているアーティストの門脇篤さん(※6)らが中心になって始めた

んですけれど、月1回、継続してやっています。集会所でおしるこを食べながらちょっと話をするという非常に緩い会です。それがおばちゃんたちの一つの憩いの場になっていて、おしるこを食べる以外にも、時々アート・インクルージョンメンバーの演歌歌手に歌ってもらったりとか、ワークシヨップをやったりとか、この間は振付家のジョー・パークスさん(※7)に来てもらって簡単なダンスをしたりとか。今はちょうどひな祭りの時期なので七段飾りをみんなで飾り付けしたりとか、クリスマス行事をやったりとか、正月だったらお餅をついたりとか、季節ごとに企画して。「仙台独自のお雑煮がある」という話が出たのをきっかけに、材料を朝市に買いに行つて一緒に作ったりとか。そんなコミュニケーション型の支援を続けてやっています。それから、僕はもともとMMIX Lab(ミミックスラボ)(※8)というアートの普及活動をしているので「アート・インクルージョン」の団体としての支援以外にも、仮設住宅の壁に絵を描いたりとか、芸大生が創つ

※6  
アーティスト。「まちとアート」をテーマに宮城県東鳴子・古川・仙台・横浜、東京足立区・歌舞伎町などで多数の街なかアートプロジェクトを手がけている。

※7  
世界各地で革新的な個人参加型ダンス・プロジェクトを行う振付家。

※8  
既成の芸術の枠組みにとらわれず、各種メディアを融合させ、アートと地域文化を結び創造的芸術活動を行う団体。

た「アート神輿」(※9)というのを敷地内に設置したりしています。結構住民の人たちも喜んでくれて、「なんか珍しいものが来た」と言つて写真を撮ったり、誰かが遊びに来たらそれらを案内したりとか、そんな感じで「アート仮設」というか、特徴ある仮設住宅になりつつあります。



おしるこカフェの様子

商店街と一緒にやるアート・インクルージョンのプロジェクトでは季節ごとにフェスティバルをやつていて、春には「サンキューアートの日」(※10)に合わせて、商店街の中に作品を置いて、それを見て回ろうという企画をやっています。駄菓子屋さんのアイドル写真の中に鉄道マニアの少年が鉄道写真を忍ばせたりとか、障がいのある人たちが描いたすぐくユニークな個性的な絵があるんですけど、それをパン屋さんに飾ったりとか、マップを持って商店街を見て回ると、いろんな作品が見れるんです。ライブペイントもあつたり、レストランでのライブもあつたり。そんな風にいるいろんなアートを扱っています。昨年までは「サンキュー・アート・ウィーク」ということで1週間やっていたんですが、今年からは開催期間を1か月にして「サンキュー・アート・マンス」になりました。商店街もすぐく協力的で、協力店舗が増えて、アートを置いているお店だけではなく、幟を置いてもらつたりポスターを貼ってもらつているお店を含めて、プロジェクトマネーは全

※9  
東京藝術大学で行われる「藝祭」で作られる神輿。通常は藝祭で街中を練り歩いた後に取り壊すが、「被災地に送って楽しんでほしい」という学生の意向を受け、実現した。

※10  
毎年3月9日をアートの記念日として、美術関係者がアートファンに対して感謝の気持ちを示す日になろうとする運動。



「クリスマスプロジェクト」で行った巨大バンケーキを焼くワークショップ

てのお店で使えるようになりました。くじ引きをやったら100Ai(※11)もらえて他のお店で使えるというようなこともして、商店街で循環が生まれるようにしています。そういう感じで、作品をつくっている人、いない人、障がいのある人、ない人を含めて、町の中を巡回しながら楽しめます。仮設住宅の「おしるこカフェ」でも「サンキュー・アート・マンス」のプロジェクトマネーをプレゼントします。それで商店街に行つて、お茶を飲んで帰るとか、買い物をしてもらう。アート・インクルージョンにはアートで町を元気にするという狙いもあるので、障がい者支援と街中でのプロジェクトがリンクするような形をとりながら、仮設住宅支援も、できる形で絡めています。

**谷津** それだけのイベントを、どういう体制で実施されているんでしょうか。

**村上** 最初、アート・インクルージョンの運営は助成金頼みでやっていたんですが、やっぱりそれだと長続きしないということもあって、2012年の12月に福祉作業所を併設

する形で一般財団法人にしました。福祉系のNPOと組んで、アートに特化した福祉作業所を創りました。障がいのある人を雇用して、ハンカチを折るような単純作業もしてもらうんだけど、絵を描いたり、歌ったり、踊ったりする時間があつて、講師がアートワークショップをしたりもする。そんな福祉作業所で、今メンバーが16名います。身体障がいの方は少なく、知的障がいとか、高次脳機能障がいなんかの人が多いですけれど、最初は2、3人でスタートしたのがだんだん口コミで増えて、今は16名になりました。

財団化は一つのギャンブルではあったんですが、通所施設にしたことで安定した収入が入るようになり、継続してできる仕組み、組織になったので、いろんなことができるようになってきています。長町だけじゃなく、この界隈にある本町商店街でもこの間の冬に、作品を置いて見て回る企画を「ちい展」という名前でやりました。それも評判が良くて、また来年もやりましょうということになっています。あとは錦町公園で、「どんどこ市」

という福祉系や環境系、アート系のいろんなNPOが出演するフリーマーケット型の企画を毎月やつていこうとか、そんなものも増えてきて……。だから、スタッフも雇っているんですよ。今、財団の理事は3人で、それとは別に正社員が6人。きちんと毎月給料を払って社会保険も入っています。さらに、この春からあと1人か2人入ります。

**谷津** すごくですね。

**村上** 「ほつぷの森」の白木さんが財団の理事長なんです。彼がビジネスセンスがあるんですね。もともと仙台の大きい文房具屋さんの社長さんで、僕らが考えるのとはちょっと桁が違う判断が瞬時にできるんです。白木さんがマネジメントとか、商店街とのつながりとか外回りもガッチリやってくれるので、ソフト面は僕たちが、若手も含めたいろんなアーティストを呼んできて、やっている。作業所の人たちが描く絵も、面白い絵がいっぱいできて、すごく受けていて。それらの絵で缶バッジを作ったりもしていますが、そういった商品開発も考えていきたいと思つてい

ます。利用者の人たちは「スタッフ」といつて、時給は安いんですけど、毎月働いた分のお金をもらいます。ハンカチを折るみたいな単純作業の他に、こういうバッジを作つて収入にするとか、似顔絵を描くのが得意な人が居たら、似顔絵1枚が何百円かの収入になったり。こういうアートの福祉作業所は仙台にはないので、けっこう視察も多かったり、問い合わせもありますね。

**谷津** 福祉作業所を作つて財団化したことでなぜ安定した収入があるのか、もう少し詳しく教えていただけますか？

**村上** 作業所の名前は「アート・インクルージョン・ファクトリー」と言つて、仙台市から「B型福祉作業所」というものに認定されていて、障がいのある人たちの雇用の場として認められているんです。これに認定されると、雇用している人数に応じて市からお金が入る仕組みなんです。それが固定収入になるので、人も雇用できるし、家賃の支払いもできるし、基本的に助成金に頼っていない。街中でやる「アート・インクルージョン」のよ

※11  
アート・インクルージョンのイベントで配布する通貨は「Ai」を単位として用いている。

うなプロジェクトをやるのには別途お金がかかりますから、時々仙台市の文化事業団の助成をもらったりとか、民間の助成を少しもらったりしているのはありますけれども、それだけに頼らないでできるように頑張って来たということなんです。これはアートのサブイバル術としても先駆的な事例にはなるんじゃないかと。もともと僕たちもこういう制度があるということは知らなかったんです。「A型だのB型だの、何ですか？」みたいなところから始まっているんですよ。その辺りのことは、福祉のほうで長年やってきた白木さんが詳しく。アート関係者はそういうのは知らないから、「人を雇うなんてできるわけないでしょう」みたいなことを言っていたら、「いや、大丈夫なんです」って。

**谷津** でも施設を作るには初期費用もかかりますよね。

**村上** 財団を創設するには最初300万円はないといけませんが、白木さんが主に出資してくれて。あとは、評議委員の人が少し支援してくれたのがあって。僕たちはお金は



ワークショップ風景。参加者が思い思いのメガネを作る

全然出していないけれど、アイデアを出してこちらができることをやる、そんな感じですね。事業として継続できる仕組みが福祉系では以前からあるんですよ。アートの世界ってそういうのが全然ないから、自力でやるしかないですよ。でも助成金頼みでやっていると、「来年採択されなかったらなかったら

どうしよう」みたいな話になるじゃないですか。確かに最初にお金はかかるんです。僕たちがそれを出すのは無理なので、出せる人が出すと。僕らは体を動かすし、アイデアを出しますと。

白木さんが運営している「ほっぶの森」は、ここよりずっと広くてスタッフも多い福祉作業所で、その他にも「びすたより」という障がい者雇用施設には全く見えないすごくしゃれたレストランをやっている。あと「フードマーケット」というのもやっていて、畑を借りて作物を育ててお店に卸したりとか、パッケージ化して売ったりしている。その中でここは、アートに特化した福祉作業所としてオープンしたわけです。僕がもともとやっているMMIX Labも重なる部分が多いので、オフイスをシェアさせてもらって、「アート・インクルージョン」は一般財団法人アート・インクルージョンとMMIX Labの共同主催でやっています。こうした活動と復興支援は並行してこれからも、長期戦でやっていこうと思っているん

です。震災後、ボランティアがワーッとすごい勢いでやってきましたが、そういうのはなかなか継続が難しい。それに、最初は衣食住とライフライン、生きるための支援が必要でしたが、インフラが復旧してある程度落ち着いたところで、生活の中で笑いや、喜びや、ゆとりを持つためにアートが役に立つと思うので、ここから先がより重要だと思います。

**谷津** 継続して存続できる体制を作れたからこそ、被災地支援も継続的にやれると。

**村上** うん、そうなんです。ボランティアでワーッと来てくれた人たちももちろんありがたいし、重要な活動をしてくれたわけですが、けれども、いかにして継続してやるか。震災直後に緊急支援対策本部をやっていた時、「とにかくこれは長期戦になる」と思いました。なので、その時から私たちのメンバーでは「楽しみながらやろう」って。「根を詰めたらきつとつぶれるから、面白いことを組み込みながら楽しんで続けよう」って進めていたら、もう早3年になりますけれど、まだみんな、あの時のメンバーが動いていますね。

やっぱり継続するための仕組みづくりは大切ですよ。人もそうだし、物資もそうだし、お金もそうだし、それらの体制をどうやって創っていくかが課題で、1人じゃできないけれども、アイデアを出し合って、組めば結構できる。アート系だけで集まってもなかなか難しいんだけど、ちょっと違う業種の人と組むと新たな広がりができるのは実感していますね。継続してアートへの取り組みができる環境を整えつつ、いろんな人を巻き込みながら支援活動もしていこうと。「おしるこカフェ」は、もうとにかく仮設住宅がある間はやろうと決めています。この間、中心になっているアーティストと話していたら「いや、仮設がなくなっても、復興住宅ができてやる」みたいなことを言っていたから、いつまでやるんだってことになりつつあるんですけれども(笑)

**谷津** 「おしるこカフェ」に来る方は、常連の方が多くいんでしょうか。

**村上** 大体顔なじみのおばちゃんが多くて、毎月来てくれて、歌ったり踊ったり、食べて

飲んで……。もちろん、そのときだけ来る人も居るんだけど、大体20〜30人ぐらいは毎回来てくれますね。それでその後、自分の部屋にも呼んでくれて、お茶をこちそうしてくれたり。仮設住宅なんですごく狭くて、もう、2、3人入るといっぱいになっちゃって、誰か立たないといけないうぐらいのスペースなんだけれど呼んでくれて、立ちながらコーヒーを飲んだり。そんな感じで、すごく仲良くさせていただいていますね。

「あすと長町」は、最初の頃は住民が少なかったんです。こんなにロケーションのいい所だからすぐにいっぱいになるかなと思ったり、コミュニティが崩壊しないように同じ地区から何世帯以上入らなきゃダメとか、そういう縛りがあったんです。その後条件が緩和されてガーンと増えて、沿岸部の人たちとか、福島から来た人とか、いろんなところからバラバラに人が来ました。最初は233世帯だったんだけど、この前は180ぐらいでした。おしるこカフェをやるときに「おしるこ通信」というのを前々日ぐらいに

ポストイングするので、ポストを使っている世帯の数が大体分かるんです。多少減ってはいますが、小さい仮設住宅が統廃合されたり、みなし仮設(※12)の契約が切れたり事情があつて出なきゃいけなくなった人が入って来たりするので、復興住宅ができるまでの間、何年間かは続くと思います。だから、「おしるこカフェ」も続けるけれど、ワークショップ形式のものとかがイベントとか、アートでできるプログラムをいろいろ企画していこうと思っっています。

**谷津** 最初から継続的な支援をしてきたから、仮設住宅の方々とそれだけ仲良くなれているんですね。

**村上** 本当初期の段階で「隣人祭り」をやった時から関わっていますし、アート・インクルージョンは「あすと長町」を支援する登録団体になっているんです。だから「ああ、アート・インクルージョンの人たちですね」と受け入れてくれている感じですね。

**谷津** 定着してきた、心を開いてもらえたと感じたのはいつ頃ですか。

**村上** それで、最初の「隣人祭り」のあと6月に街中でアートフェスティバルをやったときから、住民の方たちがけっこ来てくれたんです。「あすと長町」は自治会ができるのも早く、自治会長さんがすごくフランクな人でいろんな話をしてくれて。最初は、仮設住宅が狭いとか寒いという話が多くて、行政に話して断熱材を入れてもらったりもしていましたから、すごくやりやすかったというか、動きは速かったんじゃないかと思えます。他の仮設住宅ではなかなか自治会とか運営委員会みたいなものができなくて、何かやるうとしても誰に聞いていいのかわからないから何もできないうぐらいのか分らないから何もできない、ということもあつたみたいですけど。「あすと長町」の壁に絵を描いたのも、自治会長さんの奥さんと話したことがきっかけです。ある時、通りかかった小学生が「この作業場みたいなのは一体何なの?」という感じの会話をしているのを、自治会長さんの奥さんが聞いてちゃったみたいなんです

※12

被災した人が民間事業者の賃貸住宅を仮の住まいとして入居したとき、その賃貸住宅を国や自治体が提供する「仮設住宅」(応急仮設住宅)に準じるものと見なすこと。

よ。それがすごくショックだったと。それで、ちょうどアイデアとして持っていた仮設住宅のラッピング計画のことを話したら、「ぜひやってくれ」ということで、自治会が即OKで、市と県とがOKになって、絵を描き始めたというのがありました。

**谷津** それだけ多くの地域の方が集まっている仮設住宅だと、自治会をつくって運営していくのはなかなか大変なんじゃないかと思いますが、うまくいったのは会長さんのお人柄なんでしょうか。

**村上** 会長さんの人柄でしょうね。初代の自治会長さんは定年退職するまで横浜の人だったんです。海が好きだからというので、退職金を使って海に近い所に一戸建てを建てたそうなんです。そうしたら、それが津波でやられちゃって。でも「そっくりなくなっちゃから、もう吹っ切れたんだ」と。「これからここで何か楽しいことをやっていくんだ」という感じですが、前向きな人で。やっぱりそういう人がいたおかげでまとまったんじゃないかと思います。こちらが提案したこと「あ

あ、これも面白いね、あれも面白いね」っていう感じで、否定されてできなくなった企画はほとんど無いんじゃないかというくらいノリがよかったですね。今は2代目の方ですが、その方もすごくノリがよくて、スピード感があって。

**谷津** 自治会と協力する体制を一番最初の段階で作れたのが大きかったですね。

**村上** 大きいですね。けっこう、いろんな団体から支援の申し入れがあるみたいですが、やっぱり僕らは継続してやっているし、顔が見える関係になっているのは大きいと思います。

**谷津** 震災から2年3年と経ってくる中で、毎月「おしるこカフェ」で会われている方に何か変化は感じられますか。

**村上** 最初は、本当におしるこだけを食べて帰るとか、持ち帰る人も居たんですけど、最近はいろんな話をしてくれたりとか、演歌歌手が歌っていたら、扇子を持って一緒に踊り始めたお婆ちゃんがいて「そんなに踊りがうまかったんだ」って驚いたり、打ち解けてきたというか。あんまり硬い話はしないんで

すよ。震災の話はこの前やとちよつと聞いたぐらいで。やっぱり非常にデリケートなことなので。やとと今年経って、そろそろ聞いてみてもいいかなと思ってスタッフが聞いたら、やっぱり生きるか死ぬかのすごい状況の中をくぐり抜けてきたとか。それぞれの人が、それぞれの場所でいろんな体験をされて



あすと長町仮設住宅で行った「仮設住宅ラッピング計画」

きてあそこにいるわけです。何かしらのものを失くされた方、それが家なのか仕事なのか家族なのか、それぞれですけども、一人ひとりに聞いていくとすごいなというね…。

こちらは、話を聞いてカウンセリングをやるのが目的じゃなくて「とにかくおしるこでも食べて温まりましょうよ」っていうところからのスタートで、アートもそうです。単純に楽しめるようなものとか、ゲーム感覚のものとか、プログラムにはそういうものを組むように心掛けています。震災の絵を描いて逆にPTSD（※13）になってしまったという話もありますし、アートと言っても何でもありません。仮設住宅って高齢者の人がめっちゃ多いので、歌なんかも、演歌歌手が演歌を歌ったり方言で語ったりすると大ウケなんです。だから、そういう年代の人たちに通じる表現というものも探りつつやっています。

**谷津** 続けて来られる中で、プログラムの内容についても試行錯誤されたんですね。

**村上** それはやっぱりありましたね。「ああ、

※13 心的外傷後ストレス障害。

こういう年代の人には、こういう企画のほう  
が合うんだな」って。まさにギャラリーや美  
術館とはわけが違うわけで。美術館だったら、  
それなりの気持ちを持った人が行くわけじゃ  
ないですか。そこに作品が飾ってあれば、そ  
れでアートが成り立つような特別な空間なん  
だけども、こういう所は全く違うわけです  
からね。やっぱりこちらだけの思いでやって  
はいけない。壁に絵を描いたときもそうです。  
「こういう絵を描くアーティストが居るんだ  
けれど」って、絵を何パターンか見せて、住  
民が気に入ったものを描くとか、住民が好き  
な色合いで描いてもらうとかしながらやりま  
した。ただ、みなし仮設についてはどうい  
う状況なのか分からないのが課題ではありま  
すね。仮設住宅の3倍ぐらい人がいるとい  
うんですが、みなし仮設の場合はどこにどう  
いう人がいるのかもわからないので。社協な  
どに企画の説明をして、みなし仮設の方にも紹



「3.11メモリアルプロジェクト」では津波の被災遺物を収集し、展示している

介してほしいとお願いしたりはしていますが、  
その程度です。

**谷津** でも、町全体でアートのイベントに取り  
組んでいけば、どれだけ届くかはわかりませ  
んが、みなし仮設にいる人が触れるチャン  
スも増えていきますよね。

**村上** おそらくみなし仮設の人のほうが、ポ

ンツと1世帯だけでこれまでと違ったエリア  
に来て、不安な人も多いとは思いますが、  
そういう人たちもいろいろな形でプロジェク  
トに参加してもらって、ちょっと話でもでき  
ればと思っています。

**谷津** 震災後に、障がい者の方のアートだっ  
たり、仮設住宅で高齢の方を相手にするア  
ートだったり、町の中でやるアートを続けてこ  
られて、村上先生ご自身が自分の中で変わっ  
たこととか、学んだことはありますか。

**村上** もともと僕は九州の出身で、東京が一  
番長くて、たまたま仙台に来たんですけれど、  
必然性みたいなものがあるのかなとは感じま  
す。海岸とか石巻の街中とか、よく行ってた  
場所がああいう状況になって、僕はたまたま  
仙台の山の上にいたから、地震は体験して事  
務所も大変なことになったけど命は助かった  
と。そう考えると、人生は短いし、やるべき  
こと、やらなきゃいけないこと、今でない  
とできないようなことを優先してやろうと、  
吹っ切れたというのがありますね。あのとき、  
下手をすると死んでいたわけですから、それ

を考えたら、もうなんか、何やってもいいん  
じゃないかなみたいな。

**谷津** 通常だったら、大学の先生をされなが  
らここまで事業展開をするというのは、けっ  
こう勇気が要ることだろうと思います。

**村上** どういうところに比重を置いていくか  
ですよ。自分でできないこととか、あとは必要と  
される所でやるのか、そういうのを優先的に  
考えていったら、こういう活動になってき  
た。津波でねじ曲がった震災遺物を集める活  
動(※14)にしても、時間との戦いだったわ  
けですよ。今ではもう、仙台市の中にはねじ  
曲がった道路標識はほとんどないし、気仙沼  
に打ち上げられていた船だつて結局解体され  
てしまった(※15)わけですが、時間との戦  
いで手遅れになっちゃうものがいっぱいある  
わけですよ。後で後悔して「ああ、あのとき  
動いていけばよかった」という思いをしな  
いように「今やれることはやろう、優先すべ  
きことは優先しよう」と。いろいろ、非難さ  
れようが、今はそのほうが大事だと。直感的

※14  
MMIX Labでは「3.11メモ  
リアルプロジェクト」という名前  
で、津波被災遺物を調査・保管・  
展示する活動を行っている。

※15  
東日本大震災による津波で気仙沼  
市の漁港から約750m内陸に  
打ち上げられた福島県船籍のまき  
網漁船「第18共徳丸」は、震災遺  
構として保存を望む声もあったが、  
2013年に解体された。

なものを信じて、今できることをやっていく。振り返りは後でいいだろうという感じですよ。

**谷津** まだまだ振り返る段階ではないと。

**村上** まだまだ走り続けている段階ですね。風化させない、震災があったことを忘れないための取り組みも大事にしています。最近新たに仙台市と協定を結んで、他のNPOと一緒に「伝える学校」(※16)というメモリアルプロジェクトもやり始めています。どんな忘れちゃおうと思うんですよ。これは、東京へ行ってもそういうふうを感じるし、この前は正月を九州で過ごしたんですけれど、九州なんかじゃもう、震災に対する意識は本当に欠片もないくらいですから。まあ、しょうがないのかなとは思いつつ、でも、いつどこで起きるか分からないわけじゃないですか、南海トラフや首都直下型でも何でも。日本の防災や減災を考えると、被災地で体験したからできることがあるだろうと思います。伝えていくことの環で「メモリアルキャラバン」というのも始めて、お呼びがあれば、集めた震災遺物を詰め込んだ車で行って、展示

したりトークしたりしています。

今後もうこういう活動を継続させていくために、東京五輪と連携もしたいですね。正直、最初は五輪誘致活動に僕は批判的だったんです。被災地がこんな状態の時に五輪なんかやってどうするんだって思っていたんです。でも今はだいたいぶこちらも落ち着いてきたし、復興にもつながるような、モチベーションを上げるようなことにつながればいいんじゃないかと、被災地の意識も変わってきたと思います。被災地を聖火ランナーが走るという話もあります。他にも被災地支援につながるようなプログラムに連動させるとか、どれくらい復興したのかを見せる機会にするとか。東京だけのものにするのではなくて、被災地支援につながるようなプログラムが展開できればいいなと思っています。パラリンピックは身体に障がいを持つ人が対象ですが、スペシャルオリンピックスという知的障がい者のオリンピックもあって、白木さんが日本法人の副理事長をやっていたことがあるんです。それで全国的なつながりもありますから、知

的障がいのある人が描いたアート作品を聖火ランナーが走るコースに飾るとか、そうやって誰でもみんなが参加できるようなものにしていくといいですね。

**谷津** なるほど、すごく壮大なお話ですね。

**村上** スポーツとアートは、どちらも同じ一つの「表現」だと思っています。開会式とか閉会式はかなり派手になってアートも入ってきていますけど、ああいうものだけじゃなくて、前年とか前年からアートプロジェクトをやるとかね。ロンドン五輪でもそうでした。最近では新潟の越後妻有アトリエンナーレとか、地方の大きなアトリイベントもありますけど、仙台では国際展的なものがないので、これを機に何かやってもいいと思います。世界中の人が集って、見て、泊まって、お金を落としてもらうことが復興につながるの、そういう取り組みは大事だと思います。

**谷津** 今日お話を伺っていると全部うまくいっているような感じがして、あまり「こういうところが問題になっている」というお話がないような気がするんですが。

**村上** 「アート・インクルージョン」に関しては順調にいっていますね。こんなにトントンの拍子に広がっているのかなと思うくらいで。逆に企画が多過ぎちゃって、作業が追い付かないっていうのはありますけれどね。事務スタッフもちゃんとしているんだけど、それでも追いつかないぐらいのスケジュールになっていますね。事業を継続できるような財政的基盤が整いつつあるというのは一つの大きい成果なんですけど、まだマンパワー的なものは弱いというか、もっと関わる人が必要になってくるかなというのはありますね。

**谷津** でも、イベントが継続しているのはそれだけ反応が良くて、ニーズがあるからということですよ。こういうイベントは継続せずに終わってしまうことも多いと思うんですけど、もちろんスタッフがいて、運営体制をきちり作れているのは大きいと思います。イベントとして続いていくためにはまた別の条件が必要な気もするんですけど。

**村上** アート・インクルージョンは、季節ごとに1回やるようなお祭りのイベントでは

※16  
仙台市震災メモリアル・市民協働プロジェクト。市民が伝える視点をもって発信していくことを目的として、市民団体との協働により進めている。

なく、継続して町を徐々に変えていくとか、意識を変えていくとか、そういう「プロジェクト」にしていこうという意識は持っています。一過性で「やって良かったね」「楽しかったね」で終わるんじゃないかと、町の仕組みとか意識を変えて賛同者を増やしていくことを目指したいですね。仮設住宅でもいろんな人が協力してくれるし、商店街のほうも、最初は協力してくれるのは数店舗だったんですが今は全部です。長町商店街全店でプロジェクト通貨が使えるようになったり、やっぱり意識が変わってきています。長町商店街って実は複雑で、三つぐらいの商店街でできているんですけど、これまではみんな独自にやっていて、連携がなかったんですね。アート・インクルージョンをやって、初めて三者合同で会議をして、一つのことができるようになった。ここまで3年ぐらいかかっていますけれどね。

**谷津** やはり、その過程では難しい事態もあったんでしょうか。

**村上** はい、やっぱりいろいろと。どこに話を通していいとか、誰かを通さないとかと変える力があることを証明できていると思われませんか。

**脚** で一緒にやってきていますね。

**谷津** これまでの取り組みで、アートに町を変えたいということ、社会の仕組みを変えていくことなので。アート・インクルージョンというのは「一つの生き方であって、一つの思想である」と唱っているんですけど、要するに、アートでインクルージョンされる社会の実現を目指すためのアクションなんです。なので、長町だけにこだわっているわけではない、ここからスタートしているけれども、仙台の中心部でもやっていいし、東京でも、九州でもやっていいし、アートとソーシャルインクルージョンの考え方でできるものであったら、いろんな協力をしてやっていこうとは思っています。まだスタートしたばかりという感じですね。

やっぱり、アートの多様性は社会にとって必要な要素だと思いますし、既存の商店街祭

まないとか。その辺は僕たちはよく分からないんで、商店街に人脈のある白木さんが小まめにあいさつに回って。まあ、いろいろと課題もあるんです。ただ組織を維持するだけじゃなくてきちんとしたプログラムとしてやっていくためには、もっと外部資金を活用するとかしていかなきやいけないし。アイデアはあるんだけど、活動資金を作り出すというのはまだまだ課題ですね。

**谷津** 白木さんはもとも福祉の分野で活動されていたわけですが、アートについてもご理解があるんですね。

**村上** 白木さんは社長職を辞める時に、「これからはNPOをやる」と言っていて、会長職に残ったりしないでスバツと別の人に渡して、福祉をやり始めた人なんです。それで「ほつぷの森」を立ち上げて、高次脳機能障がいとか知的障がいを持った人たちを対象にした就労支援をやり始めたんです。以前も街中でやる音楽祭の実行委員をされたりはしていました。アートは僕らと一緒にやることになってからですね。今はもう本当に二人三

りのように人が集まればいいということでもなく、アートでできることを考えるということなんです。町興しが上位になって、アートを使得って町興しをするという感覚でやると、まさにイベントになっちゃうんですよ。集客とか売り上げが主たる目的になってアートは従の部分になる。そうではなくて、アートの発表の場、表現の場として町を使うというスタンスでやっています。結果的に協力してくれたお店に人が来たり、わずかばかりの経済効果があつたりしますが、それは2次の経済効果であって、やっぱりアートを上位に持つていけない。イベントではなくプロジェクトなんだと、こっちは思っているんだけれど、全体の中でどこまで共有できるかについては、まだこれからです。でも続けていけば、化学変化が起こっていくのではないかと思っています。

(2014年2月28日 仙台市 アートインクルージョンオフィス)

# 3 CASE

## 雄勝法印神楽 舞の再生計画

雄勝 - Ogatsu -

雄勝法印神楽（おがつほういんかぐら）は石巻市の旧雄勝町地域に伝わる民俗芸能で、宮城県の重要無形民俗文化財である。旧雄勝町は複雑に入り組んだリアス式海岸に散らばった12の浜村で形成され、法印神楽はそれぞれの浜を巡行奉納する形式が特徴的であったが、東日本大震災による津波被災で奉納の実施が困難となった。「舞の再生計画」は、旧雄勝町の人びとにとって文化的支柱である雄勝法印神楽を早期に再生させるべく、仙台市の文化行政で演劇分野の第一人者である八巻寿文が企画した。八巻の渾身の対応により、雄勝法印神楽は被災から半年で劇的な復活を遂げた。

### アート・インクルージョン | 活動の記録

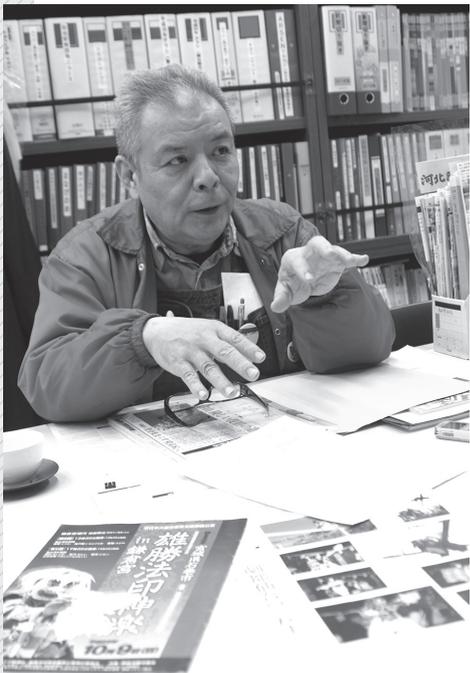
2010年	11月	「第1回アート・インクルージョンinながまち」開催
2011年	3月	東日本大震災発生
	6月	「アート・インクルージョン 長町チャリティプロジェクト」開催
	10月	「アート・インクルージョン ながまち2011」開催
	12月	「アート・インクルージョン クリスマスプロジェクト2011」開催
2012年	3月	「アート・インクルージョン サンキューアートウィーク2012」開催
	10月	「アート・インクルージョン2012」開催
	12月	一般財団法人アート・インクルージョン設立 「アート・インクルージョン クリスマスプロジェクト2012」開催
2013年	3月	「アート・インクルージョン サンキューアートウィーク2013」開催
	4月	B型福祉作業所「アート・インクルージョン・ファクトリー」がオープン
	10月	「アート・インクルージョン2013」開催
	12月	「アート・インクルージョン クリスマスプロジェクト2013」開催
2014年	3月	「アート・インクルージョン サンキューアートマンス2014」開催
	10月	「アート・インクルージョン2014」開催
	12月	「スペシャルオリンピックス&アート・インクルージョン支援 クリスマスチャリティコンサート」開催

※他にも多数のイベント、プロジェクトを実施

東北の民俗芸能にはしばしばアバンギャルドな色使いや荒々しい所作が見られ、現代の我々の感覚からするとそれはエキゾチックでもあり、時に戸惑いすら与える。だがそれらは、厳しさと思恵を同時にもたらす自然の中で生き続けてきた我々の祖先が築き上げた「世界と対話する方法」であり、そこに暮らす人びとのDNAに刻み込まれたアイデンティティでもある。

大津波被害を受けた。しかしこの地に息づく神楽は、わずか半年で復活を遂げる。それを支えたのは、東北随一の都市である仙台が若手演劇人たちを支え、育て続けている八巻寿文だった。八巻がやったことは明快である。神楽を奉納するために必要な「舞台」を作って届けたのだ。神楽組からの要請に瞬時に反応した八巻の判断も行動も、非常に明確で迅速だった。それを可能にしたのは、長い歳月をかけて築き上

げた神楽組との信頼関係である。八巻は2003年から、仙台の中心部で東北の神楽を紹介する試みを続けていた。文化芸術は問題解決の手段ではない。しかし、ある土地に根付く文化が自然災害によって負傷したとき、その重要性を深く理解する人物により、明確な問題解決が行われた。都市で文化を扱う者と農山漁村の文化を担う者との健全な関係を探る上でも、この事例が示唆するところは大きいように思う。



## 八巻寿文

Toshibumi Yamaki

せんだい演劇工房10-BOX 二代目工房長

宮城県出身。高校卒業後フランスへ留学。帰国後は舞台照明の仕事しながら、画家として活動。エルパーク仙台、仙台市青年文化センター勤務を経て、2002年よりせんだい演劇工房10-BOX 勤務。2005年より現職。

### 八巻 雄勝法印神楽とは深い付き合いなんです。

2002年に10-BOX(※1)ができて、仙台市で1990年からやっていた演劇祭の事業(※2)を担当することになったんですけど、それまで10年続いた演劇祭が次の段階を模索している時だった。2002年の演劇祭では東京から著名な8劇団を仙台に招聘したんですが、僕は東北に根付いた舞台芸術を紹介できないかと考えていました。そのとき偶然にお神楽と出会うんです。調べてみると、東北のお神楽の大きな特徴のひとつが組み立て式の舞台だということが分かったのですね、お神楽に来てもらえるように東北大学の建築学科の有志と一緒に10-BOXオリジナルの神楽舞台を作りました。2トン・ロングのトラックで運べて、簡単に組み立てられるような、「女子4名2時間楽々」がコンセプトのフレキシブルでコンパクトなお神楽の舞台を作って、八つのお神楽を呼んだフェスティバル(※3)を、市のと真ん中の勾当台公園でやった。そのときに初めて雄勝法印神楽をお呼びしたんです。

でもこの企画は簡単には通らなかったんです。「宗教に手を出していいのか」と言われて。でも芸術は全て宗教から始まっているから。「美術館に宗教画が飾ってあるのはいけないことですか」とか、いちいち説得しなきゃいけないかった。あと「面白いのか」とか

「演劇と言えるのか」とも言われました。だから自分でも神楽のことを勉強したんですけど、東北に所縁のある宗教学者の山折哲雄さんに京都まで会いに行つて、「神楽は演劇だ、なんなら楽劇だ」と言ってもらって確信を得た。本当に切腹覚悟でした。「見たことないけど絶対面白いです」とか、「絶対に晴れるから雨対策はやらない」とか言つて。内心「駄目だったらどうしよう」と思っていたんですけど、結果的に前日の大雨も止み、お客さんもたくさん来てくれて、すごく手応えがありました。ただ、「演劇祭」として継続させていくとした時に現代の演劇と融合させるのはなかなか難しく。考えた結果、歴史民俗資料館に場所を移すんです。今は歴史民俗資料館が予算の管理をしながら、一緒にやってま

※1 せんだい演劇工房10-BOX。仙台市若林区にある劇場兼稽古場施設。劇団仙台事業の拠点として演劇祭やワークショップを行い、仙台の演劇芸術の発信と交流の場となっている。公益財団法人仙台市民文化事業団が管理運営を行う。

※2 仙台演劇祭。1990年3月に開館した青年文化センターシアターホールでの上演の機会を地元の劇団に提供したり、県外の劇団を招聘してまとまった数の演劇を上演。95年からエル・パーク仙台でも行われるようになった。

※3 2004年秋に行われた「街が劇場になる日」。

す。こういう例は珍しいと思います。

**谷津** それが「れきみん秋祭り」(※4)と  
なっていて、今も続いているということですね。

**八巻** はい。最初の演劇祭で呼んで以来、雄勝法印神楽にはほぼ毎回来てもらっています。そういう背景がありました。だから東日本大震災の後、雄勝が気になって仕方なかったんですが、行くことができずにいた。そしたら突然、保存会の副会長さんから電話が来たんです。「八巻さん、あの神楽舞台、貸して」って。「町の人たちにお神楽やってって言われてるんだけど、舞台が流されたから」って。「衣装や面、道具類は借りて来れるから、舞台さえあれば何とかやれるから、貸してもらえないか」って言われた。それが2011年の6月頃。5月28日に雄勝総合支所の前でブルーシートを敷いて神楽をやったことを新聞記事で見て、「ああ、ここまでしてやったんだ」って思っていたところだったんだけど。

**谷津** 5月に上演したというのは、すごく早いですよね。

**八巻** あれはね、本人たちがやりたかったん

じゃなく、町の人たちに「お神楽が見たい」って熱望されてやったんだそうです。保存会のメンバーも被災してただけで「そこまで言うんなら」って。その少し後に電話が来て、「こんなにみんなが求めているんだから、(本来の姿である)浜での奉納ができるように舞台を貸して」って、言われたんだよね。そのときは「電話ではお互いの状況がよく分からないから会って話しましょう」って言って切ったんだけど、その後は電話がつながらなくて。もう住所はなかったし、どこの避難所にいるかわからないし、会長さんが行方不明で探しているような状況だった。で、慰霊祭があったお盆の頃に雄勝に行って、誰かに会えるかもしれないと思って浜を回ったんだけど会えなくて。お酒とか差し入れをいっぱい積んで行ったから、当時避難所になっていた石巻の公共施設の「ビッグバン」に置いてこようと思っただけに寄ったの。そしたら、その日の午後5時から雄勝法印神楽の奉納公演をやりまして、貼り紙に書いてあった。

**谷津** ええ！。

**八巻** もう背筋がゾツとしましたね。呼ばれてるとしか思えないと思って。あと1時間後

だったんだよ。館内非常放送で「17時から雄勝法印神楽の公演をやりますから、お弁当を食べた後にご覧になりたい方はどうぞ」なんてやってるわけ。僕らはいつも沢山のピラを作って宣伝してお客さんに来てもらうのに、館内の非常放送だけで満席だった。劇場のある種の理想像みたいなものが見えた気がしました。その時に副会長さんに会えて「どうせなら専用の舞台をつくらう」って言った。いくらかかるか分からないけど、俺が借金すればいいやと思ってた。それで「舞台を作るために雄勝法印神楽の現地の様子を知りたいから案内してください」って言って、あらためて雄勝の浜の被災状況とか、もともとあったお祭りの形態とか、舞台の形だとか、現地をつぶさに廻って詳しく教えてもらいました。

そのときは、10|BOXの神楽舞台を東北大の建築の有志と作ったみたいなのに、いろんな人に関わってもらって舞台を作るっていうストーリーを描いたのね。だけどそのプランは

ことごとく崩れていった。いろんな人に声は掛けまくったけど、その頃はまだ誰も余裕がなくて、うまくいかなかった。そこで、知り合いだった日本の数寄屋造りの職人さん、東建設の片山鶴衛さんという人に相談したの。神楽舞台というのはこういうもんなんだとか、東北のお神楽の歴史とかを説明して、興味を持ってくれたと思う。その頃にASTTのお話があったって、予算をつけてもらえたので、素晴らしい舞台が出来上がったんです。

作り始めると神楽組の人たちは「秋の奉納の日に間に合わせてくれ」って言うんです。近づくにつれて「本当に出来るのか」って気をもんでくるわけです。それで僕も「できるように努力してるけど、できるかどうかは分からないから。俺、業者じゃないから。契約も交わしてないからね。」って、ちょっとぶつかったんです。それからお互いの立場をよく分かり合えて、一緒にこのプロジェクトを進めているんだという気持ちになりました。で、9月の末頃に最終調整で片山さんに来てもらって、仮組みをして、いけ

※4  
仙台市歴史民俗資料館前の芝生広場に組み立て式の神楽舞台を設置し、神楽などの民俗芸能や大衆芸能、紙芝居などを招いて行うお祭り。毎年10月第3土曜日に行われている。

るなつていうことになって、現地で組み立てる日を決めたんですね。それで10月3日に、保存会のプレハブの集会所がある大浜の神社(※5)に持って行って、その庭で組み立て始めた。そしたらみんな、「おーっ」で。「ちょっと太鼓持つてくっから」「俺、衣装持つてくっから」「俺、足袋持つてくっから」ってなつて、その場でお神楽が始まったんです。あそこで見たお神楽は本物だったね、すごかった。みんな舞台上がって、「あんべ」、塩梅がいいって言って。神楽の舞台って堅いと舞にくいって、軟らか過ぎると太鼓が安定しないから叩きにくいし、ちょうどいい緩さが必要なんです。踏み込むときの舞台の緩さが、うんと大事なんです。それがすごく、「あんべいい、あんべいい」って、笛も太鼓も持つてきて、本当のお神楽が始まったときは報われた。見ているボロボロと気持ちよく泣けました。

**八巻** そこまでもまた大変だったんです。「れきみん」で演じる演目では梁の上に人が乗るんだけど、足場にする浮橋の高さは古文書には書いてない。推定して乗りやすい高さにするんだけど「橋の高さは何センチあったらいいんですか」って言うてもすぐに答えが返って来ないんですよ、設計図で作ってないから。距離が離れるからそんなに行き来もできないし、実験してもらった数字を待ったりして時間がかかりました。

**谷津** 以前に10-BOXで作った神楽舞台の設計図があったわけではないんですか。

**八巻** 10-BOXの神楽舞台は汎用性があるように作ったフレキシブル舞台なんです。法印神楽にも南部神楽(※6)にも対応できるような。そうじゃなくて雄勝法印神楽専用の、雄勝の人たちが使いやすい舞台をつくってあげたかったんでね。

**谷津** 数値的な資料は何もない状態で、文書だとか、人の話だとか、実際の実験から設計図を描いて作ったということですか。

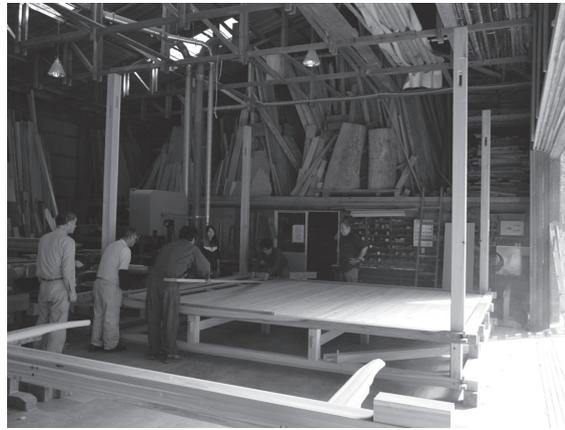
**八巻** 片山さんは設計図も書かないで作った

んです、職人だから。片山さんの力が本当に大きかったです。雄勝には十幾つの浜があつて、今神楽をやっているのは七つの浜だけど、それぞれに神楽舞台があつたの。浜の集落にある舞台を組んで、神楽の人たちには道具だけ持つて現地に来てもらうわけだね。ところが調べていくと、流された舞台の形って

浜ごとに微妙に違うんです。雄勝法印神楽は600年以上やってるから、その途中で舞台を作り直しているんだろうけど、設計図がないもんだから、いいように解釈して作りたしてみたいね。大工さんっていうのは、終わったらバラすっていうことは考えないじゃない。家は建てたら壊さないから。だから丈夫だけどすごく重いか、組み立てるのが大変な舞台ばかり。本当にフィットする舞台というのは実はなかったんじゃないかな。

**谷津** 今回は、どこの浜でも使えるような舞台を作った。

**八巻** そう。浜ごとに持っていた舞台が全て流されて、お神楽をお迎えすることができなくなったからね。だから神楽組が自分で持っていて、すぐに組み立てられる舞台を作ったんです。



出来上がった舞台を東建設にて仮組み。この後、雄勝へ運んだ

**谷津** 2011年の秋に「れきみん秋祭り」で上演されたのが、あの舞台で多くの人に神楽を見てもらった最初だったんでしょか。

**八巻** いや、実は10月9日に鎌倉に呼ばれたのが先だったんです。鎌倉で能楽のフェス

※5  
宮城県石巻市雄勝町にある葉山神社。

※6  
岩手県南部、宮城県北部一帯にかけて広く行われている神楽。江戸末期に農民たちが山伏神楽と法印神楽をもとに別種の里神楽を組織した。

ティバル(※7)があつて、震災があつたから特別枠ということで、最終日に雄勝法印神楽を昼夜公演することが決まっていた。だから神楽組の人たちはそこに間に合わせたかつたんです。あの人たちは鎌倉宮の神様に呼ばれたとなれば、行かないほうがおかしい。それで、本舞台は前日に何とか出来上がったんだけど、脇につける小舞台は間に合わなかったから、流されなかった部材でなんとか組み立てて、紅白幕で隠しながらやった。鎌倉ではMCの人が「東北のお神楽がやってきました。こんなに人が集まって、皆さん、びつくりしてるようです」とかつて言うんだけど、あそこにくらいの人数は、常を集めてるからね。「バカにすんでねえぞ」って思った。だけど狂言の人間国宝の野村万作さんが挨拶で、「自分たちがやっている古典芸能とお神楽のような民俗芸能、郷土にある芸能のルーツは一緒だ」ということを言ってくれた。調べれば調べるほど、そうなんです。ルーツが一緒なんです。

その後にれきみん秋祭りが控えていたわけ

われちゃつて、これは作らなきゃと。で、れきみん秋祭りには小舞台も間に合つて、完成しました。

れきみん秋祭りでは舞台の贈呈式をやったんです。舞台は完成してもう雄勝にあつたんだけど、神楽組の人たちはまだ借りてるような気分だったみたいなんだよね。「あと切つても貼つても何してもいいから」って言うのも、電話よこすのよ。「こ、ちよつと、こうしたいんだけど」って。「ああ、もらった気になってないんだな」と思って贈呈式をしたんです。で、これ以降は勝手にやってつて。その後に国立劇場に呼ばれて、天皇陛下も見に来られたみたいですね。その次は出雲大社に呼ばれた。そのころはもう、神話の世界にいるような感じでした。お神楽の最初に「道祖」という40分くらい一人で舞う演目があるんだけど、地上に神様が下りてくるときに、魍魎魍魎(ちみもうりよう)がいる暗闇の中を案内して無事に目的地に連れていくのが道祖っていう神様なのね。道祖の神様が出雲大社まで連れていってしまったような、実際に



現地で初の仮組み。衣装や太鼓が運ばれてきて、その場で神楽が始まった

だけど、本舞台だけでも相当お金がかかってるはずだし、予算的にも時間的にも無理だと思つたから、小舞台は要らないよねっていう話をしてたのね。ところが、仙台のお神楽の研究者で僕の先生でもある千葉雄市先生に舞台のことを報告に行った時に「八巻さん、絶対、小舞台は作つてやってください」って言

神話の世界にいるような感覚でしたね。

**谷津** 全部、この舞台で行つたんですね。

**八巻** そうです。舞台が無いことには始まらないからね。できてよかったんじゃないかな。地元でやるお神楽は、大須つていう一番外洋に近い浜で最初に再開したんだけど、おかげさまで宮守さんに呼んでもらつたの。宮守さんというのは神楽を奉納する時の役職で、お祭りを仕切る人。宮守さんに呼ばれたお客は座敷に上げられてご馳走を頂くんだけど、その座敷が神楽の楽屋にもなつて、そこから演者が庭に組まれた舞台に出ていくの。能だつたら橋掛かり(※8)の奥というのには「鏡の間」といつて、能楽師が面を着けて人間ではなくなる神聖な場所なんです。そこには誰も入れなくて、見てもいけないんだけど、宮守さんの家の座敷では見えるわけね。演者はそこで面を付けて、緊張して出掛けていくんだけど、こっちは飯食つて酒飲みながら「頑張れよ、こけんよ」なんて。すごく贅沢で豊かな場でしたね。

**谷津** 宮守さんのお宅で神楽を見るんですか。

※7  
2011年10月9日におこわれた東日本大震災復興支援芸能公演「雄勝法印神楽」 in 鎌倉宮。

※8  
揚幕から本舞台へつながる長い廊下部分のこと。揚幕の奥にシテ方が面を着ける鏡の間がある。

2011年10月の「れきみん秋祭り」。雨天にも関わらず大勢の人が集まった  
撮影：越後谷出  
提供：3がつ11にちをわすれないためにセンター（せんだいメディアテーク）



**八巻** そう。宮守さんの家の庭に舞台を組んで、お庭に人がいっぱい集まって、舞を奉納するのね。神社にある御霊をお神輿の中に移動させて、宮守さんの家まで担いでいくんだけど、その荒々しいこと。片側の人たちが急に御神輿を放り上げたりする。そうすると反対側の人は、おとととって倒れるじゃない。放り上げた人たちが、神輿が落ちてくるところをバンって拾って、次はやられた人たちが仕返しする。そうやって、やっぱりやり返したりしながら担いできて、途中で海に入っけ行っちゃったり。いつまでも到着しないわけ。時間なんか決まってるんで、落ち着くときが来るまでやってる。で、最終的に舞台の正面にドンと置かれて、神楽が始まる。お神輿の御霊が一番いい席で見るとよ。演ずる側は動かぬ神という存在に向かって表現をするわけです。お客さんに向かってエンターテインメントをやってるわけではない。だからといって、お客さんが視線に入っていないかというところはないと、アドリブが利くシーンなんかは舞台から飛び降りて客いじり

して戻ってきたりするけど。舞台芸術では、表現者が自分の心の中にある神様というか、信じるものに向かってひたすら芸を磨く姿勢が大事だよ。そうじゃないと、ハリウッドみたいにお金が儲かる方向に向かってしまうわけです。そういうエンターテインメントとは一番違うのがお神楽ですね。お客さんもいたほうがいいんです。でもいなくても、やるべき日、やるべき時にはやるんです。1人も居なくても、雨降ってもやる。ただ、そこにお客さんがいるという第三の関係がお神楽を守ってきたし、素朴で健全な三角関係だと思っうんですよ。

**谷津** 宮守さんのおうちには、集落の方がみんな呼ばれるんですか。

**八巻** 宮守さんの座敷にあげてもらえるのは地位のある人。40人くらいかな。神社の宮司とか、教育長とか、村長さんみたいな人たちが呼ばれて。

**谷津** すごく贅沢な会ですね。

**八巻** うん。で、酒飲んで、でっかい弁当食べて。浜の人たちは庭に三々五々自由に見に

来て、舞台の周りに並べたパイプ椅子で見るわけです。お庭はすごく広くて、パイプ椅子も100席ぐらい出して。

**谷津** 宮守さんというのは相当大きなお宅じゃないとできないということですよ。地元の名家のような人たちが、持ち回りで宮守



「れきみん秋祭り」で行われた舞台贈呈式。  
右が雄勝法印神楽保存会の伊藤博夫会長代行  
撮影：越後谷出  
提供：3がつ11にちをわすれないためにセンター  
(せんだいメディアテーク)

を務めて、そこに集落の皆さんを招いて神様をお迎えするんですね。うーん、すごい。

**八巻** 浜によっては、公民館みたいなのを会場にしてやってる所もあるみたいですけどね。集落や地形によって祭りの内容も違うみたいです。毎年必ずお神楽をやる浜は四つくらいで、それ以外の浜では1年おきとか、回数調整をしながらやってるみたいですね。以前はお神楽も複数の団体があつて、10を超える浜で毎年やってたそうです。

**谷津** 奉納する浜が七つになったのは、震災の影響なんでしょうか？

**八巻** いえ、震災前からです。やっぱり人が減ってきてたんでしょうね。

舞台が出来て、お神楽がまたできるようになって、昨年には新しく「雄勝秋の芸祭・鼓舞」(※9)っていうのを立ち上げたんです。法印神楽だけではなくて、太鼓と獅子舞と三つのグループで実行委員会をつくつて。第1回目を25年の9月1日にやりました。10-BOXも後援になって、東京都にも、東京都の歴史文化財団にも後援になってもらい

※9  
2013年9月1日14時より日  
雄勝総合支所跡で開催。第2回は  
翌年2014年8月23日に開催  
している。

ました。  
**谷津** これは初めての試みとしてやったんですね。

**八巻** 雄勝の人たちが自分たちで新しく立ち上げました。浜でやるお神楽は地域の行事だけど、これは雄勝総合支所の前でやる大きなイベント。総合支所は雄勝町の入り口にあつて、全ての浜の人たちのシンボルみたいなところですよ。雄勝にボランティアで来ていた人たちも実行委員会に加わつて、お客さんもいっぱい来ました。プレハブの商店街みたいなのもあつて、すごく盛大だった。

**谷津** 本来の、神様に奉納するのとは違う形での発表の場を自分たちで作つたというのは、何か心境の変化があつたんでしょうか。

**八巻** 「雄勝の復興のためにたくさんさんの支援を頂いた皆さんに感謝したいからやる」つて言っていました。気持ちには分かるけど、少し心配したんです。「復興しました」つていうメッセージに取られたら、もう支援の手は来ないかもしれないよつて、まだまだ支援が必要ですよつて。そういうメッセージは誤解さ



日本武尊(ヤマトタケル・右)と悪鬼との闘いの場面(2012年9月、10-BOX)

れるかもしれないから、よっぽど慎重にやらないと駄目だよつて思つたの。そしたら、実行委員長さんが当日の開会宣言で「支援とか、復興とかじゃありません。ただ、みんなに楽しんでもらいたいだけです」つて、きつぱりした挨拶をしたの。「支援の手を差し伸べてくれてありがとう」つていうメッセージを一

切言わなかつた。うんとシンプルなあいさつだった。それでいいんだと思う。お祭りは、楽しむためにやるんだと思う。みんなが集まつて顔を合わせて、お互いを思いやりながら地元の芸能を楽しめる場を、作りたかつたんだと思います。生きている地元の人なにとつてのご褒美だったんじゃないのかな。今も浜に人は住んでいなくて、仮設住宅とかに散り散りなんだけど、お神楽の舞台を組んでお祭りをやると人は集まる。そこで「ああ、みんな元気にしてた?」とか言つて顔を合わせることもできる。だから「全てが流された、だから文化も流された」つて言う人がいるけど、そんなことはない。人の思いの中にその土地がある以上、人が住んでいなくても文化は残っているつて、確信できました。

**谷津** 震災後に最初に支所前で演じた時も「こんなに早く見られると思わなかつた」と喜ぶ声が地元の人からたくさん上がったそうですね。

**八巻** そうみたいです。あの時は神楽の人たちも、やつていいのかどうか分からなかつた

と言っていました。お神楽つていうのは祝祭の儀式なんです。大漁や豊作を祝う芸能だから。それをたくさんさんの命が失われたところでもやるべきか悩んだようです。でも町のみんなに「やつてくれ」つて言われた。だからビッグバンではうんと元気だつたんだよ。客席を走り回つたり、ものすごく沸いたんだけど、でも終わった後の会長代行の舞台挨拶には疲れが見えましたね。演じた人たちも被災しているわけですから。

**谷津** ご自身も被災されながら神楽で各地を回るのかなり大変だと思えますが、やることで自分の力になるという面もあるんでしょうか。

**八巻** なくてはならないアイデンティティだと思います。宮守さんに呼ばれて現地の神楽を見たときに、僕は本物のお神楽を知らなかつたと思つた。仙台に来てもらうときに、原形に忠実にやつてほしいから、舞台の組み方とか綿密に打ち合わせて、その演目が本来やるべき時間をプログラムしてあります。多くの民俗芸能祭では「持ち時間20分でやつて

ください」とか言われて、しめ縄も張らないで、原形とは違うものを見せている現状があるけど、僕は原形に忠実にやってみようようにしていた。でも現地で見たら、僕が知っている雄勝法印神楽なんてほんの一部だったと思っただけ。ものすごく濃密で、時間もたっぷり朝から始まって、日が暮れてもなかなかお神輿が落ち着かないんだもん。だから、どんなに頑張っても街中ではほんの一部しか紹介できてないんだって、つくづく思った。

お神楽は再生したと思います。もう神話の世界に到達してしまったくらいシンボリックに。だけど、人間の生活は全然変わっていない。浜は、港がほんの一部復旧しているくらいで、今でも夜は真っ暗で、突然一軒だけ明かりのついている家があるような。道も悪いし、港の岸壁が沈んでいる状態。みんなまだ仮設にバラバラに住んでいるし、浜には人がいない。「買い物に便利な石巻の街中に住んだらいいんじゃないの？」(※10)って言うてしまったことがあるんだけど、「俺たちは昔からここに居るんだから」って。「便利だ

から、不便だからっていうんでなくて、ここに暮らしてんだから、ここに住んでておかしくないんだ」って。ああ、その通りだ、悪いこと言ったなと思った。

**谷津** 舞台が出来上がったからは、浜での奉納は毎年やれているんでしょうか？

**八巻** 多分、今現在3カ所で作れてると思います。そして、最初に再開した大須では自分たちの舞台を作ろうとしています。自分たちのもともとのスタイルを、浜の舞台で神様をお迎えするっていうアイデンティティを取り戻したい気持ち強いんじゃないかな。それを取り戻すのが心の復興なんだろうね。だから、今は地元に住んでいなくても、その土地がおらほの土地だって思える間は、文化はそこにあると思う。浜には住めなくても、舞台が再興してお祭りができる、そして人が集まる、っていう順番なのかもしれないね。

**谷津** 自分たちの手で作り上げていく過程が、本当の復興になるんですね。

**八巻** 全くそうだと思います。僕は、支援というのはリハビリテーションだと思うのね。

被災を怪我に例えれば、怪我した人が自分で歩けるようにリハビリしてあげる。あくまで本人中心で、技術だけを提供してあげるって関係がいいと思うの。だから舞台を作ったのは快適な車椅子をプレゼントしたようなもので、乗り物ができたから、怪我をしててもなんとか出雲大社まで行けたって感じがするのね。それ以上の支援はしてないんです、僕は。呼ばれば喜んで行くし、お祭りも見に行くし。でも後は自分たちでやればいい。

これまでも「助けてあげてる」という考えは持っていないで、一緒にテーブルに着けるのが嬉しいと思ってやってきたけど、それにたつて、距離のある人といつまでも一緒に居られないでしょう。現地の生活は現地の生活で、お友達はお友達で。自分の生活の中で立つて歩くっていうことが大事だから、そのためにリハビリできるようなアイテムを提供したのかもしれないという感じですね。雄勝法印神楽の自立心は尋常ではないから、対等に関われただけでも光榮です。雄勝法印神楽は、鎌倉、国立劇場、出雲大社でたくさん

神様にご挨拶してきて、守られているから大丈夫だと思う。ただ、現実の人間たちの生活はね。雄勝法印神楽が象徴のように復活して、元気の源になっていいるとは思いますが、現実的なところではまだまだ苦しいよね。

**谷津** そこに対して直接何がができるわけではないですね。

**八巻** そう考えていくと、できることって本当、限られると思うんだよね。だから、支援する側が手を貸すのと、支援される側が自分でやれるようになることと同時並行だと思わうね。僕が生活の保障までできるわけではないし、雄勝の人たちがいつも寂しがってるわけでもないからね。

**谷津** 今後は引き続き、再生した雄勝法印神楽を見守っていかれるんでしょうか？

**八巻** そうだね。雄勝のお神楽とか、芸能とか、文化っていうのは、同じ宮城県民である僕の誇りでもあるわけですから。こうやってお神楽から元気になるのは、僕自身の誇り。だから他の人にも知ってもらいたい。面白いから。面白いっていうか格好いいのよ。惚れ

※10  
雄勝町から石巻の街中までは約30km、車で約50分の距離。

ちやいますから。

他のお神楽とも、協力していったらいいよね。雄勝法印神楽が国立劇場に呼ばれたときに、釣弓(ちきゅう)っていう演目をオーダーされたんだけど、今の代の人たちはやったことがない。で、釣弓を得意としている登米(※11)の上町(かんまち)法印神楽の人たちに教えてもらったらいよって言ったたら、何か嫌みたいで、「八巻さん、釣弓のビデオ撮ってないですか?」とかって言うのさ。だから、「あるから取りに来て」って言って、その日に上町法印神楽の人にも来てもらって、直接借りてもらおうようにした。ひと山越えたら同じ演目でも全然違うのは分かるんだけど、協力し合えたらいい。太鼓がなかったら貸してもらおうとかさ。笛1本なくなったら終わりだから、笛だけ助けてもらおうとかして続けていくしかないと思うんだよね、これからは。今は宮城県に160くらいあるお神楽が、あと20年30年したら幾つ減るか分からない。だから顔がつかないと駄目だなと思ってるの。

**谷津** ある意味震災がきっかけになって、つなされたわけですね。

**八巻** 雄勝だけではないんだけど、神楽の担い手が少なくなってる現状はあって。最初に演劇祭の出演交渉に行った時、神楽団体に若い人がいないもんだから組み立てた舞台をバラさないでそのまんま置いてあったりする所も少なくなかったんです。だから僕は、都会との循環が生まれるようにしたかった。都会の人がお神楽を観光のついでに見て、田舎にお金を落として帰る。地元の人以外の楽しみにたくさん見ってもらうことで、自分たちも楽しみながら「自分たちの地域にこんなに素晴らしいお神楽があったんだ」って誇りを感じる。そういうことをやりたいの。

**谷津** 雄勝の子どもたちに神楽を教えるワークショップも震災の前から支援されていましたが、雄勝では小中学生全員が神楽を習うんですか?

**八巻** 雄勝の小中学校には神楽部があるんです。ただ、後継者を育てる取り組みは地域によってさまざま。体育の授業でやったり、授

業の中に組み込んだり、放課後の部活で教えたりする所もある。ただやっぱり学校に入り

こんでやってる所は継続性がありますね。それがやれてない所はどんどん高齢化が進んで、あとは廃絶を待つのみっていう感じだな。

**谷津** 小さい頃から身近で見ていると憧れの気持ちも育って、それが地元に残ったり、帰っ

てくる理由にもなりますよね。

**八巻** 震災で起きている問題というのは以前からあって、震災で露呈したんだと思ってるんだけど、神楽の後継者不足も同じです。もともと戦後の高度経済成長のために、東北の人たちが中央に引っ張られたんだよ、集団就職で。それで核家族が始まって、過疎が始まったんだよ。で、気が付いたら、東京の電気を福島でつくった。バカにすんなと思うよね。だから震災から復興している力強さを東北の誇りにすべきだし、東北の存在感をアピールする材料にすべきだと思う。これ以上、バカにされないようにしたいと思うけど、どうしたらいいかは分からない。こんなにストリートなことを言っただけじゃないかもしれないけど、そういう気持ちがあるね。だから何かのチャンスがあったら、雄勝法印神楽にお出まし願うことはあるかもしれないですね。

**谷津** 八巻さんは神楽以外にも、能を今までと違った形で紹介するなど、伝統芸能を仙台で紹介する取り組みをずっとされていますね。**八巻** 神楽と能って似てるじゃないですか。



雄勝小学校での「神楽の舞ワークショップ」

※11  
宮城県登米市。

楽を奏でて面を着けて物語を舞うわけだよ。四角い舞台で、四方柱で。たぶん根っこは一緒なんです。「能BOX」(※12)で、そういうものを紹介したい。「能BOX」を能楽師がお正月にお参りしてくれたんですけど、舞台にしめ縄張って、楽屋に神棚置いて「毎年こうやってお正月を過ごすんです」って教えてくれました。やっぱり能も神事だし、信仰なんだよね。宗教っていうと今はセクトになっちゃってしまっけど、もともと原初的なレベルで、芸能が信仰から始まっているのは間違いない。石川県、佐渡島とかあの辺はすごいですよ。民俗芸能の宝庫です。前は、太平洋側のお神楽とは別物だと思ってたんだけど、佐渡島に民間の能舞台が20個以上あるんだよ。法印神楽の「法印」っていうのは山伏のことなんだけど、山伏は山を越えるのなんて簡単だから、出羽三山を越えて簡単に行き来してただろうと思うんだよ。だから能楽と神楽の原点はつながっていると思う。新潟の民間の能舞台と東北の組み立て式の神楽舞台の形と分布を調べたらつながると思うんだけど、そんな

暇ないからやれないんだ。誰か調べてくれたらと思うんだけど。

**谷津** 縄文時代は人口の9割が東日本にいたと言われている、縄文後期の土器が東北からすぐたくさん出ていますよね。力強い装飾が施されていて、用途に則して作っただけではなく、祭事だったり信仰のために作ったと思われる。山伏の文化とか、神楽の荒っぽさ、力強さみたいなものも、そういうところとながっているんでしょうか。

**八巻** そうだと思う。何か怪しげな感じ。洗練されたら失われる何かというのを感じるね。それは東北のスピリッツだなって思うし、もっとはっきり自慢したいとか、認められないのもつたいないよね。東北には日本の金脈がまだ眠っていると思う。もっと分析して調べ上げないと駄目だよ。工芸とか舞台芸術以外の分野でも、まだ評価されていない、でも、光り輝いているものが眠っている。今まで中央でやってきたような価値観が崩れてきている中で、東北に残っているものがこの先を考えると重要になってくるはずだ、つ

ていうのはありますね。だから原形をなるべく崩さないで、地元が立ち上がろうとしてつかまり歩きし始めている姿を尊重して、僕たちはそれを知ることが大事だと思うんだよ。震災が起きて、「ネットワーク」とかいっぱいできたじゃない。で、ドンドン大きくならうとするじゃない。でも大きくなるほどアクションがないんだよ。まあネットワークが目的なんだからそれでいいのかもしれないけど、ネットワークからはアクションは生まれません。アクションが生まれるのはプロジェクトだと思う。プロジェクトというのは、顔が見える関係からでないと、パワーは生まれませんという感じがする。僕自身はネットワークに属さないで、今やっていることとか、やるべきことを深めたいですね。

雄勝法印神楽は2012年、13年と「れきみん秋祭り」にも出られているんですが、仙台の太白山にまだ復興できないお神楽がある。震災で神楽舞台は無事で、人も大丈夫だったんだけど、神楽殿の脇の石垣が崩れてしまったんです。それを誰が直すのかはつ

きりしないまま立ち入り禁止にされてしまっていて、まだにお神楽がやれていない。だから去年の「れきみん秋祭り」のときにこの人たち来てもらって、震災以降、初めて舞ってもらったんだけど、新聞記事をみんなに配りました。振込先も書いて。今、町内会長さんがお金を集めて復興しようとしているんだけど、2000万くらい掛かるらしくて。足元にも、こういう困っているお神楽がある。

**谷津** じゃあ、まだまだ、やることはありますね。

**八巻** みんな、そんなにいろんな支援ができるわけじゃないけど。でも僕にできることは、やっついでいこうと思います。

(2014年3月6日 仙台市 せんだい演劇工房10|BOX)

※12 「せんだい演劇工房10|BOX」の別館として2011年8月にオープン。協同組合仙台卸商センター所有の倉庫を改修し、個人から仙台市に寄贈された稽古用能舞台を移築した施設。

# 4 CASE

## ユイノハマプロジェクト

牡鹿 - Oshika -

ユイノハマプロジェクトの舞台となった石巻市桃浦地区は牡鹿半島の漁村で、東日本大震災による津波で60数戸あった住宅が4戸を残して全て流された。桃浦地区の荻浜小学校はもともと全校を合わせて21人の学校だったが、被災後は転出により9人になってしまった。当時、荻浜小学校で教鞭を取っていた大森光洋教諭と知人であった美術家の岩間賢が、被災でバラバラになってしまった子どもたちと桃浦地区を支援するために始めたのがユイノハマプロジェクトである。岩間と、震災当時会社を辞めたばかりだった大島公司が中心になり、建築家、デザイナーなどの仲間を呼び集め、学校行事の応援、瓦礫撤去、集会所の建設などを行った。

### 雄勝法印神楽 舞の再生計画 | 活動の記録

2011年	3月	東日本大震災発生
	5月	雄勝総合支所前で震災後初めての雄勝法印神楽奉納が行われる
	8月	八巻寿文が石巻市で雄勝法印神楽保存会の伊藤会長代行と再会
	9月	八巻らが「雄勝法印神楽 舞の再生計画」として神楽舞台を製作する
	10月	「鎌倉芸術祭」(神奈川県鎌倉市)「れきみん秋まつり」(宮城県仙台市)にて、製作した神楽舞台を用いて雄勝法印神楽が公演。「れきみん秋祭り」にて舞台の贈呈式を行う
2012年	5月	雄勝町大須地区にて、震災後初めて地元での神楽奉納が行われる
	9月	せんだい演劇工房10-BOXで行われた「古典芸能ふれあい祭」にて上演
2013年	5月	国立劇場「東北の芸能II[宮城]」にて上演。同月、出雲大社にて奉納
	9月	「雄勝秋の芸祭 鼓舞」が実施される
2014年	8月	「第2回 雄勝秋の芸祭 鼓舞」が実施される
	10月	ロシアで毎年行われる文化紹介イベント「日本の秋」(会場:モスクワ音楽院ラフマニノフ・ホール)で上演

大島公司へのインタビューは、他の8人とは異なった印象を与えている。その受け答えがあまりに「素直」だからだ。

インタビューを行うにあたり、私は礼儀として、プロジェクトの主旨や経過についての資料を目を通し、それに沿って質問をするようにしていた。だが大島は、私が聞くことのごく、ごく身に覚えがないような反応を見せた。大島は、ユイノハマプロジェクトの

発起人である岩間賢（P102よりインタビュー掲載）と共に震災後の桃浦地区を訪れ、その後、最も頻繁に桃浦に滞在し、先頭を切って活動してきた。当初東京圏から通ったメンバーがそれぞれの生活に戻り、石巻市に拠点を移し、浜の人びとと交流を続けている。だが大島は、被災地外の人びとが時に期待するような言葉を一切発せず、「成りゆきでそうなった」「仲の良い人に会いに行っているだけ」と縁

り返す。

被災地の暮らしは特別なものではなく、そこには他の多くの土地と同じように、延々と続く日常が存在している。日々起きる問題やそこで暮らす人びとの心情は当然、一人の来訪者に代弁できるものではない。本稿は、そんな当たり前のことに気づかせてくれる貴重な聞き語りになっているのではないかと思う。大島は、テープ起こし後の原稿も全く修正しなかった。



## 大島公司

Koji Oshima

クリエイター、猟師、花火師

佐賀県生まれ。2年間の会社員生活を経て、やりながら考える生活をはじめ。気になることをとにかくやっているうちに、「巻き狩り猟」「わな猟」「打ち上げ花火」「線香花火」「手筒花火」「庖丁研ぎ」などをまねぶ。2015年1月、PHP出版より初の著書『猟師、花火師、ときどき祭り 29歳元広告マン「あんた誰？」からの出発』が出版された。

**谷津** 一番最初にユイノハマプロジェクトを立ち上げた時、そもそもこの活動をどういう主旨で始めたのかというところから、どういう風にこの3年間、活動してこられたのかがいたんですが。

**大島** どういう主旨で……。どういう主旨なんでしょうねえ？ たいしてそんな大それた主旨は無かったような気もするんですけどね。

**谷津** 岩間さん（※1）が荻浜小の先生と知り合っただことから、桃浦に行っただことよね。

**大島** そうですそうです。一番最初のスタートは岩間さんが荻浜小の大森先生（※2）と知り合いで、岩間さんが大森先生に手紙を届けに、あと物資とか美術用具みたいなものを届けに行きたいということで誘ってくれて。それが4月の下旬ですね。

**谷津** 被災地に来たのはそれが初めて？

**大島** はい、2人とも初めてです。それで最初大森先生に会って、半島内（※3）を案内してもらって。その時に途中で桃浦にも寄って荻浜小で校長先生と話したり、PTA会

長の甲谷さんと話したりしてたんですよ。で、その日は大森先生のご実家に泊まって、翌日、桃浦の瓦礫を漁師のおっちゃんたちが拾っているのを一緒に手伝って、また校長先生と話して、コンビニの駐車場で車の中で寝て、という感じでしたね。

**谷津** その時は岩間さんと2人だった？

**大島** 2人です。その次はゴールデンウィーク明けぐらいに大森先生と校長先生から誘いを受けて、小学校の運動会があるから一緒に盛り上げに来てくれみたいな話で、3泊か4泊くらい来たんですよ。その時は10人ぐらい、岩間さんの友達だったり僕の友達だったりに声をかけて一緒に来て。で、運動会に参加して、そのときに校長先生といろいろ話している中で、小学校の裏手に流れている沢が津波で埋まってしまったと。その沢は鮭が遡上したり、沢ガニがいたり、どんこ（※4）がいたり、子どもたちが手づかみで遊んだり釣りしたり、「課外学習の特別な場だったんだよね、だからなんとかしたいんだ」ということを言っていて。校長先生がすごいユニ

※1 ユイノハマプロジェクトの発起人、P102からインタビュー掲載。

※2 荻浜小学校の大森教諭（当時は、岩間が中国に赴任していた際、北京日本学校で教鞭を取っており、岩間の娘の恩師にあたる）。

※3 牡鹿半島、宮城県北東部に位置し、三陸海岸の最南端。半島全域が山地であり、リアス式海岸の谷間に漁村が発達していたが、東日本大震災での津波被害が甚大だった。

※4 川魚（小魚）のこと。

クな方で、何か手伝えればなと思って。沢の掃除は行政でも、民家とか、もつと大事なところがあるだろうという感じでなかなか手をつけられないところで、そこを綺麗にしたら少しは子供たちが学校に来るのが楽しくなったり、前みたいに遊んだりすることができるとかな、みたいな話をして、運動会の手伝いをして泊まっていた期間から沢の掃除を始めたいですね。ちょうどその辺が一応グループの立ち上げみたいな感じでしたね。

てしまっただんですよね。  
大島 はい。9月の台風が何かで。その頃に集会所の話(※5)が出て。7月24日に漁協の支部長をやっている後藤タテオさん(※6)の家でその話が始まったんですけど。4月や5月頃は、校長先生や大森先生はいろいろ話してくれたんですけど、浜の人は今思うと気質だと思うんですけどそっけなくて、ぜんぜん話してくれなくて。いっぱい通うようになってきたら、タテオさんが「掃除終わっただ後においで」って言うてくれてお茶飲んで話したりとか、掃除してもジュースくれたりとかして、6月くらいからちよつとずつ親しくなつて。7月24日に、ちよつとタテオさんがそれまで泊まっていた高台のハツヨさんの家から石巻市内のみなし仮設(※7)に引越す日だったんですけど、その時に、「浜のこれからを考えていく時にみんなが集まれる場所が必要だよ」という話になって。いろんな支援をとりつけてなんとかできるかもしれないですねみたいな話になって始まった感じですね。だからけつこう行き当たりばった

※5 ユイノハマプロジェクトの活動として、2011年に桃浦地区の集会所建設を行った。積水化学工業株式会社とアーツ千代田3331中村政人氏の協力により、住宅に用いる鉄骨のボックス型ユニットの提供を受け、メンバーやボランティアでこれに内外装を行った。

※6 宮城県漁業共同組合桃浦出張所支部長の後藤建夫氏。牡蠣養殖を営んでいた。

※7 P44※12参照。

谷津 その時に沢の掃除をしたメンバーが継続的に来るようになった？  
大島 まあメンバーは入れ替わり立ち代わりなんですけど、そこにいたメンバーは頻繁に来てくれたりしてましたね。…という感じで、主旨というほどのものはなく、正直なんとなくなんですよね。まあ縁も生まれてついで、それでちよくちよく通うようになって、月に2回くらいずつですかね？何日かずつ。沢掃除は結局7月くらいまでかかってやつと綺麗になった感じでした。

谷津 その沢が、土砂崩れでもう1回埋まっ

りです。という気はしますね。そういう感じですね、スタートは。で、1年目は集会所を作ったのがメインで、作りながら子供たちと遊んだりとか、一緒に壁に絵を描いてみたりとか、ご飯食べたりとかです。子どもたちは震災前21人だったのが、夏が明けた時点で13人に減って、2012年の春に9人になりました。

りです。

谷津 実際はあの時はみんなそうなんですよね。現地に行つてその人と話して求められたものややつて。

大島 それぞれ必要としていることは違つただろうし、最初に誰と接触したか、誰と会つたかによつてもぜんぜん違うんじゃないか

ていう気はしますね。そういう感じですね、スタートは。で、1年目は集会所を作ったのがメインで、作りながら子供たちと遊んだりとか、一緒に壁に絵を描いてみたりとか、ご飯食べたりとかです。子どもたちは震災前21人だったのが、夏が明けた時点で13人に減って、2012年の春に9人になりました。

谷津 企画書では、残つた13人以外の子供たちが浜に集まる機会を作ることが目的となつていましたが、それはできたんでしょうか。

大島 サマーキャンプとかやりましたね。肝だめし的なやつとか。「しのくに」(※8)っていうユニットが来て子供たちと一緒に歌を歌つたりとか。サマーキャンプには子どもたちほとんど来ましたよ。校長先生がユニークで面白すぎるくらいの人で、もともとのがりでお母さんたちに声をかけて。まったく僕らの力じゃないです。

谷津 集会所は初年度に出来上がったんですよ。

大島 3月ではほほ出来てましたね。4月12日が神輿の日で、その頃から神輿のプロジェクト



津波により瓦礫で埋まった荻浜小学校の沢を掃除するユイノハマプロジェクトメンバーら

※8 松村志野と齋藤邦彦による音楽ユニット。2011年の7月からユイノハマプロジェクトのメンバーとともに荻浜小学校で活動、サマーキャンプで「今君に」という楽曲を歌い、2011年度の卒業式では荻浜小学校の子どもたちが「今君に」を歌った。

トも動いてたんですよ。

**谷津** 次の4月には神輿を出すんだと。御神輿自体は流されなかったんですか？

**大島** 神輿自体は残ってたんですけど、神輿につける飾りが全部流されちゃってたんですよ。集会所の上棟式(※9)をしたときに、奥様方もすごい生き生きしてたし、おっちゃんたちもすごく面白そうだったんですけど、その時に「実は神輿が流されて」みたいな話になって。神輿がすごい面白くて、人の家にポコポコぶつけて壊したりとか。壊す家も、「あいついけすかねえなあ」とか「最近調子にのってないか」みたいな人の家を壊したりとか、あとバスに突っ込んだりとか、ミヤコーバス(※10)なんですけど。結局保障しなくちゃいけなくなっただけというオチつきなんですけど。あとは海に入ってしまったらそのまま神輿が流されちゃったとか。すごい面白くて、それで、神輿やりたいなっていうのがあって。飾りがなくてもやるという方向はないうんですかって聞いたら、ない。その時点で2月の頭で。飾りを作るのに1ヶ月強くら



2011年のサマーキャンプ

いかかるとなると、そこから資金集めを始めてもほぼ無理なんじゃないかと。なので、じゃあもう注文しちゃいましょうと言って注文しちゃって。なんとかなるだろうという見切り発車で。で、結局クラウドファンディングでお金が集まって、その流れのまま夏祭りをやったという感じですね。

**谷津** 集会所が出来上がって、集落の人たちに使われる場所になったんでしょうか？

**大島** いや、そんな使われてないですよ。最初のうちは高台移転の会議だったりとか、合同会社(※11)の会議だったりとかかっていうのでちよこちよこ使ってもらってたみたいなんですけど、だんだん高台移転で戻ってこようという人が少なくなっただけで、会議もあんまり開かれなくなっただけで、人の家でおさまるぐらいの人数になっちゃって。合同会社の方もタッグを組む会社が決まって(※12)、かなり早い段階で仮設の事務所を建てたんですよ。なのでそっちに会議も移って。というのであんまり用途が無くなっただけ。

**谷津** 合同会社が始まったのが2012年の9月ですよ。それぐらいまでは、浜のことを話し合う場所として集会所が使われていたんです。

**大島** そうですね。正直ちよつと、今振り返ると、あんまりうまいやり方じゃなかったなという感じがしますね。もうちよつとやりようを考えるべきだったなと。

**谷津** どういうところがですか？

**大島** そういうところもよくわかってないんですけど(笑)建てる段階でもっと一緒にやりたりとか。一緒に使い方を考えると、ちよつと無理してでも集まれる場、集まろうとする場にすることを一緒に考えた方がよかったです。最近になって、石巻の方に出ていっちゃった人から「やっぱり桃浦がよかったね」という話もちよこちよこ出てきてるっていう話を区長さんとかから聞いて。無理矢理にでも集まる機会を設けたりしておけば、もうちよつと機能する場所になったのかなっていう気がしますね。

**谷津** それは遠慮があったということなんですか？

**大島** うーん…。なんだろうなあ…。なんかなんとなく、とにかく早く作ろうとか、求められているものだから、ソフトのことを考えなくても自然に使われるんじゃないのかとか、無理矢理集まる場を作るのは不自然なんじゃないかとか。

**谷津** 外から来た人間が「集まってください

※9  
2011年12月17日に、桃浦の人びととユイノハマプロジェクト他のボランティア団体で行った。P86〜87に写真。

※10  
「宮城交通」のバスの呼称。

※11  
桃浦かき生産者合同会社。復興庁が制定した水産業復興特区法の適用を受け、外部の民間企業との協業で漁業を再生させることを目的に2012年8月30日に設立された。

※12  
2012年10月より、仙台市で水産卸業を営む株式会社仙台水産が合同会社に参加した。

い」というのが不自然だと。  
**大島** 外からでも、内側からでもというか。うーん。その判断はいまだについてないんですけどね。自然にそういうのが生まれるのを待った方がいいのかとか。

**谷津** 最初に集会所を作ろうという話をした後藤さんとは、作っている間はこういう関係だったんですか？

**大島** しよっちゅう家に行つてご飯食べさせてもらったりお茶飲んだり。最初、タテオさんも集会所の後ろに同じサイズのをもう2棟建てて奥さんと一緒に住むとおっしゃって。家族の意向で結局石巻市内に新しく家を求めようということになったんですけど。いまだに会ったり電話したり続いてて。仲良しのおっちゃんですかね。

**谷津** 後藤さんは集会所の進行状況は共有していたんですか？

**大島** そうですね。浜に来ていた漁師のおっちゃんたちはいつも、牡蠣持ってきてくれたりとか、「ぜんぜん進んでないね」とか「今日は進んだね」とか、茶化しにというか、すこ

く来てたので。だから作ってる時間は全く無駄じゃなかったというか、ものすごく密な関わりがそれで生まれたというか。作業をしていると高台に残った家に住んでいるハツヨさんが声をかけてくれてご飯食べに一緒に行ったりとか、たわいのない話をしたりとか、いまだにいろいろ話をする仲になつてるので、そういう意味ではすごくよかったですね。

**谷津** 集会所が出来上がってから使ってくれたのはその方たちなんですかね。

**大島** そうですね、それと高台移転の打ち合わせとか。区長さんだったり住民の人だったり。

**谷津** 1年目に集会所は完成して、2年目はいろいろワークショップをやっていたという感じですかね？

**大島** ワークショップ？

**谷津** 報告書では子どもたちと歌っている写真をいただきましたが。

**大島** 「しのくに」と一緒に作った歌のレコーディング体験をしたのと、地区の夏祭りの時に一緒にステージに上がって校長先生と一緒に歌ったりとか。餅つきやったり炊き出

しやったり。

**谷津** あと、花火作りを習う機会を持ったというのと、地場産のモノづくり、あと遺跡調査というのが書いてありました。

**大島** 花火師っていうのは僕なんですけどね。

**谷津** あ、そうなんですか。

**大島** 遺跡は、給分(※13)の方に住居跡が見つかつたんですよ、高台移転の予定地の造成作業をやっている時に。その発掘作業をやっていたのが市職員の人で、その人が松浦校長先生と仲良しだったみたいで、そういうご縁で連れていってもらつたっていう。

**谷津** それは子どもたちも一緒に行つたんですか？

**大島** そうですね。

**谷津** 2年目はペースとしてはどれくらいで行つてたんですか？

**大島** 相当行つてましたよ。夏は1ヶ月まるまるでしたし。かなり行つてますね。月2以上行つてたような気がします。日数はその都度違いますけど。長いと1週間とか。

**谷津** 集会所を作っていたときもそんな感じ

ですか？

**大島** 集会所を作っていた時はもっと頻繁ですよ。1週間ぶつ通しを月に2.5回くらいやつたりとか。

**谷津** 集会所を作ったことで浜の人とか漁師さんたちとか子どもたちと仲良くなって、頻繁に行くようになって、お祭りを手伝つたり、ちよこちよこ遊ぶ関係をずっとやっていたと。

**大島** そうですね。

**谷津** 2年目あたりはメンバーはどんな感じだったんですか？

**大島** いろんな人がきましたね。

**谷津** 入れ替わり立ち代わり？

**大島** そうですね。知り合いで行つてみたいという人を連れてきたり、その人がまた新しい人を連れてきたり。

**谷津** 初年度からずっと来てる人もいた？

**大島** ずっと来てる人はいないですかね。でも祭りの時とか、年に2、3回くらい来たりはしてましたね。

**谷津** ずっと継続的に来ていたのは大島さんと岩間さんだけ？

※13  
 宮城県石巻市給分浜。桃浦の北東に位置する。13km程度の距離。



**大島** そうですね。

**谷津** 浜の様子はどうだったんですか？

**大島** どうだったんでしょねえ。おっちゃんたちはなんとなく元気でしたけど。浜の様子って言っても本当に人がいないんで。区长さんはずっと、自分が生きている間に少しでも桃浦がこれからも続いていくようなきつかけだけでも残したいと言って、ずっと頑張ってる、今でも走り回ってる感じですけど。でも2年目となると、牡蠣の収穫もできてるし、合同会社設立に向けて動き出してもいいので、そんなに「どうすっぺ」みたいな感じではなかった気がするんですけど。もともと160人くらいいた中で残ってるのは4世帯なんで、ちよこちよこ浜に戻ってきて話したりしてた人を入れても30人もないくらいなので、浜の様子と言っているのかわからないですけど、それなりに模索しながらなんとかしてたっていう感じだったんじゃないんですかね。

**谷津** 子どもたちは2年目は9人のままだったんですか？

**大島** いや、夏で2人抜けたのかな？夏で2人抜けて、で7人ですよ。で、卒業で2人いなくなると5人、1人引越しちゃって4人で今年度スタートですよ。今は4人で3月で3人卒業しちゃって、1人はもう転校しちゃうので、それで春から休校です。

**谷津** 今残っている4世帯に加えて、高台移転で5世帯戻ってくるんですよ？

**大島** あと一応、合同会社が寮みたいになつて2、3人が寝泊まりしますね。

**谷津** 今いる小学校の4人の子どもたちはどこから来てるんですか？

**大島** ああ、荻浜小はもともと、桃浦だけじゃなくて七つの浜から集まってきたので。震災前から、桃浦にいた子どもは3人だけなんです。

**谷津** じゃあ、震災後に引越してしまったというの、他の浜の人も含めてのことなんですか？

**大島** そうです。他の浜もほとんど被災してるので。今4人いるうち2人、6年生が桃浦ですよ。

**谷津** その2人は卒業はしてしまうけど浜には住み続けるということなんですか？

**大島** そうですね。

**谷津** 今年度(2013年度)はどんな感じに関わっていたんですか？

**大島** 花火を作って、桃浦と、荻浜小と東浜小のサマーキャンプと、牧浜の4カ所で花火上げて、夏祭り手伝ったりして、っていう感じですかね。それ以外はただここで暮らしてましたね。猟して。

**谷津** 月に1回くらいは遊びに行ってた？

**大島** そうですね。桃浦に限らないですけど、仲のいい人のところに。

**谷津** 夏祭りに上げる花火を大島さんが作っている？

**大島** そうです。

**谷津** 震災前はどうしていたんですか？

**大島** 震災前はやってないです。2012年の夏祭りにフィナーレで上げて、すぐく浜の人たちが喜んでくれて。その打ち上げをやってくれたのが古川(※14)の業者で。その門を叩いて教わり始めて。

**谷津** ああ、そこからなんですか。

**大島** そうです。そうですね、ぜんぜん浅いです。そこで一応職人としてやらせてもらって教わりながら作って。だから石巻へ移住してきただけというのがありますけど。もうほんとにひたすら花火屋にずっと行って。だったからこっちに移っちゃった方が早いやというか。

**谷津** 今年の花火は全部大島さんが？

**大島** いや、ごく一部ですね。綿々と受け継がれている技術の一部を学ばせてもらって打ち上げたという感じですね。

**谷津** 資格も必要ですよ？

**大島** そうですね。資格も取って。

**谷津** 最初の目的として言っていた、「故郷を守る」ということについてはどうですか？

**大島** ；気持ち悪いですよ。ちよっとよくわかんないんですよ。書類に書いてるのは作文用の文章なんで、気持ち悪いんですけど。僕、団体とかも好きじゃなくて、正直。固定されて目的化されるのがすごく気持ち悪いし、やりたい人がやればいいやっていう。そうじゃないと多分エネルギーが出ないし、や

※14  
宮城県内陸部の大崎市に属する地域。桃浦から50km程度の距離。

る人がみんな本気にならないと動かないし面白くないと思うんですよ。それこそ、そこに住まないといけない理由なんてないはずで、住みたいから住むんだろし。住まざるを得ない状況とか、動けない状況もあったりとか、それぞれいろんな事情があると思うんですけど。なんでしょね…。すごくいいところだから僕は住んでるし…住む場所を探してる人がいたら「いいところあるよ」、っていう気持ちは自然というか、嫌じゃないなという気はしてるんですけど…商店街を盛り上げるとか、地域活性みたいなやつとかって、誰も否定しちゃいけないゾーンみたいなのに陥りがちというか。変な聖域ができちゃうと、もともと根本の、一番大事にしておきたいことだったり、個人でそれぞれ違うけど、そこが大事なんじゃないかっていうところが議論できなくなるような気もしてて。うーん。なんだろうな…。

。なんでしょね(笑)区長さんとかハツヨさんとか、桃浦に残ってる人はそういう感じで、それは応援したくなるというか。特に区長さんは、この土地がどれだけいいのかと

いうことをいつも言ってるし、「市内(※15)が便利だからいいって言われたけどここでこういう暮らしをするのがすごくいいんだよね」みたいな話をすごくされてて。僕もそれは共感できる場所があった。

**谷津** 区長さんも漁師なんですか？

**大島** いや、区長さんは水産試験場の職員で、半分公務員みたいな感じで。自分の船も漁業権も持つてるんで、自分で魚を獲って。区長さんの場合は人にあげるのが喜びだったみたいなんです。定年になって浜で漁をやって、それを近所の人に配ってあげるっていう。畑をやっている人はいっぱいいるんで野菜はもらえるし、魚もそうやって循環するし、だから「食べ物はんまり買ったことがないんだよね」みたいな話をして。それはやっぱり桃浦のオリジナリティというか。すごくいいとこだなって。本当にまさにその土地を活かした暮らしをしているんだなあというのがあって、そこは僕も猟をやっていることもあって共感できるというのがある。

**谷津** 他の方たちが行けなくなっても大島さ

んが桃浦にずっと通い続けているのは、そういうところに惹かれたからなんですか？

**大島** 土地に惹かれるっていうのは僕正直あんまりないんですけど、仲良しのおっちゃんおばちゃんの顔見たいとか、元氣してるかなとか。そういう感じですね。

**谷津** 震災の前は東京にいらっしやっただんですよね？

**大島** 広告会社に勤めてて、通販事業の立ち上げをやったりとしました。

**谷津** 初めてお会いした時はプランナーの名刺をいただいて、でもその時にすでに「猟師をやる」とおっしゃっていました。

**大島** そうですよ。当時から(狩猟)免許は持つてるはずなんです。もともとちっちゃい頃から魚突いたりしてたんですよ。ずっと今も突いてるんですよ。

**谷津** 九州で修行されたと言っていましたよね。  
**大島** そうです、宮崎で。罾猟は宮崎ですね。今も行ってます、宮崎は。

**谷津** 会社員をやっていた頃から、猟師をやったり、自給自足のような生活してみた

いという気持ちがあったんですか？

**大島** 自給自足をしたっていうのはあんまり無いですね。なんかその、広告会社の中から消費社会をのぞいていると、商品とかサービスって、評価されなかつたら消えて行くわけじゃないですか。評価されなかつたらその自分の体に価値がないというか意味がないような状況に置かれて、それって商品とかサービスに限らず、人も、ビジネス社会っていうところがあるような。「あいつ役に立つ」とか。それってすごい息苦しいっていうか生きづらいなっていうのはずっとあって。別に人に評価されなくてももう生まれちゃってるんで、「そんなこと言われても」っていう。まあ、死ぬか生きるかって言ったら僕は「生きる」を選ぶ中で、人に評価されることばかりを考えて生きるのってすごいやだなって。かといって仙人みたいな暮らしは僕

はできないから、その中でどうやったら生きれるんだらうみたいな。どういう生き方とか暮らし方があるのか探りたいなっていうのが会社を辞めたきっかけとか。猟をやるの

※15  
桃浦から車で30分程度の石巻市の市街地を指す。

は、もともと魚を突いてきたというのもあつて、食べ物で獲りたいっていうのは一つありますね。スーパーで当たり前のように死体とか肉がいっぱい陳列されて、値段がついてると思うんですけど、それって全部、人にかかっている値段じゃないですか。結局食べ物に対しては値段なんてない。何も対価を払ってなくて。自分が何かを食べるってどういうことなのか。それは、ただ「いただきます」っていうんじゃないよなっていう気がして。食べることにしているって考えればいいのかと思つて。だったら自分で獲ってさばいて食べてみよう、みたいな気持ちからですかね、やり始めたのは。

**谷津** 桃浦は比較的、自然と向き合つてそこから食べ物獲つて、という暮らしをしているわけですよ。そういう人たちと仲良くなって、猟をできる場所も得られた。花火は新しく興味が出てきたんですか？

**大島** 桃浦で上げるまでは、やつてたら行くけど人が多かつたらめんどくさいなぐらいの程度でしたね。

**谷津** 花火作りを始めたのは、桃浦の人に喜んでもらえたから？

**大島** 花火を喜んでくれたのは出し物を企画した人としては嬉しいですけど、そういうことより、自分がいちばん心が動いたんじゃないですかね。花火に対してっていうのもあるし、「そんなに人を喜ばせることができるツールなんだ」みたいな。その時の花火ってすごい綺麗に見えたし。誰かのために作ろうって感じでもなかったですね。

**谷津** 作るのが楽しくなつてしまった。

**大島** 作り始めたなら、作るのがすごい面白いていうのは生まれましたけど。工場がまたすごいいい工場。花火に関しては、荻浜ですつとよくしてもらつたミユキさんという人がいて、その人が一番大きいかなつて。ミユキさんの家にはご飯食べにいくだけなんですけど、いつも2週間ぐらい行かないと「何してんの？」って電話くれて、行って、くつちゃべって帰るみたい。ご飯しか食べに来ないんだから」とか言われながらすごい可愛がってもらつて。「そろそろボランティア



荻浜小学校校庭の整備を手伝う大島(左)

アじゃなくて自分たちでなんとかしなきゃいけないんじゃないかって話してるんだよ」みたいな話をずっと聞いて、「来年の夏祭りは自分たちの力でなんとかやりたいんだけど、あんた花火あげてよ」みたいなことを言われて。で、なんとかミユキさんに喜んでもらいたいて思つて。だから荻浜の花火は一番思

い入れのある花火ですね、去年の花火の中で。最初からボランティアで来てるつもりもないし支援してる気もない中で、支援する側とされる側の変な壁みたいなものを感じるものがあつたし、いまだに感じることもあるけど、そうじゃなくて気兼ねなく行ったり来たりできるような関係になるのが一番の面白さというか。東京にいて仕事してたら絶対にないよな。もともとじいちゃんばあちゃん子なんです、年寄りの人が好きなんですけど、花火屋も年齢層すごい高いんですね。50代以上、ほぼ60代以上みたいな感じなんですけど。職人のおばちゃんに可愛がってもらつて、いつも野菜もらつたりとか、家について家族ぐるみで可愛がってもらつたりとか、そういうのが生まれるのってすごいいいなあというか。そういうのがいいですね。

**谷津** たまたまここに来たことでそれが実現できた。

**大島** 求めてたわけじゃないんですけどね。居心地いいですね。居心地な気がしますね、人が住む理由は。いろんな要因はありつつも、

なんとなく仲良しな人が周辺に増えて。それがなかったら、花火のことがあっても暮らしの場を移すことは多分無かっただろうし。

**谷津** 周りがどうなっていくかはともかくとして、桃浦なり牡鹿の浜の人たちとこれからも普通に仲良くやっていければという感じ？

**大島** そうですね、まあ、先輩方ばかりならんですけど。

**谷津** 浜に残っている方は今どんな感じなんですか？区長さんは「桃浦らしさをずっと未来に引き継いでいけるようにしたい」と他のところでも書かれていましたが、他に浜にいる方とか、戻って来ようとしている方というのは、どういう思いなんでしょう？

**大島** どういう思いなんでしょうねえ？みんなけっこう適当な暮らして言ったら失礼ですけど、けっこう現代的というか、普通の暮らしをしていると思いますけどね。

**谷津** みんなが漁業者なわけじゃないし。  
**大島** 漁業者でもけっこう適当で、なんでもバカスカ燃やすし、海にゴミ放るし、肉大好きだし。僕、人が思い描くようなストーリー

を求めちゃダメだなんて、この2、3年ですごく思うようになって。そうそう人は感動的にとかストーリーっぽく生きてないぞっていう気が。もっとけっこう泥臭いぞっていうか。絵にならない生き方をしてるなっていう。人付き合いもそうだし。足の引つ張り合

いみたいなことだってよく聞きますし、一つのことをやるにしても賛成反対もあるし、叩かれることもあるし、嫌われることもあるし、それも含めて人付き合いのなかなみたいな。ちよっとわかんないですね。何を考えて戻ってくるのか、正直ちよっと。

**谷津** 桃浦に戻ってきててもお店も何も無いわけでももんね。

**大島** まあ車はありますから石巻にはすぐ行けますけど、住むとことしては、うーん……どうなんでしょうねえ。仕事という意味では、合同会社がもうガッチリしてて。桃浦は漁業特区に唯一手を挙げたっていうのもあって、ものすごいスピードが早いですよ、復旧の。もうほぼ防波堤も出来ちゃってるし、船着き場も出来ているんなところの船を受け入れて

ていきましたが。

るし、加工場ももうできちゃって秋から稼働し始めて、社員も何人か新しく雇ったりして、あと、桃浦に移住したいっていう人も6人ぐらいいて。

**谷津** それは合同会社の関係者ですか？

**大島** いや、関係なく。1人は採用された人ですけど。あとは、定年を迎えた夫婦とかが移住したいって。

**谷津** 桃浦で移住者を募ったりしたんですか？

**大島** 支援団体が漁師の体験学校みたいなのをやったんですよね。それでニュースに出たりとか、区長さんがメディアに出て「移住者を受け入れたい」って話したりしていたら問い合わせが来て。ただあそこ、造成しなかったら住める場所が無いので。残ってる場所もないし。高台に住めるのもともと住んでた人だけだから、もう、どうしようもないな感じ。

**谷津** 受け入れ体制が整っていないと。企画書では、ユイノハマプロジェクトがその漁師学校のようなものを作りたいということになっ

ていきましたが。  
**大島** あんまり人を巻き込んだり人に何かしてもらおうっていうのに興味ないっていうか。人にこう動いてほしいなっていうのをコーディネートしたりするのがすごい嫌なんですよ。

**谷津** 桃浦に人が増えなくても、これはこれで自然な成り行きだからいいじゃないかと。

**大島** そう言うとうすごいドライな人間に聞こえますけど、桃浦が素晴らしいところですよって言うって桃浦に人が来たら、他の地域から人が減るわけじゃないですか。どこに行くかはその人の自由だし、そこが残るか残らないかは「残したい」っていう強い意思と偶然が重ならないと残らないと思って。あと比較論がすごく嫌なんです。僕は佐賀出身だし、いろいろな人に会いに行くのは好きなんです。宮崎に罌を習いに行ったり、尾道いったり、新潟いったり、いろいろ行ってきて、僕はここを別に最上の場所とは思ってないというか。ここに限らず、ピンポイントで「尾道のあの坂の具合は素晴らしいな」とか、「宮

崎のあの川の透明度は半端ない」というのはあっても、どこもたいして変わらないっていうのが僕としては自然な気持ちで。だから僕はそういうところに対して嘘をつけないというか。宣伝しきれないですよ。すごくいいとこだし、そういう場所に移住したいっていう人がいたら移住するのはいいと思うんですけど。僕が移住するのはぜんぜんかまわないですけど、人に「こいいいよ」って引き寄せようなどは、桃浦に限らず、あんま無責任に言えなくなっちゃって。前職のアレルギーもありますけど、なんか嘘ついてるみたいで。

**谷津** 特に震災後にそういうものを感じるから、ということがあるんでしょうか？ 紅白歌合戦でもやたら「ふるさと、ふるさと」って言うてましたよね。

**大島** 間違いないあるでしょうね。否定できない言葉で埋め尽くされてるというか。どう考えても人と人って違うというか、交わるところはあっても、そこまでは交わらないんじゃないかと思ってる。だから土地とかそう



大島が定期購読する国立民俗学博物館の広報誌「月刊みんぱく」

いう漠としたものはよくわかんないですね。猟とかピンポイントだと、「むちゃくちゃ面白いよ」って言うて人を連れて行って体験させたりとか、さばき方教えてあげたりすることはできますけど、町とか言われるとわかんないですよ、なんか。

**谷津** 桃浦の獅子振り(※16)を調べて記録

を取っているとおっしゃってましたが、それも獅子振りにピンポイントで興味を持ったから？

**大島** 単純に祭りとか神輿とかが面白いなあって。獅子振りは悪魔払いだって区長さんが言うてるんですけど、今ってみんな悪魔なんて信じてないじゃないですか。区長さんに「悪魔ってどういうのを想像してたんですか？」って聞いたたら、「一応あると過程して振ってたんだけど」みたいなこと言ってたんですけど、なんかよくわからないけど面白くて。僕、国立民族学博物館の月刊誌を定期購読してるんですけど(雑誌「月刊みんぱく」を出す)、こういうのって面白いですよ。民俗芸能ってすごくキレツなのが多くなって。

**谷津** すごいですね。へー。

**大島** お祭りの時だけは何しても許されるというか。僕、倫理観みたいなやつがすごく嫌いで。(雑誌を指して)こういうのを大事にしてるのって、倫理観とか常識みたいなものとうまく距離を取る方法なのかなと思って。獅子振りもその一つなのかなって。だから単

純にやってみたいなというのと、定型化されてないものというか、人の身体にしか残ってないようなものつてもう、その人が死んじゃったらそれで終わりなわけじゃないですか。猟もそうだし。そういうのを受け継いでいくってすごい面白いというか、すごい貴重な、自分の身体に蓄えていく感じが。そういうのに携われるってすごい面白いなと思うんですよ。

**谷津** 桃浦の御神輿も、定型化されてないわけですよね。気に入らない人の家につけるといいうのは、儀式として必ずそうするわけではなく、その時の空気やるといいうことですもんね。ずっと参加している人じゃないとわからない呼吸がある。

**大島** 「勝手に海に入っていくんだ、俺は何もやってないけど」とか言うて、絶対に意思のもとにやってるんですけど、それを神のせいにしてはっちゃけるみたいな。外せる時を持つっていうか、そういう時であるべきな気がして。世の中、どうしようもないもの、よくわかんないものに溢れてるような気がし

※16  
獅子舞のこと。

てで。生きてること自体もよくわかんないし、この世の中が成り立っていること自体もおかしいという気が僕はしてるんですよ。いろんなことに対してみんなあーだこーだ言ってるけど。偏りたくないですよ。

**谷津** 決まった価値観に縛られたくない？

**大島** もう縛られないことになっちゃってるんですよ、自分の中で。こっちから考えたらこうだし、こっちから考えたらそうだし、こっちから考えたらそうだよねって言うような。それぞれの事情によってとか解釈によってとか見方によって変わっちゃうから、いろんな考え方が生まれるのはしょうがないし、自分がその立場だったらそうなっちゃうよねって思っちゃうんで。偏って決めつけられたいすることに対してすごい嫌な感じになっちゃうんですよ。

そういう風に暮らそうかっていうところから、必要になるものを考えていくのがいいのかなって言う気がしてますね。気持ち悪いなって思ったら、そうしないようにしたりとか。最近猟犬を買いたいなと思って。猟犬

はここじゃ飼えないから、犬飼うんだったら山で土地あるとこに、まあ半島でもいいんですけど、街中じゃないとこに引っ越そうかなと思って。

**谷津** 犬を飼うことを基準に住む場所を決めると。

**大島** 楽しいんですよ、やりたいことから暮らしを組み立てていくと。なんだかんだで僕、欲望はすごいある方だと思ってる。こういう暮らしをしながらも、お金は使うし、お金自体は悪くないだろうし、あると便利だからここまで続いているんだろうし。かといって使い方だったりお金の解釈みたいなものを間違えと変な方向にいつっちゃうだろうし。その中で自分がどう関わろうかっていうことも考えられるようになってきた気がするんですよ。具体的にどれくらい必要かとか。距離とか。つかつき合い方とか。そういうのを考えながら暮らしていきたいないう。そうするとそんなに間違わないのかなっていう気はしてますね。

**谷津** 震災があつて見えてきたものもあるは

ずなんだけど、余計間違っっていつているものもあるのかもしれない。石巻なんかはすごくそういうものが渦巻いてるところじゃないかと思うんですけど。

**大島** 気持ち悪さで溢れてますよね。歩くたびに気持ち悪いなというか、なんでこんななんだよと思いがらつていうのはすごくありますけどね。うーん。復興支援団体みたいな人たちがいっぱいいるじゃないですか。で、面白いことやったりとか自分たちが楽しいことやったりとかっていう人たちがいるんですけど、そうじゃないんじゃないかなっていう方向の人もけっこういるような気がします。それがなんと：特に東京系の人というか：わからんではないんだけど。人を助けるってめちゃくちゃ大変というか、すごいことですよ。それが大きいことになればなるほど、とてつもないことのようなことな気がするんですよ。

広告って、モノを買わせるってそれはそれですごく大変だとは思いますが、大きなパイは動くのかもしれないですけど、人生が変

わるようなものではないので。人の気持ちを前向きにしたりとか、人に元気になつてもらったりとか、人がどう生きようかって時に影響を受けるような体験でなかなか無いし、いろんなものの集合、町だったり、大きければ大きいほど、そんなに人の影響で人って動いてないっていう気がするんですよ。あんまり自分の力を過信しちゃダメだっていう。そういう言い方をすると批判的になっちゃうんですけど、人の可能性ものすごいものがあると思うんですけど、人のためとか、人にどうあつてもらいたいとかって、ちょっと奢りなんじゃないかなって思ってしまうところがあつて。

震災が起こった時はちょうど会社を辞めようとして有給休暇を消化してた頃で、そこで急にいろんな人たちが「こんな支援ができる」「俺はこれができる」って言い始めて。メディアが無かったら「今の大きい地震だったな」くらいになつてる話なのに、なんでこんな風になるんだろうって。だから1回自分の目で見て来ようっていうのが岩間さん

と一緒に来た理由なんですけど。最初に来たときに岩間さんが「この子たちのことをずっと見続けなきゃいけない」とか「支援し続けなきゃいけない」とかしきりに言ってるんですけど、どうしてそんなことが言えるんだろうって。口で言ったとして本当にそれが続いていくんだろうとか。震災のボランティアに限らず、勝手に続いていくものってあるわけじゃないですか。それってなんなのかなってというのが、夏前までの僕の素直な気持ちでしたね。「桃浦のために」とかって嘘というか…素直な気持ちとしては出ない状況でしたね。

**谷津** 夏前までということ、そのあとは？

**大島** タテオさんとの出会いが大きかったですよね。すごい誘ってくれて、いろいろ話を聞かせてもらったりとか、それは震災に限らず、浜の話だったり日常の話だったり。ただ単純に仲良くなったというか。あのおっちゃんにまた会いにいきたいという気持ちがある。自然に生まれたのが夏あたりというか。それがたまたま集会所作りと重なったという感

じがすごくありますね。

その人自身がどう暮らしたいの、どう生きたいのっていう、この特技をもっと磨きたいとか、そこが一番大事なんじゃないかなって言うのはすごい感じてますね。ものすごく人に支えられて生きてるわけじゃないですか。電気もそうだし水道も。自分で給料を得てとかかお金を得てそれで暮らしていたら自分の力で生きていけるのかといったら、それはとんでもない奢りで。なんて言うんでしょうね…それこそ「支援に行くつもりが自分が励まされてきました」みたいなものって割と素直な感情なんじゃないかなと思って。僕も人に会うとすごい元気もらうんですよ。ご飯を食べさせてもらうことも僕の命をつなぐことだし。そう思うと、素直に人の手伝いとかできるようになった気がするんですよ。こっちに限らず、実家に帰って、父親とかじいちゃん、川魚を小さい頃からずっと買っていて、ザリガニとかウナギとか。今も甥っ子がいて飼ってるんですけど。昔はじいちゃんが掃除



大島宅には自らが仕留めた鹿の肉が、熟成させるために下げられていた

してくれて、めんどくさくてやりたくなかったことを、今やっとできるようになったんですよ。そういうことが苦ではなくなっていくようになったのはすごいありがたいというか、奢りがちよつとなくなつたのかなというような気がして。人助けとか大きなことを言ってるだけでも独りよがりなことが多いんじゃないのかなって思っちゃうと、つい

批判的に見ちゃうというか。「お前自身がどれだけ支えられて生きてると思ってるんだよ」とみたいな。「だったら身の回りの手伝いとかやってた方がよっぽどいいんじゃないの」とか。「周りの人と仲良くしてるのが一番いいんじゃないの」とか。好きな人は好きって言ってる方でいい方向にいくんじゃないのかっていう気がするんですよ。みんな周りの人を大事にするとか「ありがとう」と言うというか。若い人間ができることなんてないことないぞっていうか。じいちゃんばあちゃんはずいっていう感想ですかね。

**谷津** それをここで学び続けている？

**大島** そうですね…教わってるって感じですね。浜の人に限らず、花火屋で去年ずっと77歳の人を師匠にして教わってたんですけど、その人だったりおばちゃん職人だったりとか、いろんな人が持つてるんじゃないかと思えますけどね。地域に限らず。

(2014年3月13日 石巻市 大島氏自宅)

前掲の大島公司へのインタビューからは、良くも悪くも活動の全体像が掴み取れないと思う。本稿を併せて読むことで、ユイノハマプロジェクトの活動が一体どのようなものであったのか、なんとなく理解していただけたらと考える。

リアス式海岸の谷間に位置する桃浦地区は住宅の90%以上が流出し、今は3世帯を残すのみである。護岸工事が施された浜では、水産業復興特区の適用を受けた「桃浦かき生産者合同会

社」が操業しているが（P 83※11参照）、震災前に存在した集落は実質、姿を消したに近い。どれだけの熱意や才能を持っていたとしても、このような経過をたどった地域に対し域外の人間ができることは、個人と人間としての関係を続けること以外には無いのかもしれない。ユイノハマプロジェクトは、そうした「被災」の現実を突きつけている事例だとも言える。

当時の現場を知らない人間からすれば

ばそれだけの話であるのだが、一方で、被災の跡が生々しい現地で、松浦校長（当時）が子どもたちと野菜を植えた場所に立てた「希望の畑」と手描きした看板や、離散した浜の人たちが集まった集会所の上様式は、確かに希望を感じさせた。岩間は盛んに「桃浦での経験から受け取ったもの」の口を口にしてはいたが、それが何かの形になって現れるのは、ずっと先のことなのかもしれない。



## 岩間 賢

Satoshi Iwama

美術家、愛知県立芸術大学講師

千葉県出身。全国の里山を巡りながら「創ること・生きること」の中にある感幸の意味を問い直す活動を展開。東京芸術大学博士過程修了後に文化庁新進芸術家在外研修員として中国にて創作研究を行う。近年では、大地の芸術祭や中国ビエンナーレ、中房総国際芸術祭など国内外で作品を発表。

**谷津** これまでの活動を振り返りつつ、現在のユイノハマプロジェクトの状況についておうかがいしたいんですが。

**岩間** 僕らを受け入れ一緒に活動をしていただいた茨浜小学校の先生は松浦校長先生と大森先生だったんですが、松浦先生が異動され、今年の4月で大森先生も海外に赴任されてしまい、学校も休校になったので、今はみんなで何か大きく動くようなことはしていません。2年目から高速道路が無料ではなくなつた（※17）のが大きくて、最初の頃の瓦礫撤去から一緒に動いてくれていた面々も、2年目からはそれぞれが行ける時に行こうという感じにいました。高速料金が無料だった時は車何台かで行って、ガソリン代と食費だけ割り勘にすればやりくりできたんですけど、やっぱり無料化が終わって金銭的な問題が起きてしまった。30代から40代のメンバーが大半なので、生活や仕事のことを考えると活動を継続していくことの難しさが少しずつ出てきて、自分の進むべき道を改めて考え、しっかりやっていくことが何よりも大切なことで

はないかという感じになっていきました。大島さんが石巻に拠点を移したので、桃浦の春大祭や花火大会の時に声をかけてもらい、これまでご縁がつながった人たちがそれぞれのペースで行ってくれたりはしていますが、夏以降はユイノハマプロジェクトとしての活動は行っていません。夏までは、必要最低限の活動費と1名分程度が動ける交通費の助成金をいただいていたので、この1年ほどはそれを活動費用に充てて、浜の子どもたちをフランスに行かせる事業をお手伝いしたりはしていました。組織としての活動はほとんどせず、個々のそれぞれのつながりで活動をしているという感じです。一緒に動いていた仲間と東京で会う機会がありますが、みんなどこかで桃浦のことが気にはなっています。今自分の目の前にあることを考える、ということはどうしても行き着いてしまいますね。

**谷津** 高速道路の料金が無料だったのは2011年度いっぱいでしたね。その間はけっこう頻繁に桃浦に通われていましたよね。  
**岩間** 僕の手は年間何万キロっていう勢いで

※17  
被災地支援・観光振興及び避難者支援として2011年6月より東北地方の高速道路に無料措置がとられたが、2012年3月31日に原発事故の避難者を除き終了した。

走らせていました。スケジュールが合わない人は後で合流するなど、それぞれ仕事がありながらもフレキシブルに動いていましたね。

**谷津** 初年度は瓦礫の撤去や沢の掃除、サマーキャンプ、冬にかかるくらしいの時期から集会所の建設をしましたよね。それが終わっただくらしいの時点で高速料金がかかるようになって。

**岩間** 2年目以降も活動のペースは落ちながらも定期的に続けてはいたんですが、2年目を終えた段階でストンと落ちましたね。桃浦が漁業特区になる(※18)とか学校を閉鎖するとか、僕らが関われない領域の話が大きくなってきたのもあって、こちらも下手に動けない雰囲気があったんですね。浜の中でも意見が分かれたりして、昨日決まったことが明日変わるような事も多くて。何かを創り出していこうというよりは、手伝えることがあればやるという風に変わってきた。一応団体にはしていましたけど、それぞれ思っていることは違ったし、そこに自分の故郷が存在しているわけでもないですし、そういうことが少

しずつ重なって足が遠のいていった感じですね。もともと桃浦に行くようになったのは僕の個人的な理由で、大森先生がうちの娘の恩師だった(※19)ので震災後に訪ねて、松浦校長先生とお会いし、大森先生とも一緒に話す中で、運動会を実施したいとか、瓦礫で埋もれてしまった沢をもう一度復活させたいということ伺い、ならばということ桃浦に行けそうな仲間を集めたのが始まりで、「これをやろう」という目的性は無く、「今できること」から始まった。ですから最初の緊急段階的な瓦礫撤去などの作業が終わって、行政などによる浜の整備が進んでいくと、そこから先の活動にシフトしていくような話がありながらも、どこか躊躇していました。責任を持ってそれをやるというところにはどうしても辿り着けなかった。集会所の建設も、浜の人たちから「集まって話せる場所が欲しい」というお話を聞いて、企業のご協力なども得られたので「じゃあ代わりに作ってみます」ということで始まって、そこから生み出すものについては考えていなかったです

※18  
P 83 ※11参照

※19  
P 79 ※2参照

ね。それは地域の人に委ねようと。子どもたちが被災で散り散りになっていたので、みんなが集まれる機会をつくりたいという先生方の想いを受けてサマーキャンプを開催したり、全てが、何か手伝えることがあったらするという感じで動いていました。写真を撮るのが上手な人は運動会を撮影したり、料理を仕事にしている人は美味しいものを作る、大工をやっている人が集会所建設で中心的に動くとか、みんなが自分にできることで手伝うという感じでした。

**谷津** 学校が無くなったり、自分たちには立ち入れない問題が多くなってきて、現実的に活動することがなくなっていくということだったと思うんですが、最初の段階では松浦校長先生なり大森先生とお話をして、新しくやろうと企画していたこともあったんですね。

**岩間** 桃浦の風土や環境を活かした自然学校のようなものがつくれないかという話は常々していました。松浦校長が本当に快く僕らを受け入れてくださって、先生の想いと、集

まってくれた仲間が日常的に考えていることが遠くなかったので、なにかできることがあるかもしれないと思っていった時期はありました。でも松浦先生が別の学校に行くことになり、学校行事なども閉校することを前提に行われるようになって、だんだん関与が難しくなりました。多少、建物の残し方や今後の使い方の提案はしましたが、踏み込んだ話にはなりませんでした。その頃に考えたり準備していたことの一部は、僕なりに再構成をして、市原の小学校の廃校で実現したり(※20)してはいるんですけど。

**谷津** 松浦校長先生が異動になったのはいつですか？

**岩間** 2012年度末です。大森先生も本来はその時点で海外赴任することが決定していたんですが、あと1年で休校になることが決定していたので、子どもたちを最後まで見送りたいということがあり赴任日を延長されたんです。松浦先生とは石巻に行く度にお会いして、最近の話とか、今の学校の子たちも桃浦に連れていきたいねとかお話しして、個人

※20  
2014年春、岩間は千葉県市原市月出地区の廃校を活用する「月出工舎」を開校した。



レベルでは取り組みをしましたが、学校単位では実現はできていませんね。

**谷津** 2年目は回数が減ってもそれなりに通われてはいて、子どもたちと遺跡を見に行ったりしていましたよね。

**岩間** はい、「しのくに」(※21)というユニットと一緒に歌を作ったりもしました。

**谷津** 3年目になると松浦先生が異動になって、ほとんど活動が無くなってしまったと。

**岩間** 松浦先生が異動された影響も大きかったし、宿泊用に使わせてもらっていた教員宿舎が取り壊されてしまったことも大きかったですね。水も電気もトイレも使えていたのですが、あそこがあったから活動できていたのが、更地になっちゃった。被災直後は体育館の一部を使わせてもらっていましたが、子どもたちの学校生活を守るために校庭に仮設住宅を建てないことが地区の総意として決まりましたので、子どもたちの授業再開に合わせ僕らは教員宿舎を使わせてもらうようになっていて。

仮設住宅の建設については「今思うと失敗

だったかもしれない」という声も聞きました。

桃浦は3世帯しか残っていなくて、校庭以外に仮設住宅を建てる場所も無かったので、住民の方はバラバラになってしまい、日常的に顔を合わせなくなったことで、それぞれの考えや想いがわからなくなっています。ましてや特区の話も出て、周りの浜から特区のことであると言われることもあったみたいですし。

隣りの浜は桃浦より小さいんですが、地区内に仮設住宅を建てたことで残るべき人が残ることができたということがあり、どうしても比較してしまうということもあったみたいです。

**谷津** 隣りの浜も同じような被災状況でありながら、ある決断でその後の方向性が明らかに変わってしまうということは、決断した段階ではわからなかったですよ。

**岩間** わからないですね。漁業特区になったのは結局桃浦だけなんですよね。あれだけ騒がれていながら、結局手を挙げるところがなかった。桃浦も最初、検討してもいいということでも手を挙げたらいいんですが、あれよあ

れよという間に話が進んでしまっただけ。

**谷津** ついていけない方もいた。

**岩間** 合同会社には参加せずにこれまで通りの形でやるという方もいましたし、まだこれからバリバリやっていくんだっていう方と、あと3年、5年で引退を考えている方とか、立場や環境によって選択は分かれましたね。今はみなさん、仕事は仕事としてやりますし、どんよりしているというわけではないんですけど。住む場所が変わっても春祭りには集まりますし、夏になれば、大島さんがつくる花火を見に家族連れで来る方もいますね。だんだん遠のいている気はしますね。家があつて住んでいけば、日中に都合がつかなくなつたとしても夕方に顔を出すことができますが、同じ石巻市内とはいえ、街中から30分くらいはかかるかなか駆けつけることもできなくなりました。お子さんが中学生くらいになると、どうしても学校行事や部活が優先になりますから、来たくても実際には来られないこともありますしね。

**谷津** 学校を閉鎖するというのは石巻市の決

定だったんですよ。

**岩間** 茨浜小学校は休校ということになって

いるので、住民が戻ってきた時に再開できる可能性は残しているんですが、長期間使用しないと復旧に費用がかさむことになりやすいですね。桃浦は高台移転の希望者がもともと20軒ほどいたんですが、調査するごとに減っています。そうすると、どんどん戻る理由が無くなってしまいますよね。造成は早かつたんですよ、岸壁工事とか、特区になると決まったら驚くようなスピードで進んで。海中の瓦礫を撤去する船が大挙してやってきて、昼夜間

わすれずに仕事をしましたので。でもやっぱり学校が存続できなかったのが、子育て世代の方は戻れなくなり、定住希望者もいましたが決断には踏み切れていないですね。第一号になればそれだけ背負うものや期待も大きくなるので、守るべきものが、自分の家族の単位からどんどん膨れるような感じがありますから、二の足を踏むというのはあると思います。

**谷津** 今は区長さんが桃浦の存続の意志を持って、そういう外部の方たちと接触を続け

※21  
P 81 ※ 8 参照

ていらっしやるんですか。

**岩間** そうですね。僕たちも、今でも桃浦に行く機会を持てるのは、区長さんがいらっしやるからです。

**谷津** ユイノハマプロジェクトを振り返ってみて、今、どう思われますか？

**岩間** ひとつも答えは出ていないです。最初、目的とか手法とか成果とか考えずにただひとつ、「会いに行く」ということから始まったので、会いに行く方がそこから消えてしまうのと、そこに向かう気持ちに僕自身の中で薄れたのはあります。思いや考えを持って、どうにか色々な方々に集まっていたらいたわけですが、その責任が取れたかという点、全く取れていないと思います。終わっているわけでもないし、ある意味始まったもいない。決着をつけていないともいえます。

**谷津** 初めは瓦礫を撤去したり、とにかく日常を取り戻すことから始めて、その頃は、その次を描けるんじゃないかと思われていたように思うんですが。

**岩間** 描くのはそこで暮らす方々というか、

いつでもいつばいいるわけで、誰とやるかを漠然とすることをやめました。「この小学校の子たちとやろう」というように考えるようになりました。なるべく単位を小さくしようと。

**谷津** 桃浦で一人一人と向き合った経験がそうさせているということですか？

**岩間** あそこではそれしかなかったというか、目の前のことと向き合うしかなかった。でもそれが今、もつと強く、何をしてもそうあるべきではないかと思っています。間口を広げるような動きは、今の自分の感覚には無いですね。

**谷津** 震災前は、漠然とした広い対象に向けてやっていた。

**岩間** あんまり考えていなかったです。美術館でワークショップをやったり、レクチャーなどをする際に「子ども」って書いておけばいいやとか、その程度でした。2002年に金沢市民芸術村で子どもたちと公園づくりをした時も、誰でも参加できるような状態で行っていましたが、そういうのはやめまし

みなさんの思いがあつてはじめて考えることができると思っています。自分がアーティストだから絵を描いてどうだということでは全くないと思っているし、アートプロジェクトだと思つてやっていたわけでもない。ユイノハマプロジェクトは、活動費の問題などもあつて、関わる方々がみんなシエアできる仕組みとして形式を整えたんですが、逆に僕が個人でやっていることにしておいた方が、みなさんも組織を考えずに、僕の手伝いだつたということを決着をつけられたかもしれない。明確な答えがあるわけではなく「かもしれない」ということしか言えないんですけど。昨今の地域アートプロジェクト的な価値基準で考えたら、何か大きな成果を出したわけではありませぬ。でも、数値化できないことを価値にすることを考えなくてはいけないというところが、3.11以降多分にあります。この数年の中で、「誰のためにやるのか」ということはすごく考えるようになりました。例えばワークショップをする時に「小学生対象」とかって設定しますよね。でも小学生と

たね。1000人呼んで50人が来るよりも、15人に声かけをして13人が集まることを大切にしたいと思うようになりました。

**谷津** 桃浦の体験を経てそうなったというのはどういうことなんでしょう？

**岩間** どうでしょうね。でも間違いなく、桃浦のお父さんやお母さんと飲んでいた時に聞いた話、学校から帰ってきたお子さんと一緒に遊んでいた時のこと、松浦校長先生や大森先生とのお話、あそこで見たり聞いたりした様々なことが自分の中に確かに存在しているんですよ。自分の生まれ育った風土や食べってきたもの、匂いなどが自分をつくっていると思うんですけど、その中に桃浦でのことが確実に強く存在していますね。それが常に全面に出ているわけではなく、ゆっくりとしみこんでいるような感じなんですけど。

**谷津** それだけ、ああいう状況下で小さなコミュニティの一人一人と向き合うことが濃厚な経験だったということなんでしょうか。

**岩間** そうだと思います。経験としてひとつにまとめることもできないんですが、あそこ

で起きていたことや考えていたことが、自分が今やっていることを考える時に現れては消えて、そしてまた次に進むような感じでした。ある時に見た絵がとても綺麗で、しばらく経ってから自分の中で浮かび上がったりのと同じようなことだと思うんですけど。

新潟の松之山坪野集落という10世帯ほどの小さな里山集落にこれ17年くらい前から通っているんですが、80歳を越えるようなお年寄りが多いんですけど朝から草むしりをしたり、冬は積雪が4mを超える年もある豪雪地帯なんですけど、みなさん自分の守るべき単位とすべきことをよくわかっています。その中で培われた生き方があって、できることとできないこともちゃんとわかっているらしい。自然と人間の境界のあり方が、桃浦にも坪野にもそれぞれあります。荻浜小のPTA会長の甲谷さんが「水が無ければ河童は生きられない」「漁師は海が無ければ考えることができなくなる」とおっしゃっていたんですけど、通うこととそこに居続けることは大きく違うと思われましたね。通ってで

きることなんてたかが知れています。大島さんが移住したのはご本人の想いですけど、僕らの中でも通い続けてやるには限界があるだろうということは感じていました。大島さんを何らかの形で支えるのが、唯一できることかなという感じでした。

**谷津** 大島さんは、まったく言っていないけど「自分は支援をしているつもりはない」と言われていて。他のみなさんはあの状況の中で、「何か自分にできることをしなくては」という気持ちがあったのではないかと思うんですが。

**岩間** あったと思いますよ。支援という言葉は僕ら誰も使ったことは無いんですけど。僕は元氣だし瓦礫撤去ができる、じゃあ道具を持って行こう、集会所の建設も設計や施工ができる仲間がいたのでできるよねということ、それぞれができることをやっていた。でも「居る」ということは誰もできなかった。

**谷津** 大島さんはそういう方だからこそ、ご本人の拠点を石巻に移すことができたし、他のみなさんも、大島さんがそこに居てくれる

ことよって桃浦とつながっていられたんでしようね。岩間さんご自身は、これからどうされていきたいですか？

**岩間** さっき言ったように、そこに10人いたらその10人と向き合うということをやりたいんですけどね。それで充分だと僕は思っていますが、なかなかそれを分かってもらえない

ことも多いですが、震災から2年3年と経って、話ができる環境が少しは増えたという気もしています。

**谷津** 岩間さんはいろいろなところに行かれていますけど、震災後の変化について、他にも感じる場所がありますか？

**岩間** 西日本は見事なくらい無いですよ。震災のことが全くといっていいほど話題に上がらない。当たり前なのかもしれないですけど。東京で暮らしていますが、放射能のことが話題になることもほとんどないです。この前、茨城で土が溜まっていた側溝の計測をしたら思っていたより高い数値が出て、まあ0.いくつくらいではあるんですけど、もっと低いかも思っています。でも行政はなんら対応をする気配は無いし、変わるというよりは変わらなかつたなど。震災後は少しずつですが、変えていこうという流れも起きていると感じています。

**谷津** さっきおっしゃった、以前よりは話が通りやすくなったというのはどうしてなんですか？



2011年5月、荻浜小学校の運動会にて。後列左が岩間、右隣りが大島

**岩間** 僕が、それまで自分が曖昧に考えていたことを、一軸線上に整えて話をしているからもしれません。あとはおそらく、とてつもない量の情報が個人で得られる時代になって、知識や映像が頭に入り込んでいますから、ひとまずは聞く姿勢があるんだと思います。誰もが「知らないけど知っているフリ」をするようになってますよね。アベノミクスのことをきちんとは知らないけど知っている気になっていたり、実際に作物を育てて生きてるわけじゃない人も里山の生活を知っている気になっていたり、自然エネルギーのことかも。知っているか知らないかは別として「知った風」になってしまったことで、ひとまず話を聞ける人たちが、聞くフリをする人が増えたんじゃないかと思います。

**谷津** それは震災後に大量に情報が流れたことによってそうなったと。  
**岩間** 震災前にすでにその予兆はあったと思います。今の社会価値への疑念が増えて、変わるべきだろうということで、変化の兆しが震災の前から起きていたと思います。いろいろ

ろな方が動き始めていたんですよ。新しい働き方や生き方を模索していた方、二拠点生活、里山で暮らす幸せを実現していた方。でも震災があったがゆえに、もう少し時間をかけてつくりなおそうとしていたことができなかったってしまった。むしろ、急激に変わらなくてはいけないという意識や情報が錯綜して、何もできなくなったようにも思います。僕が知っている方では青森で木を育て始めた方、新規就農をした方、東北地域での生産者としてスタートした方が、自立して軌道に乗ろうとしていたタイミングで震災が起こり、続けることができなくなってしまった。僕も小さいながらも棚田などをやっていましたが、続けることに躊躇したりしました。ブナ林の保全も少しずつやっていたんですけど、根本的にやり直すことにしました。来年から再開するんですけど。この1年半ほど、様々な土地に行っていることでいろいろやっているように思われていますが、実施しているものがあるのは二個くらいで、ほとんどは調査活動です。今はやれる場所、拠点をまず作らなくちゃ

いけないなと思って、どちらかというところを進めています。

**谷津** 震災前に進んでいたはずのものが、震災が起こったことによってより根本から作り直さないといけなくなりました。

**岩間** そうです。あと、自分の手でできる物事の数にも限りがあるので、展示会のようなものはいくらでもこなせるかもしれませんが、アートプロジェクトのようなものは、即断即決できなくなりました。今ってある意味アートプロジェクトだらけになってますけど、そこまで辿り着く前に向き合わなくちゃいけない問題があると思う。アートが手法になることを非常に憂えています。

**谷津** 各地でアートフェスが行われるようになって、成功イメージができてきているので、数字的な成果を期待されるということもあるでしょうね。

**岩間** アートは本来、観光のためのものではないと思います。手法になってはいけないと思っただけです。地域の方が主体になってやるべきであり、そこで生まれ育ってきた人に

よって受け継がれていくべきことが、外からきたアーティストがいつのまにかまさに「知った風」になり、海外から来た作家さんがインスピレーションで作品を並べて、賛否が派生しながらもアートプロジェクトが売れる時代になっています。僕の中では非常に違和感を感じています。ここ数年、自分の中の価値感や選択力というものというか、決める方というか、いろいろな方との出会いのなかで時に揺さぶられながら、すっとしみ込んでいくようなことが起きていますね。いつも考えていたものが、大地というか環境だけになくなったような。それは自分の生業でもある、表現する者としての創ることに影響しています。

(2014年11月18日 喜多方市内のカフェ)

# 5 CASE

## 井戸端会議 ～201X年の山元町

山元 — Yamamoto —

山元町は宮城県の沿岸部で最南端に位置する町である。  
東日本大震災による津波災害で総面積の37%が浸水し、  
メディアに名前が登場する機会は  
多くはなかったが被害は甚大であった。

2012年9月、Art Support Tohoku-Tokyoによる企画で、  
劇作家の岸井大輔がこの町を訪れる。

岸井は「演劇の創作方法による形式化」を目標に定め、  
まち歩きや商店街のパーティーそのものを  
作品として提示してきた人物である。

山元町で被災前から文化活動を行ってきた  
住民たちとの「井戸端会議」を通し、  
岸井はこの町の文化の根幹を成すものとして、  
1998年に作られた総合計画を発見する。

### ユイノハマプロジェクト | 活動の記録

2011年	3月	東日本大震災発生
	4月	岩間賢と大島会社が荻浜小学校の大森教諭を訪問
	5月～6月	荻浜小学校の運動会を手伝う。 小学校脇を流れる沢の瓦礫撤去などを手伝い始める。 この頃「ユイノハマプロジェクト」を立ち上げる
	8月	荻浜小の子どもたちと「サマーキャンプ」を実施
	10月	桃浦地区集会所の建設を開始
	12月	桃浦地区集会所「棟上げ式典」
2012年	2月～3月	荻浜小の子どもたちと「ウィンターキャンプ」を実施 桃浦地区集会所が完成
	4月	高速道路無料措置の対象が原発事故避難者のみになる 桃浦地区の春祭りを手伝う
	8月	水産業復興特区の認定を目指し 「桃浦かき生産者合同会社」が設立される 桃浦地区の夏祭りを手伝う
2013年	10月～12月	「しのくに」による桃浦をテーマとした楽曲が完成。 荻浜小児童やプロジェクト参加メンバーとレコーディング
	3月	活動を支持していた松浦校長が異動になる
	4月	宮城県の「水産業復興特区」を国が認定
2014年	6月	大島が石巻市に拠点を移す
	4月	荻浜小学校が休校となる

※他にも多数の活動を展開

阿部結悟は今回のインタビュイーの中で唯一、「支援を受けた側」である。各地で支援活動を行う主体をASTTが支援した他のケースと異なり、山元町への支援は「劇作家」岸井大輔を単独で直接、派遣する形で行われた。岸井は月1回のペースで山元町を訪れ、「井戸端会議の名目で人びとを集めて対話する一方、短い滞在期間を目一杯使って町を調査して回った。その全てが、彼が「作品」を構想する時

間であり、そうして出来上がったのが「201X年の山元町」である。岸井の手法は興味深くはあったが、私はスタッフとして同行しながら、被災地の住民にこれが果たしてどのようを受け取られているのか、一抹の不安を覚えていた。そんな私に「このプロジェクトに心から感謝している」と伝えてくれたのが阿部である。彼はインタビューの中で何度も、岸井が行ったことを「よくわからない」と言ったが、

同時に「あれがあったから今の山元町がある」とも語っている。ともかくにも、岸井は独特の手法で町(舞台)の歴史(背景とストーリー)と人(登場人物)の関係性を読み解き、仕掛けた「作品」で町の核心的な部分を掘り起こして見せた。山元町の文化を浴び、山元町を愛して育った青年が岸井の「作品」に強く影響を受けたことが、それを証明しているように思う。



## 阿部結悟

Yuigo Abe

一般社団法人ふらっとーほく代表理事

宮城県出身。故郷である山元町が東日本大震災による津波で甚大な被害を受けたのを機に大学を休学し、地元に戻り復興に携わる。現在は「一般社団法人ふらっとーほく」の代表理事として宮城県南部の地域づくりに関わる人材育成や中間支援に取り組んでいる。

**谷津** 震災が起きてから「井戸端会議」が始まるまで、結悟くんがどういう風に過ごしていたか教えてください。

**阿部** 僕は高校まで山元で育って、大学は外に出ていました。震災があつて、地元がこういう状況になったので、何かできることがあればということ、学校を休んで山元に帰ってきたのが2011年の8月くらいですかね。それまでもちよくちよくボランティアで帰ってきたりはしていたんですけど、何かそれだけではない関わり方で地元貢献できるんじゃないかと思って帰ってきました。2011年の8月くらいから個人のボランティアとして、うちの家は沿岸部じゃなかったんですけど崩れたりしてたんで、その修繕とか友達の家を直しに行ったりとかといえ、短期のボランティアだけで本当にこの町大丈夫なのか?とやりながら思っていたんです。どんどん人も減っていくし、この町はJ.Rが流されたのもあって、若い人たちとか子育て世代の人が減っていった中で、

目の前のことに取り組んでいるだけで本当にいいのかなというのはずっと思っていた。もうちよつと長期のプロジェクトでまちをつくるのか、そういう関わりがしたかった。それで2011年の年末くらいですかね、今の職場の「ふらっとーほく」(※1)が巨理と山元でプロジェクトをやっていたんですけど、そこへ参加するようになりました。まちづくりの一端を担うような役割をしていきたかったというのもあったので、当時3人メンバーがいたんですけど、法人化して、仕事として関わるようになった。大学を休学していたんですが、仕事始めちゃったら大学帰れなくなっちゃって、そのままやってたのが2012年度ですね。

**谷津** 合計で1年半休学した?

**阿部** そうですね。「井戸端会議」は2012年の…

**谷津** 秋から。第1回目が9月13日でした。

**阿部** そうですよ。当時、「ふらっとーほく」のプロジェクトで「まちフェス」(※2)と言って、地域資源を発掘して担い手を育成

※1 東日本大震災後、山元町と隣りの巨理町で活動していた阿部を含む若者3名で設立した復興支援団体。防潮林再生を柱にした復興計画を作る住民ワークショップのコーディネートなど、住民が主体的に地域づくりを行うための支援に取り組む。2012年1月に一般社団法人となった。

※2

地域の人びとから「達人」を発見し、それぞれの特技を用いたプログラムを一定期間中に提供するこゝとで博覧会化するイベント。山元町、巨理町、福島県新地町を舞台とし、「まちフェス」伊達ルネッサンス」プロジェクトとして展開した。

してコンテンツにして、自分たちも含めて楽しませようという企画をちよっど立ち上げたところだったのかな。

**谷津** 第1回の「まちフェス」が：

**阿部** 2013年の2月～3月ですね。

**谷津** 時期的には「井戸端会議」とかぶってたんだね。

**阿部** 「まちフェス」の準備をしながら地域の歴史とか人を掘り下げる作業をしたんですね。ちよっどその拠点になっていたのが坂元公民館(※3)だったんです。坂元公民館に毎晩集まって「ああでもないこうでもない」とやってた時期でした。

**谷津** 「井戸端会議」が始まった頃の印象はどうでした？

**阿部** 声をかけてもらって、ただ参加するだけのつもりで行ったら、地域のおじいちゃん自分のやりたいことを語ってたりとか：よくわからなかったんですけど。なんだろう？って(笑)。そこにいたのは普段も顔を合わせているメンバーなんですけど、やりたいうことってあらためて聞いてなかったんです

よね。だから新鮮で。地域の先輩で文句も言えないような人たちがやりたいことをみんなにしゃべってるのも新鮮だったし。僕らの世代の人間がその人たちの目の前でやりたいことをしゃべってるっていうのも割と抵抗があったから：そういう場はそれまではなかったですよね。とはいえ、平等に順番が回ってくるので、ああでもないこうでもないとかって言って、若い人は若い人でしゃべることを考えて形にしていたという風に記憶しています。

**谷津** 毎回2人か3人ずつ、これからどういう山元にしたいかということプレゼンしてもらって、その後岸井さん(※4)が他の町の取り組み事例をしゃべるっていうのを毎回やってたんですね。以前からあそこに集まったメンバーのお手伝いをしていたんですか？

**阿部** そうですね。彼らが地域で活動する時に声がかかって、若い僕らが実動部隊みたいな感じでした。年上の彼女らの層が厚かったのもあって、尊敬もしている分、自分たちがやりたいこともあるんだけどなかなか

か？自分でも周りの反応でもいいですけど。  
**阿部** どうですかね？人当たりのいい方なので、みんな受け入れてたんじゃないのかな。  
**谷津** 私も地域アートプロジェクトのスタッフをやるのは初めてだったので、正直、岸井さんが「劇作家」と名乗っているのはどう思われるだろう？っていうのはあったんですけど(笑)

**阿部** ありましたよね(笑)これから僕らは役者として地域の劇団になるのかな？とか。みんなやりたいこと言ってるわけだからこれを何か彼がすごいパワーで、もしくはもっと外からすごい人を連れてきて形にしていくな、何が起るんだ？っていうところはありました。

**谷津** 「井戸端会議」ではとりあえず、みんなで順番に山元をどうしていきたいかっていう意見を出して。ほかの人のプレゼンを聞いて、どういうことを感じました？

**阿部** みんなそれぞれにやりたいことがあったんですけど、似通ってたっていうのはありました。年齢も性別も違うのにわりとみんな



坂元公民館で開かれた「井戸端会議」。毎回10人前後の町民が集まった

その場では言えなかった。「まちフェス」のことも言っていなかった。そういう中であいう機会をもらって。で、割といろんな事例を岸井さんがあの場で紹介してくれて、「そういうのもあるんだ」と。「見てみたいね」と言ったりはしてましたね。

**谷津** 岸井さんほどのように映ってました

※3 山元町で地域活動を行う人びとの拠点となっており、「井戸端会議」も坂元公民館を会場にして開催された。

※4 劇作家の岸井大輔。「演劇の創作方法による形式化」を目標に定め、さまざまな町を舞台にまち歩きや商店街のパーティーそのものを作品として提示している。

似てるし、最後に目指すべき地域像みたいなものがしっくりくる絵だった。それにすくびっくりして。その後に岸井さんにも指摘されたんですけど。それに気付いたっていうのはやっぱり大きかったと思いますよね。

**谷津** 「井戸端会議」が最初始まった時、「震災の影響で活動ができなくなってしまった」という問題意識があったんですよ。被災の程度だったり地区だったりといった要素で断絶されてしまって、それまでそれぞれに活動していた人たちが動けなくなってしまっている状況があつて、どうしたらいいだろうと。そういう話から始まって。

**阿部** 震災前から地域の活動をしていた人たちにはみんなそう感じていたと思うんですよ。震災後から関わり始めた僕ら若い世代は、その問題認識は多分無かった。最初から無い前提で始まっていた。だからこそ、自分たちが集まれる空間：本当はあの頃を思い出せばあったんですけどね、坂元の支所(※5)とか、あの場所がそういう場所だったんだけど、当時はみんな「無い」って言いたかった

山元町」はどんな風を受け止めてましたか？

**阿部** 撮影会よりも前に、地域の人のところに行かせてもらったりとかビデオと一緒に撮ったりとか、中学校に歩いていくとか、そういうのを数多くやったなと。

**谷津** 岸井さんは井戸端会議の前で滞在するスタイルで、来る度に町の中に出かけたり人に会いに行ったりしていた。津波で被災した中浜小学校の以前の映像を見る会をやったり、山下中学校に行ったり、中浜小の中の映像を撮ったり、特徴あるお店を案内してもらったり。秀吉ゆかりだと言われる茶室も見に行きましたね。

**阿部** 全部一緒に行つたわけじゃないんですけど、インタビューみたいなのも一緒に行かせてもらった気がします。「201X年の山元町」のテキストは、「井戸端会議」の時に岸井さんが印刷してもらってきて。

**阿部** あれが僕としてはすごくハツとした瞬間で。10数年前の、埃をかぶっていた町の総



岸井大輔(右)は知り合った町民を誘い、繰り返しフィールドワークに出かけた

というのもあつたかもしれない。

**谷津** まあ、坂元支所しかなかったと言えばそうですよ。10月から毎月1回、「井戸端会議」で計4回プレゼンのようなことをして、2月に「201X年の山元町」(※6)の撮影会をして、その後3月に「さいこうキャンプ」(後述)があつたんですけど。「201X年の

合計画。普通、町の人は見ないし、震災があつたから余計に見なくなっていたものを持って来てもらつて。表紙に子ども頃の僕が写つた(※7)のが一番びっくりだったんですけど、読んでみると、みんながプレゼンで言つてたことのエッセンスが全部入っていた(※8)。戻ってきてボランティアをして、地域の資源を使うような仕事を始めたきっかけがなんだったのか自分でもずっと分かっていなかったけど、あれを見た瞬間に「ああこれだったんじゃないかな」と思えたのはすごくハッキリ覚えてます。その後、総合計画を読み返すようになって、当時どういう状況があつたのか、震災の10年前くらいに町を作ってきたプロジェクトがどうだったのかすごく興味湧くようになりました。みんな同じようなことを言うとか、活動的な人が集まる場が他の地域と比べて山元には多いなというのは以前から思つてはいたんですけど、その理由の一つをあのタイミングで岸井さんが掘り出して提示してきたっていうのはすごく驚きました。…あの企画が最終形になった経緯は

※5  
坂元公民館は坂元地区の支所を併設している。

※6  
山元町での企画の最後に岸井大輔が制作した作品。1998年に発行された山元町の総合計画(地方自治体が策定する行政の基本計画)に収録された同名のテキストを題材にし、その朗読がラジオから流れる時刻に住民に山元町を自由に撮影してもらった。P128～129に写真と説明有。

※7  
1998年の総合計画の表紙には、幼少期の阿部とその母と、母に背負われた弟の写真が使われていた。

※8  
1998年の総合計画の巻末に収録されている「201X年の山元町のイメージ」というテキストには、総合計画の策定時に住民が思い描いた十数年後の町の姿が叙情的な文章で綴られている。2012年に行われた「井戸端会議」で住民たちが語った「実現したい」山元町は、このテキストが示すイメージとよく似ていた。



山元町が1998年に発表した総合計画。当時目指した町の姿が叙情的に綴られていた

を知っていて見ると、なんとなく胸に迫るものがあるよな、と思っただけです。それを言葉で説明されても多分あんまりよくわからないんじゃないかと思うんだけど(笑) さっき言ってくれた、「あのテキストが自分たちのベースにあったんだ」という気づきをもとに見ると、一人一人の町への思いみたい

なものがいっぱいに伝わってくる感じがするなあと思っただけ。

**阿部** 岸井さんも言っていたけれど、山元の人にはよく「山元らしさ」という言葉を口にして、それがすごく似通ったものだということがある。実はその「らしさ」はプロセスにあるんじゃないかと思っただけ。

**谷津** プロセス？

**阿部** 1998年の総合計画も、あれを作ったプロセスですごく多くのワークショップをやって、行政の人が住民の声をすごく聞いて、一人一人の意見をかなりブレイクダウンしてものにしていったというプロセスの方に「らしさ」があるんじゃないかと、最近思うようになって。90年代の先進的なまちづくりの手法だったと思うんですよ、あの手法って。時間もあつたしお金もあつたからできたっていうのもあるんですけど。2000年代前半のまちづくり雑誌で、大分の湯布院とか、今でもいい事例と言われるようなものの中に山元町のあの総合計画の話が入っているんですけど、計画自体は途切れちゃったし、いろんな理由

よくわからないんですけど。

**谷津** 外に見えるものとしては、2月に2回、説明会をやったんですね。最初に岸井さんがりんごラジオ(※9)に出て、企画についてパーソナリティの高橋真理子さんにインタビューしてもらって、1回「201X年の山元町」の朗読を生で真理子さんにしてもらって、これを流しながら撮影会をやるので参加してください、と。坂元公民館で説明会をやりますっていう告知をした。で、説明会を2回やって、撮影会当日、という流れでした。

**阿部** その前に1回か2回、岸井さんと僕らでアイデア出しをしたんです。岸井さんが「201X年」のテキストを持ってきて、昔の山元町はどうだった？みたいな。若いメンバーだけで。これ見てどう思う？みたいな感じだったんですけど。若い人たちはみんな「こういうものがあつたんだ」みたいな感じでしたけど。それで、ラジオで朗読してもらって、ビデオを撮る時：あれ自体はどうだったのかな？よくわかってなかったんですみんな。でもなんか面白そうだからって

いうので参加してもらって。ちょうどうちの家族があつた時みんな山元にいたので声をかけて、あの総合計画の表紙の写真を再現してみようということ、一緒に撮った。うちの家族でもたまにあれを見返して、「こういうのあつたよね」って言ったりしてます。町歩きしながら、震災で崩れていくような、もう取り壊されるようなところを重点的に撮った人もいれば、今の姿を撮った人もいれば。僕自身は自分が昔歩いてたところだったりとか好きだったところを撮っていっただけだったんですけど。不思議な感覚でした。いまだにうまく言えないんですけど、今でもみんなでたまに見るんですよ、あの映像を(※10)。なんだろかな：あれが何だったのかっていうのはわからないんですけど(笑) なんなんでしょう、あれは(笑)

**谷津** 確かに不思議な作品だね。私も今日ここに来る前に久しぶりに見たんだけど。初めて見た人にはあれが何なのかというのわからないと思うんですけど、でもやっぱり、これはどういう風に作られたのかという経緯

※9  
山元町の臨時災害FM。

※10  
住民たちと岸井が同日同時に撮影した合計12本の山元町の映像は、最終的に12本を同時に再生する映像作品にまとめられ、岸井のWEBサイトで公開されている(P128参照)。

があつて止まっちゃったんですけど、あの頃進んでいたまちづくりの手法みたいなものは残っていた。人を育てる事業だからそんなにすぐ成果が出なかったし、震災でハードが全部やられちゃったから見た目には残ってないんだけど、人の心の中には残ってたっていうのを「201X年の山元町」が示していたというか、90年代の手法をそのまま作品にしたかのような印象を、今になってみると受けますね。一人一人が自分の思ったところを撮るといものも、それ自体を題材にしたのかと思ったりもします。まあ、よくわからないんですけど(笑)

**谷津** そういうことだよ。津波で総合計画の目に見える部分は流されたけど、人の気持ち自体は流されていないよ、ということも言いたかったんだと思うんですけど、それは参加してもらった人に伝わってたんでしょうか。

**阿部** 僕はすごく感謝もしてるし、あれが無かったら今はないんじゃないかと思ってます。ほかの人はどうかかわらないですけど、



山元町立中浜小学校前に積み重ねられていた、被災した自動車(2012年10月)

一つには、ちゃんと、自分が町に戻って来たきっかけを語れるようになりました。あの作品のアウトプットもいいんですけど、作るまで岸井さんたちと一緒にいさせてもらった時間を通して明確に変わりました。

**谷津** 戻って来た理由が言葉にできるようになった。

**阿部** 忘れてたんですね。みんな忘れてたんだと思うんです。忘れざるを得なかったのかもしれないなと思っていて。震災はその前の記憶をかき消すくらいショックなものだったし、その後、新しい町のビジョンとか計画ができて、それ自体の是非もあるけれども、みんなやっぱり、「震災前に戻れない」ということがある。情情的にというのものもあるし、記憶をうまく繋げられないっていうものもあるし、それを無理くり開いて戻してもらってたんだなあという風には思います。

**谷津** あれが無かったら今はないっていうところをもうちょっと詳しく教えてもらえますか？

**阿部** 今、「種まき会議」(※11)っていう会議を定期的にしてるんですけど、最初に「井戸端会議」の声をかけをしたもと中学校の校長先生が主催で、「さいこうキャンプ」が終わった3ヶ月後くらいに、そんなに活動してる人がいっぱいいるんだったら、定期的につながつて情報交換をする場を作りましょうっていうことで、月1でやり始めたんですけど、

地域内外で震災関係無しに活動している団体が50〜60団体くらい集まるような会です。このくらいの規模の町にしてみたら多いと思うんですけど、そういう場を1年やり続け、組織化するかどうかはわからないけれど、中間支援的な、地域の情報とか活動のハブになるようなものが一つ生まれている。外の人を巻き込んで企画やつたりとか、空き屋を一つ借りまして、小さな拠点づくりの事業が始まったりと。その辺は、「井戸端会議」があつて、今があると言える。「井戸端会議」でやりた

いことをみんなが言えたことで今、形になっているものがすごくたくさんあるんです。「種まき会議」も、「さいこうキャンプ」もそうだし、あそこのメンバーが主体になって一つの流れを作っている。だから、わりとみんな言ったことが形になっているというか、あそこで言ったことをしている。そのきっかけになったというのはすごくありますよね。あそこで発散していなかったら、ああいう場がなかったら、今の流れにはなつてなかったんじゃないかと思います。

※11  
正確には「山元の未来への種まき会議」。



「201X年の山元町」は最終的に映像作品となった。1998年の山元町総合計画に収録されていたテキストを災害FMりんごラジオの生放送で朗読してもらい、岸井大輔が企画趣旨を説明する。3日後にこれを再放送し、テキストの朗読が流れる時刻に住民8名が町内を自由に撮影。1998年にイメージされた「201X年」

の姿と、実際に訪れた2013年の姿が重なった。映像は岸井らが撮影したものも含め12本を同時再生するように構成され、阿部結悟らが企画した「さいごうキャンプ」の1日目に上映された(左写真)。この映像は、現在も岸井のWEBサイトで公開されている(下記URL)。

<http://www.kishiidaisuke.com/#!201x/c1w9h>

あと、自分の今を作っているという意味では、あの総合計画が震災後の活動の起点だったというのが分かったことが、その後、この町に対する関わり方を変えた。自分が育った頃の計画ってどんなだったのかっていうのを調べるようになったし人に聞くようになったし。今では町の評価では「失敗した」って言われているプロジェクトを掘り起こすってしがらみがあって難しいんだけど、その突破口を開いてもらった感覚はすごくあるし、今でも調べ続けている感じです。

あの総合計画を作った時の手法は、今もよくやっている、ワークショップでまちづくりをするようなものの走りみたいな感じだったんですよ。内容は多分そんなに変わらないんです、当時の総合計画というもの；地球に優しくとか地域資源を活かしてみたいな。でも手法が特徴的で、3年間かけて400回くらいワークショップして作るということをやったというプロセスと、その過程で仲間を作ったこと、その蓄積に一番価値があったんだらうなど。震災後の集団移転にしても、手

法が大事なんですよ。集約の是非もあるんですけど、それをトップダウン的にやってきてしまったことにすごく反発が出ている。やり方自体が対立している部分がある。谷津 内容の前に住民の意見を聞いてないじゃないかと。

阿部 被災地どこでもそういう課題にはなってるんだけど、この町は町対住民、自治体対住民という形がわりと顕著に出てて。そこに風穴なのか嵐なのかわからないけど一波乱起こしちゃった。しかも若い人たちが。

谷津 「さいこうキャンプ」の影響が大きかったんでしょか。

阿部 あれは大きかったってみんな言ってますね。「さいこうキャンプ」は、「3日間とにかくずっと場を開いているから誰でも来ていいよ、語り合おうぜ」みたいなイベントで。初日に前の町長を呼んで、最後の日に今の町長を呼んで。そういうのをやりましたよね。

谷津 岸井さんが1人ずつ話を聞いたんですか？

阿部 1日目に、僕と若いやつら何人かと岸

井さんと、前の町長と、総合計画を作った大学の先生に当時のことを聴くというのをやって。で、最後の日にコタツを囲んで今の町長と若い人たちが話すという場を作ったんですね。そこに岸井さんが入ってくれて捌いてくれて。そういうことをしたのが原因かはっきりとはわからないですけど、その後、前町長が町長選に立候補して、現町長と町を二分する闘いをしたんです。人口は今1万3千人くらいなので、有効投票数八千人くらいかな。で、結果ですね、140票差くらいで前町長が負けたんですよ(※12)。

谷津 すごい僅差ですよ。

阿部 震災後、今の町長が作った復興計画が、町を二分してしまっていたんです。財政も厳しいので、都市機能を集約させてコンパクトにして行政の負担を減らしながら町を作っていく計画を作っている。前の総合計画は逆で、町全体が博物館のようであって、そこにあるでっかい木も、人も、風習も含めて全部コンテンツで、それでいてこの町だということをコンセプトで言ってるんですよ。15年前の

総合計画は、ほとんど無くなったようなものだったんです。人の記憶からも、もちろん実際の町のハード面からも。それを「201X年の山元町」でもう一度脚光を浴びさせた。

実は今年度から、前の総合計画を作った人がまた山元に関わってプロジェクトをやっているんです。地域資源の洗い出しをやっているんですけど。なんかまた揺り戻しが来ているような。

谷津 選挙結果が影響しているんでしょうか？

阿部 難しいですけど(笑)そういう意味ではすごいなあと思ってるのは；未だに岸井さんがやったことのどこからどこまでがアートプロジェクトだったのかも全く分からないけど、地域の中の泥臭い町内政治みたいなものとあいうアートの的なものって、こんなにもつながるんだって思ったところもあって。

谷津 人びとの意識の中に、文化的な土壌が実はすごく深く浸透しているという。

阿部 民間レベル、住民レベルでは、前の総合計画を作った時の精神は途絶えていない

※12 任期満了に伴い、2014年4月20日に選挙が行われた。復興政策の進め方をめぐって現職と元職の一騎打ちとなり、実際には194票差で現職が上回り、当選した(有効投票数は7772票)。

です。自分たちで必要なことはやるし、地域に根ざしたものをやっていくっていう魂は活動レベルでは消えてはいない。今後どうやっていくのかは全くわからないですけど。

**谷津** 「さいこうキャンプ」は若者だけで企画の立ち上がりから運営までやって、若者たちとしてはどうだったんだろう。

**阿部** 若者的には楽しかったですけどね。あれは「居場所がない、拠点が無い」という悩みに対しての、拠点作りの実験というか練習？自分たちが、たとえば将来町の拠点ができて委託の管理を受ける時に今のままじゃダメだよねと。居場所作りの運営のチャレンジをしてみようというのが一つのコンセプトだった。公園と隣りのお寺を貸し切って3日3晩寝ずに、つて、まあ寝たんですけど(笑)とにかくずっと話し合っている。

**谷津** 運営は完全に地元の若者だけでやった？

**阿部** 企画したのは「井戸端会議」の若い参加者ですよ。3〜4人がメインになって企画をしました。で、岸井さんとちあきさ



「さいこうキャンプ」のチラシ。  
「井戸端会議」の20代〜30代の参加者が企画した。

んと伝わってた人たちはサポートしてくれました。いろんな声がけをしてもらったりとか、当日場所を貸してくれたりとか。1日目は「昔の話を聴く」(再考)という事で語り部のおばあちゃんたちを呼んだり、昔の総合計画の話をして、で2日目は「現在」(最高)という事でバンドとかを呼んだんです。最後の日は「未来」(再興)の話をしてワークショップ的にやっていくっていう構成だったんですけど。それぞれの企画で関わる層も違いましたし、来てくれる人も違いましたけど。

ん(※13)にアドバイスしてもらっていた。

この間ふと思ったのが、あそこで岸井さんとかアーティスト側で何かやっちゃうっていう選択肢もあったんですけど。でもそうはしなかった。僕らが主体的に企画しようとなつた時点でサポートに回るとい判断をされたのであいう形になったんだらうとは思っています。普通、地元の若者たちだけではあいう、その後問題も勃発し、かつ波乱も起きるような場を運営するのはなかなか難しかったかなと思うんですよ。前の町長と今の町長に声をかけてとか、できないので。しがらみもあるし。そのリミッターを解除してくれてたんだらうなと思うんです。一歩引いていうか、ちゃんと後ろを固めてくれてたっていうのはすごくありがたかったです。

**谷津** 周りの大人たちの関わり方はどんな感じだったんですか？

**阿部** 町の大人たちは難しかったですよ。わけわかんないって言って何にも関わってくれなかったり文句言う人はいましたね。でも「井戸端会議」に来てくれてて思いがちゃ

イベントという意味では段取りもひどかったし、片付けを次の日にしなくて怒られたり、会計報告どうしたとかでfacebookグループが炎上して大変だったんですけど(笑)

**谷津** 何人くらい来たんですか？

**阿部** 50人くらいいた時もあるから：全体で400〜500くらいは来てたかな？ごちゃごちゃでしたけど。勝手にフリーマーケット始めるおばあちゃんたちがいたり、オーダブル出てきたり。ちあきさんが寺で踊りだしたりとか。それを、ちょうど当日、被災地を見るボランティアアツアで仙台から来ていた学生が突然見せられたり。きよんととしてましたけど(笑)地元の人たちもバンドやったり、本堂の中でもガンガンお酒飲んだりとかして。「さいこうキャンプ」はそういう一波乱二波乱起きるような種になった。岸井さんがよく言っていたのは、自分は数ヶ月しかここにいないくて、地域から出ていった時にすごくもめるというか10年くらいは「もう来るな」という感じになると。「さいこうキヤ

※13  
現代舞踊家のちあきさん。岸井大輔の誘いを受けて山元町に同行し、舞踏作品を作った。

ンブ」って、岸井さんが主導でやっててもめたと思うし、あの時は地元の人間でやってただけけど彼が裏に入ったことでめたというか炎上してたから、そこはちゃんと成功してたんだなって(笑)

**谷津** 一時期しかない人間だからやれるじり方なんだよね。ずっといる人だったら絶対できない。でもそれだけたくさんの方が3日間に来たっていうのはなんなんだろうね？みんなそういう場に飢えてたのかな？

**阿部** 本当にいろんな人が来ましたね。今は町が二分されてますけど、そのどっちの側の人もいたんですよ。それくらいいろんな人が混じってた。山元町の人だけじゃなくて他所の人も来ていたし。ちっちゃい子からおじいちゃんも来てたし。そういう引力みたいなものはありましたよね。

**谷津** 何がそうさせたんだろうね？若者が地元のために場を作りたいとイベントをやっても普通そういうことにはならないよね。

**阿部** いつもお祭りをしてるところでもあるんで、普通のお祭りと間違っって入って来たの

かもしれないですけど。

**谷津** フリマとか、バンドもやってたしね。

**阿部** 取材も来たし。

**谷津** よく考えたらかかなり他には無いイベントだったよね。

**阿部** 雑なイベントでしたけどね。

**谷津** それだけ雑なのに、どうしてそんなに多くの人が関わってくれたのか不思議だよな。

**阿部** 今だったらもう同じ形ではできないですよ。どっちかの側に偏ってしまうだろうし。あえて偏らないようにするとしたらすごい労力がかかる。強力にいじれる人がいてくれないと。多分僕らはできないですね。

**谷津** 岸井さんがいい意味で「荒らして」いった後、一年半経って、今はどういう状況ですか？

**阿部** 今：僕はけっこうしんどくなってあんまり地元にはいないんですけど(笑)、タイムングもあるんだろうと思うんですけどね。個人的にはあれがきっかけで、流浪の芸人というか、全国を流れてくる流浪の商人みたいな人と一緒にプロジェクトをやるのが楽しく

なってる。だから、そういう人たちが来る場になって。僕自身も行ってたのかもしれないなって。

**谷津** 「伊達ルネッサンス塾」(※14)も、やってることは一緒と言えば一緒だもんね。

**阿部** 流浪の商人か芸人かだけの違いだけなんです。

**谷津** プレゼンするのも一緒だし、プレゼンした人がそれをやりたくなくなっちゃうのも一緒。

**阿部** やんなくてもいいし。

**谷津** これだ！って感じはあったわけだ。意味ではちょっと閉じてるかな、そういうものに対して。昔はもっと、他者、異質なものを

持って来てくれる人に開けていたと思うんですけど、それができなくなっている気がしますけど、またもう少し経ったらできるようになるのかな。それは岸井さんが言ってた10年なのかもしれないし、もっと早いかもしれないし。その時にまた一緒にできたらいいなあと僕個人は思いますけど。被災地支援事業としてはちょっとよくわからないけど、それでも、あの場でものを言っって形にしよう

した人たちが着実に形にしてるし活動してるし。

**谷津** なんとなく町の中にやりづらい状況がある中でも続いていると。

**阿部** 今の状況をちゃんとバネにして、逆に外の人を巻き込みながらやってる感じはあります。なんかね、岸井さんが、この町の一つの根っこみたいなどころをすごくタイムिंग良く、かつ短時間で掘っていったっていうのが、住民としてもだし、まちづくりに関わる人間の端くれとしても、すごいなあと思います。でもまあ、あれがなんだったのかはまだまだよくわかんないですけどね(笑)

(2014年10月21日 山元町中央公民館)

※14 島根県で古書店を営みながら全国で地域プロデューサー育成に取り組む尾野寛明氏を塾長に迎え、ふらっと1はくが2014年に開催した地域づくり塾。公募により選ばれた近隣地域の塾生が、ゲスト講師によるセミナーやグループワークを経て、実施したいプランを練り上げ発表した。

# 6 CASE

## ARC>T/ARCT

仙台 - Sendai -

「ARC>T（正式名称：Art Revival Connection TOHOKU 読み：アルクト）は、2011年4月から2年間活動した、主に演劇やダンスのパフォーマーで構成された団体である。仙台市を中心に保育園や幼稚園、学校、福祉施設へ体験プログラムを提供するほか、所属するメンバー向けに東京から外部講師を招いたワークショップを行うなど、アーティストが被災した地元のニーズに応えるためのプラットフォームになるとともに、東北に関心を寄せる演劇人たちの支援や交流の受け皿となった。事務局長として100人以上の登録メンバーを抱える「ARC>T」を切り盛りした鈴木拓と、「ARC>T」の活動を整理して引き継ぐ形で2013年に発足した「ARCT」の代表・澤野正樹に話を聞いた。

### 井戸端会議～201X年の山元町 | 活動の記録

2011年	3月	東日本大震災発生
	8月	阿部結悟が大学を休学して山元町で活動を始める
2012年	9月～12月	『井戸端会議』を月1回開催。前後の滞在期間中に岸井大輔が山元町をフィールドワークおよびヒアリングをして回る
2013年	2月	「201Xの山元町」の朗読をりんごラジオで放送。再放送日の同時刻に住民らによる町の風景の撮影会を実施
	3月	「山元町さいこうキャンプ」を地元の若者らで開催。「201X年の山元町」で撮影された12本の映像を同時上映し、森久一前町長と岸井大輔がトーク
	4月	『井戸端会議』参加者を中心に「山元の未来への種まき会議」が発足
2014年	5月	森久一前町長が山元町長選挙に立候補し、斎藤俊夫現町長に194票差で敗北
	5月～11月	阿部結悟が中心になり、一般社団法人ふらっとーほくによる「伊達ルネッサンス塾」を開催

有史以来の威力で日本を襲った震災は東北沿岸の街を徹底的に破壊したが、内陸部はライフラインの麻痺など大きな混乱を来したものの、壊滅的な破壊は免れた。被災3県で最大の都市である仙台は、ほどなく被災地のキーステーションとしての役割を求められる。その頃の仙台には沿岸部からの「支援を求める」声以上に、被災地外からの「支援したい」声が増える量で寄せられていた。それらを交通整理し、

届けたい人から届けてほしい人へ適切な「支援」が流れる川を作る役割は、どの地域、どの分野でも強く必要とされながら決定的に不足していた。仙台のアーチ界隈でその役割を担ったのが鈴木拓だった。

鈴木はそれまでに築き上げた人的ネットワークや知識、経験を総動員し、あらん限りの力で各所からの要請に応えた。今振り返ると、その結果、彼の元に「支援したい」人びとの思いが集中

したのがARC>Tだったように思う。鈴木はその状況を「楽しんでいた」と表現したが、並大抵の胆力ではこなせないポジションである。彼のような人材は芸術文化が現代社会の中で存在していくために必要であり、否定的な声に惑わされることなく自身の役割を全うすればよいと思う。それでも彼が在仙のアーティストを常に気にかけているのは、彼が誰よりも演劇と、仙台を愛しているからだろう。



## 鈴木 拓

Taku Suzuki

boxes Inc.代表

宮城県出身。仙台市を拠点に舞台監督、企画制作、劇場運営などを経験した後、東日本大震災を機に設立された文化による復興支援組織Art Revival Connection TOHOKUの事務局長を務めた。2012年8月、東北の舞台芸術の活性化を目的にboxes Inc.を設立。

### 鈴木

震災が起きてから、僕は毎日10-BOX（※1）に通っていました。震災後、10-BOXが情報ステーションになったんだよね。事務所もまだぐしゃぐしゃだった時に、八巻さん（※2）がホワイトボードに無事だと分かった人の名前を書き始めて。それでだんだんと状況がわかってきて、これはけっこうひどそうだと。それで僕にも「何かしなきゃ」みたいなみないな義務感というか責任感みたいなものが湧いてきて、同年代の人たちにメールを送ったんだよね。「何ができるかわからないけど、八巻さんたちと一緒に何かアクションを起こしませんか」っていうようなメールを。それと同じ日にSEND A I座（※3）の渡部ギユウさん（※4）も僕にメールをくれて、「演劇人を集めようと思うんだけど参加しないか」って。ギユウさんは作品を作るために仲間を募りたかったということが後で分かったんだけど、日付も場所も決まっていたから、それなら合流させてくださいということ、集まったのが3月24日。それが「東北復興のための舞台人会議」の1回目だった。

震災から2週間くらい経って、電気は復旧してたと思うけど、ガスはそこにいた人の3分の1も来てなかったから、まだお風呂に普通に困っているような状況で。30〜40人くらい集まったから、みんなの近況報告を聞くだけで4時間くらい話した。震災からその日まで、みんなほとんど家族とだけ過ごした2週間だったから、外部の人と話したい願望がすごく強かったんだよね。泣いてる人もたくさんいたし、今思うといたたまれない会だった。肉親を亡くした人もいたしね。そういう近況報告の後に、SEND A I座が「みんなで作品を作って、今こそ東京でやるべきだ」みたいなことを言っていて、ものすごいブーイングを浴びた。SEND A I座の樋渡さん（※5）は新宿区出身で、東京に40年近くいてこっちに来た人で、東京から見たら今こそ東北が動いているのを見せるべきだと純粹に思ったんだと思うんだけど、あの状況では「そんなことのために私たちは今日ここに、バスも動いてないし、放射能も飛散していると言われているのに集まったのか」と、憤慨した人が多

※1 P 57 ※1 参照

※2 せんだい演劇工房10-BOXの工房長。CASE3のインタビュイー。八巻は仙台でパフォーマンスアーティストに携わる人びとの父親的な存在である。

※3 SEND A I座 ☆ プロジェクト。仙台を拠点とした劇団、俳優養成所。

※4 仙台を拠点とする俳優、ナレーターで、SEND A I座 ☆ プロジェクトのメンバー。

※5 俳優でSEND A I座 ☆ プロジェクトのメンバーの樋渡宏嗣。

かった。それでまっ二つになっちゃって、これではよくないからすぐにまた会おうということになって、翌日と翌々日にも集まった。で、どちらかという社会貢献というか、「今は非日常は必要ないから、日常を取り戻すための活動をしよう」ということでARC>Tが立ち上がった。

それからその時、以前から仙台と交流があったベルギーのダンスカンパニーの人がすごく心配してくれて、お前らの顔が見たいから会議をUstreamしろと言われて。Ustreamは当時日本ではまだあんまり知られてなかったけど、とりあえずできる人を探して配信した。そのおかげで1回目から全ての会議が記録されることになったのは、偶然だけどすごく大きかった。1回目の会議をリアルタイムで見てた人が200人くらいいて、それがその後ARC>Tが展開していく時の最初のきっかけになった。横浜の小川さん(※6)とか北九州の市原くん(※7)、平田オリザさん(※8)も見ていたし、後に6月頃に文化庁に活動について相談

に行った時にも「見てた」って言われたから、あれはすごく大きかった。

**谷津** ARC>Tの最初の活動は、メンバーリストの作成ですか？

**鈴木** 最初はホームページを作りましたね。あの時、世界中のアーティストから、いろいろなところに応援のコメントが来ていて。それを外に出してもいいか確認して発信することをしていた。あの時は自分たちのことを発信するイメージではなくて、仙台的の演劇人やダンサーたちに世界のリアクションを伝えるためにやっていた感じ。「今こういうことになってるんだよ、この人からこんなメッセージが来てるんだよ、八巻さんがこういうことを考えてるんだよ」っていうことをまず共有する必要があると思って。Ustreamを見やすくするためにホームページを作ってみんなからのコメントもつけて、でその後にメンバーリストも立ち上げた。

**谷津** 事務局長と代表が決まったのはどのタイミング？

うにした。こっちも体制なんて整ってないから、ひとことだけのメールもあるかもしれないし、サービスマニュアルというものを明示して始めた。

**谷津** 発信してたのは基本的に拓さん？

**鈴木** そうだね。単純に、その技術とノウハウを持つてる人が他にいなかったから。でもそれをやっていたから、その後も僕がARC>Tをある程度取り仕切ることになったんだと思う。

**谷津** 具体的にアーティストとしての支援活動が始まったのはいつ頃？

**鈴木** ゴールデンウィークかな。3月と4月は情報の収集と共有に徹していて、同時に、外側の人も僕らの情報を求めている。ゴールデンウィークには依頼をもらって活動する状況までいったってこういうのは、情報の発信にスピード感があったおかげだったと思う。ゴールデンウィークだけで4、5件の依頼をもらって、子どもたちが震災以降まったく安らげないし楽しめてないから、子ども達に何かレクリエーションをしてもらえないかって



2011年3月29日に行われた「第1回東北復興に向けての舞台人会議」

**鈴木** 覚えてないけど、たぶん名前をつけた時に、僕と樋渡さんの言い出しっぺ2人をとりあえず代表にしようっていう感じになったと思う。意見が分かれて出て行った人もいたから、あらためてこのパーティに参加するルールとして登録方式をとって、メールアドレスを登録すれば誰でも自由に参加できるよ

※6 当時、NPO法人STスポーツ横浜の事務局長だった小川智紀。

※7 「のこされ劇場」主宰の市原幹也。当時、枝光本町商店街アイアンシアターの芸術監督だった。後にARC>Tをえだみつ演劇フェスティバルに招聘する。

※8 劇作家、演出家。劇団青年団主宰。2009年から2011年まで内閣官房参事を務めた。

というのがその時のオーダーのほとんど。

**谷津** 行った先は避難所？

**鈴木** 避難所とか図書館とか河原でのイベントとか。5月だと、ある程度大人たちも生死の境は越えていたから子どもに目が向くようになって、子どものためにちよつと何かお祭りの的なものやってもいいんじゃないかと思いついて始めた頃なんじゃないかと思う。メディアアテーク(※9)も5月3日に部分再開したり、施設の部分再開が始まった時期でもあったから、オープニングイベントの企画に参加したり。

**谷津** そこで初めてコーディネートをする仕事が始まったと。

**鈴木** その時は行ける人をスケジューリングしただけでコーディネートをしたとは言えないと思うけど、外でできるものは何だろうっていう程度のこと考えたね。で、それをやったら交通費問題が発生した。その時はお金をもらって事業をやるなんてイメージは無くても、アーティストの慈善活動の範疇で手弁当てどこまでやれるかっていう感覚だったから謝金

はぜんぜん問題にならなかったんだけど、実費がかかるじゃないどうしても。メディアアテークは確か全体で10万くらいの謝金をくれて、もらってしまおうと、それをどう割り振って、ARC>Tにいくら残すのかみたいなことを考えなきゃいけなくなる。そこで初めてお金のことが問題になった。

**谷津** 一箇所からもうと、他の場所に行つた人はどうなるんだ、つてなるしね。

**鈴木** まさしくそう。東松島まで行けばそれなりに交通費がかかるし、じゃあ距離で割るのかとか、当たり前ではあるんだけど、話していた志に比べると非常に瑣末な話になっていった。震災直後つて劇場はリアクション遅かったし、文化行政は何もできなかったし、公共のシステムとか組織つていうのは非常事態に対応できないつて分かったから、僕らはシステム自体に批判的だったわけ。「そんなもの作つてからこういう時に動けないんだよ」つて。なのに、交通費の問題にぶつかつて僕らも「これどうしよう」つてなつてしまった。それで「あるくと券」(※10)とい

う通貨を作つて、活動した人に渡すことにしたんだよね。とりあえず何かやつたつていう実感だけを作ろうつていうことで。

**谷津** 「あるくと券」が何になるか、特に約束はなかった？

**鈴木** ないない。お金のアテなんか無かつたし。八巻さんが10-BOXの利用に使えるようにしようつて交渉してくれたことがあつたり、後々ARC>Tが主催したワークショップの参加費に使えるようにしたりはしたけど。その時は「ご苦勞様でした、ありがとう」つて何か渡す行為をしたかっただけ。文化庁が定めてる日当が1回2500円だつて聞いたから「じゃあ1回2500歩だ」つて適当に決めて。

**谷津** なるほど。そのゴールデンウィークがあつて、その後かな、外の人に来てもらつてワークショップのようなこともやり始めてたよね？

**鈴木** ワークショップつていう形でやり始めたのは10月からだけど、勉強会は5〜6月くらいからやつていた。設立当初から、障がい

者の方のところにいきたい人、子ども達のところに行きたい人つていう感じで興味の対象ごとにメンバーがだいたいグルーピングされていたから、そのチームで内々の勉強会してた。ただ、ARC>Tが立ち上がつて連絡先を公開していると、「何か協力したいんだけど」つて連絡をくれる人がいたから、勉強会がこの日にあるんだけど来れませんか？つてお願いして来てもらつたりはしてたね。

**谷津** ゴールデンウィークの後は、出前活動(※11)のようなものも増えた？

**鈴木** 毎月増えていく感じ。でも相変わらずただの紙きれを渡して、みんなほとんどお金がかかつていき。震災直後からしばらくはそれでも大丈夫だったんだけど、7、8月くらいから相当きつくなつてきたのね。その間、みんなほとんど働けてないから。行きたいけどガソリン代が出せないつて言われると、もう行けつて言えないよね。それで困つて、6月の末か7月の頭に文化庁にどうにかならないかつて相談に行つた。そしたらそこで、文化庁の芸術家派遣事業(※12)のこと

※9  
せんだいメディアアテーク。仙台市の市民図書館・ギャラリー・イベントスペース・ミニシアターなどを持つ複合文化施設。公益財団法人仙台市市民文化事業団が指定管理者として管理運営を行う。

※10  
ARC>Tのコーディネートによつてアーティストが活動した際、その証明として配布されたARC>T独自の通貨。一枚「2500歩」。

※11  
ARC>Tのアウトリーチ活動の呼称。アーティストの表現技能を用い、現地からの要望にできる限り寄り添つた形でアートプログラムを開発し、届ける活動。当初は避難所で身体をほぐすためのワークショップが多かつたが、時間の経過に伴い、老人福祉施設や学校、児童館からの依頼が増え、鑑賞や創作を目的としたプログラムに変わつていった。

※12  
「仙台市震災復興のための芸術家派遣事業」。文化庁による「文化芸術による子供の育成事業(芸術家の派遣事業)」「東日本大震災復興支援対応(分)」の受託事業として平成23年度から実施。学校が希望のプログラムを申請し、アーティストが派遣される。

を聞かされた。それで、仙台市の実行委員会（※13）に加わることになった。

**谷津** それで文化庁の派遣事業が始まって、ある程度資金的に安定させながら活動することができるようになったわけですね。その辺りまでの過程は、拓さん自身はどういう気持ちでやっていったんですか？

**鈴木** 今だからある程度笑い話で言えますけれど、不謹慎にスリリングだった。楽しんでたと思う。震災前、仙台ではもうある程度のこととはやれてしまっていて、仙台を出る気はなかったけど自分の能力以上のものを求められないのが面白くなって。でも震災後の状況って、圧倒的に何かよくわからないものと対峙しなきゃいけないし、お金も来るし、人もいるし依頼もある。僕はたぶん、その状況に興奮してた。これ、今初めて言ってるけど（笑）。文化芸術の教育的普及とか、障がい者とか高齢者がこんなにも社会から断絶されていることとか、そういう人たちにアートが持つ力みたいなことは、やりながら学んだんだよね。初めからその力を信じてアートで復興し



2011年5月、ARC>Tがコーディネートした「夢トラック劇場」が被災地を巡った

ようとしてたわけじゃなかった。だから超不謹慎だったと思います。でも、僕みたいにある程度組織論とか、社会の中でどう渡っていくかみたいなことをやる人間が1人くらいいいてよかつたんじゃないかって思うんだけど。  
**谷津** やって見たらお金や人が集まってくることに驚いただろうし、それと同時に「アー

ティストに対してこんなに社会のニーズがあるのか？」っていう驚きもあったわけだよ。

**鈴木** 潜在的に求められてたっていうのが意外でしたね。ああいうことがあったから顕在化しただけで、需要はあったんだよね、もともと。あれだけのことが起きないと顕在化しないっていうのが逆に悲しかったりするけど。あの時は、活動をやればやるほどARC>Tが知られることになって、依頼も増えていきましたね。

**谷津** 需要が一番多かったのはいつ頃？

**鈴木** 2011年の秋だと思います。ただ僕は、現場にいるよりは次のことを企画する側で、その頃ちょうど、12年度の企画を作ったり予算を取りにいたりしてたからかもしれないけど。スケジュール的に一番きつかったのはその頃だと思う。

**谷津** 運営体制ができて、存在が知られたから需要も増え、同時に次の年のことも考えなきゃいけない時期だったわけですね。

**鈴木** そうだね。あと基本姿勢として、来たものは10割打ち返すっていう方針で、あらゆ

る依頼を受けてたのね。それで多分、ある程度の満足と評価をしてもらってたから、加速度的に増えてたっていうのはある。あまりにもおかしな話は断ってたけど。

**谷津** アーティストも当初はみんな被災者だったし、出前活動に行く先の施設や子ども達も被災者だったわけだけど、仙台は他の沿岸部に比べると比較的被害が小さいこともあって、だんだんと被災感が薄れていきましたよね。そういう中で、自分たちの活動をどういう風に捉えていたんだろう？

**鈴木** ARC>Tのメンバーは、多分9割以上が1年目の途中でもう、「私たちは被災者じゃない」っていう結論になってましたね。定例会でもみんなそう公言してた。そうじゃないと動けなかったんだと思う。僕は仙台以外で話をする機会も多かったから、そういう時は自分は被災者だっというスタンスでいたんだけどね。僕が被災者じゃないって言っちゃうと、本当に被災している人たちもそうじゃないっていうことになりかねないと思ったから。でもARC>T内部のアーティ

※13  
震災対応として始まった芸術家派遣事業は、各地方自治体の実行委員会を置き、官民協働で実施することが求められた。仙台は公益財団法人仙台市民文化事業団、公益社団法人落語芸術協会、一般社団法人音楽の力による復興センター・東北、公益社団法人日本芸能実演家団体協議会（芸団協）、ARC>Tで形成。ARC>T事務局は、実行委員会の実務基盤を担当しコーディネート業務を行った。

ストたちは「自分たちは被災地にいる支援者だ」という感覚だったと思いますよ。家族を亡くしてるメンバーもいたから、その辺は複雑なんだけどもね。

**谷津** あと、もともと自分たちがやってた活動をできないという意味では、まだ通常の状態ではなかったわけですよ。出前後もひどく被災したところばかりだったわけじゃない、大丈夫なところからだんだんと日常に戻っていくわけじゃないですか。言ってみれば一人一人みんな状況は違う中で「支援活動」をやっていたわけですよ。

**鈴木** そうですね。だから、ARC>Tはたぶん、すごく都市型の活動だったと思う。ある一つの地域のある一つのコミュニティに対して何か手だてを打っていくという活動じゃなく、いろいろな考え方があって活動する人も対象者も様々だけど、すごく大きな旗に向かっては同じ方向を向いているっていうことだったから。仙台っていう都市に対応していた感じはありますね。

**谷津** 大きな旗というのは？

**鈴木** ARC>Tの目的として掲げてたのは「ひと・まち・場の再生」と、「ネットワークづくり」。ただ、行けば行くほど、行った先の人たちよりもアーティスト自身が癒される感じがあつて、後半、「結局自己防衛とか自己治療のためにやってたんじゃないか」って、落ち込んだ時期もあった。あと、別に僕らがいなくても「人・まち・場」は回復していくよね、経済原理で(笑)

**谷津** それは、「芸術は役に立つのか」っていう話に戻っちゃうね。

**鈴木** そう。だからやっぱり、ある一定の地域、一定の人たちを対象にした活動の方が力強いし、継続するし、忘れないと思う。年間に何百っていう数の出前活動に行くと、一つ一つ覚えていられない。「あれ、なんかこの保育園来たことあるな」っていうぐらいになっちゃうから。どっちがいいというわけじゃないとは思うんだけど、仙台的規模感でやるとそういうことになりかねない。アーティストたちは実感を求めるから、やっぱり疑問を感じ始めるよね、この大きな活動に。

本当は、個々でやっている有意義な深い活動の一つに見せることで、行政や社会に対して発信力を持つっていうのがARC>Tだったはずなのに、どっかでよじれた。アーティストは事務局がとってきた事業をやる人たち、下請け業者みたいになっていったんだろうな。それはたぶん、僕がシステム重視しすぎた結果だと思っけど、難しいですね。

**谷津** 自己防衛・自己治療っていうのは「自分が役に立っている」という実感を得るということ？

**鈴木** それが大きいでしょね。本気でプロを目指すことまではせずに好きで演劇を続けてきた人たちの中には、「このまま私は芝居を続けていいんだろうか」と思っていた人が少なからずいて、それが、震災が起きて子どもたちとか社会に役に立つような活動をしちゃうと、それがそのまま自分が演劇を続けてきた理由になってしまった、っていうこともあったと思う。

**谷津** もともとそうじゃなくても。

**鈴木** もともとはそうじゃなかったってはず

きりと認識できないとは思うんだけど。震災が起きたことで、基準があやふやになっちゃってるから。それではっきりと「私は子どもたちのために演劇をやってるんだ」と思った人は今も子ども向けの活動をしてるし、もうちょっとアート本来の非社会性と禍々しさを持ってアーティストとして存在したいと思った人たちは、出前活動を偽善的に感じてやめていく、というのが、2年目はけっこう顕著に起き始めた。

**谷津** さっき「外では被災者として振る舞っていた」と言っていたけど、現場がそういう風に複雑になる一方で、外からの「被災地のために何かしたい」というニーズもすごく集まってきたと思うんですけど、それに対してはどういう思いで対処していた？

**鈴木** 1年目の秋ぐらいまでは、トークゲストに呼ばれて行くと、会場にいる一割ぐらいの人が泣いてるんだよね。あるシンポジウムの時なんて、ずっと客席からすすり泣きが聞こえていて。終わった後に主催者の人に、東京にいて「何かしなきゃいけない」と

思いながら結局何もできなかった人たちは、今日来て僕の話聞き、帰りに「頑張ってたよ、って言われて。それまでは泣いてるんなら何かしろよ」くらいに思ってたんだけど、それを聞いてちょっと吹っ切れた。そうやって救われる人がいるんだってそれだけでいいなって思ったの。下手したら仙台より東京の方がきついと思ったから。僕は、家族を亡くした人や、「ここまで津波が来てね」って笑いながら話す人と直接話をしてる。それ自体が自然治癒行為になるんだよね。でも東京の人たちはそれが無い。本当かどうかわからないことも含めて、テレビで流れてくるものにしかなれないわけだから、きついよね、精神的には。だったら、現地で支援活動をしていてある程度の情報を持った人間がちょっとリアルなことを話すのを聞いて、涙を流してスッキリするっていうのは悪いことじゃないし、僕の役目だと思って。内部からは、自分たちの活動をお涙ちょうだいのようにしゃべってお金なり支援を引っ張ってきてるって

思われたりもしたけど。そうじゃないんだけどね。ARC>Tはお金を出し難い仕組みだったし。法人でもないし、明確な事業計画があったわけでもないから。「だいたい月に10本くらい依頼を受けて出前活動に行ってるんです、多分この先も続くと思うので資金をください」って言って、出す企業はいないでしょ。それでも出してくれるっていう奇特な団体もいくつかはあったけど、基本的には継続的に事業を回していけるような動きはしていないから。

**谷津** 当時は支援先を探している企業も多かったと思うんだけど、「支援したい」という要請はなかった？

**鈴木** それに僕らがリンクしていくテクニクが無かった。1年目で助成金の申請書を50本以上書いたから、2年目はさすがにいろいろ覚えて、意図的にお金を取りに行ったりもしたけど。1年目はとっても叙情的な文章で助成金の申請書を書いていて、そりゃ通らないよねっていうものも多かった。ある程度客観的に見ているはずの僕ですらそうだから、

アーティストだけで集まったら本当にダメだったと思う。やればやるほど制作者というか、コーディネーターが重要だということが分かっていった。アーティストとかアートは、非社会度が高ければ高いほど希有な作品になったり、アート性を持っていたりするじゃない。でも、価値があってもそれをきちんと

発信してしかるべきところにつなぐポジションが相当大事だよ。2011年の10月から1年間くらい、偉い人たちの会議に呼ばれて意見を求められることが多かったんだけど、いつも訴えていたのはコーディネーター不足。コーディネーターの謝金がない、育成する機関も術も東北にはない、っていうのが話すことの主軸だった。

**谷津** 2年目はある程度資金的にきちんと回るようになり、事務局員への手当も払えるようになったわけだけど、活動を仕事化することに対する内外からの批判が出始めたとき聞きました。



鈴木拓は数々の催しにトークゲストとして招かれ、活動の様子を報告した

**鈴木** 活動を仕事にすることについて内部で批判していたのは片手で数えるくらいで、そういう人たちは「考え方が違う」ということで自主的にARC>Tをやめていきましたね。内部で採めたのはお金の使い方とかやり方。自分が活動の対価としてお金をもらうことには抵抗がなく、むしろそうやっていきいたいと思ってるんだけど、事務局が何かいいことだけを言ってお金を引っ張って来て

いるんじゃないかと、つけてる科目と違うお金の使い方をしてるんじゃないかとか。ARC>Tみたいな団体や活動についての法整備なんてされてないわけだから、いろいろやり繰りしなければ活動すること自体ができないんだけど、そこが苦しかった。そこは僕らが引き受けるしちゃんと責任も取るから、みんなは現場のことと行った先の人たちのことだけを考えてください、って言うんだけど、それが、「なんかいろいろ汚いことやってるけどあんたたちには言いません」という風に取り残されたんだよね、たぶん。これはシステムとか理屈の話じゃなくて、信頼関係があればそんなことにはならないと思うんだけど、150人もメンバーがいるとその中の10人くらいはそういう感じになっちゃう。お金を出してもらえらるうちにコーディネーターを育てないと、時期が来たら活動も終わっちゃうと思って事務局を8人にしたんだけど、それに批判がすごく強かった。マネジメントも自分たちでやれるから、事務局は3人くらいにして自分たちの謝金を増や

してほしいって意見が増えた。僕に言わせれば、事務局は各カンパニーではできないことをやってるんだけどね。

**谷津** 事務局員も、ちゃんと仕事はしている、他のメンバーともとと演劇仲間だから、自分だけお給料もらっているのかってという感覚はあったかもしれないよね。

**鈴木** 制作のプロじゃなくて、半分以上はアクターだったからね。素人集団という風には見えていたのかもしれない。でも、今だんだんと個々のユニットでの活動が増えてきているけど、やっぱりコーディネーターを置かずにやっている活動は見えにくくなってくるし広がっていかないよね。

**谷津** もともとARC>Tの活動は2年と区切っていて、拓さんとしてはその間に、顕在化したニーズに応えられる仕組みを作っておこうという考えでやっていたわけだね。でも、その後は自分はARC>Tを続けたいということは、2年目の早くから言っていた。そこはどういう考えだった？

**鈴木** 理由はいろいろあるけど、やればやる

ほど、社会的弱者と呼ばれる人たちに対してのアーートの有効性がわかってきて、わかればわかるほど、素人の僕がそれをやり続けることに罪恶感があったっていうのが一番の理由だね。おこがましいなって思ってた。わかったフリして外でしゃべって。もちろん、ARC>Tをやったことである程度の経験をしたし、だんだんわかっては来るんだけど、それは僕が望んでいたことでも、もともと挑んでいた分野でもないからね。たまたまあいう非常事態に僕の能力が役に立っただけだから。この世界で生き続けることは多分できるし、それが仙台にとっていいことかもしれないとも思ったけど、メンバーの中でもとそういうことに関心があった僕より下の世代もいたから、だったら僕は引いた方がいい

の中にももう充分、この活動を継続させる人がいて、たぶん僕が作った流れを汲んでいく人もいるし、僕より10歳下の人間がそれで食えるようになるのはいいことだから、僕はここにいない方がいいと思った。ぜんぜん悩まなかったし、相当早い段階でそう思った。

**谷津** あの震災後の状況に対して自分がやるべき仕事はもうやってたっていう感じだったのかな。

と思った。それと、仙台の土壌を豊かにしていくには、いわゆる社会貢献のような非営利的なアーオがあるのと同時に個性の強い尖ったアーオも必要で、両輪ないとバランスを崩すだろうと思ったのね。僕はもともとそっちの世界にいたし。見渡した時に、ARC>T

**鈴木** 何がきっかけだったのかな。どこかでハッキリとそう思った。1年目はこのままARC>Tを10年やるなって思ってた。きつかけが何だったかわからないけど、きつかけが短期間の間に、方向を変えて成長していく必要があるって思ったんだよね。

**谷津** タイミング的にはいつ頃？

**鈴木** 多分、2012年の初頭。最初の3月11日の前だった気がする。それで福澤さん(※14)に相談して、3月か4月にはboxes(※15)をつくる計画を始めた。

決断はけっこうハッキリできたんだけど、状況的にはやっぱり、大いに迷ってましたけど

※14

株式会社STAGEDOCTOR  
代表取締役の福澤諭志。仙台市出身。Nylon100℃、阿佐ヶ谷スパイダース、シアターコクーンプロデュース公演、PARCOプロデュース公演などの作品で舞台監督として活動。2011年5月にARC>Tとコンタクトをとり、各地から演劇人を集めた羊羹会や、外部講師を招いた勉強会「ウオーキングアルクト」を協働で企画していた。

※15

鈴木が現在代表取締役を務める演劇作品の企画・制作会社boxes, inc。

ね。文化庁の事業が大きな収入源としてあったから、あれがあと3年続いたらどうにかなるだろうと思えたのが大きかったかな。文化庁の事業さえ、きちんと僕が橋渡しになれば、それで保つんじゃないかと思った。それを基盤にしてあと何ができるかっていうくらい、一回身軽にしてあげた方がいいんじゃないかとも思っていた。それまでは本当になんでもやっていたから。

**谷津** そう考えて拓さんが身を引いた後の、今の「ARCT」(※16)を見ていてどうですか？

**鈴木** どうか。想像通りとも言えるし、こんなはずじゃなかったとも思っているし。判断をする人間がいらないのは良くないと思っ  
ている。団体だから、決断する時はたとえ根拠が無くても決断して引つ張らなきゃいけない時があると思う。それをやってきたからARCTは信用されてきたと思うのね。今はARCTの意志が無いように見える。NPO法人で、社会の隙間を埋めるために無いものがあることにする団体じゃない。

20万円あるから20万円のことをやるんじゃない、20万の価値があることをやるから20万くださいっていうことだと思う。ミッションが先で、そのために必要な人とコストを準備する。僕はそれをやっていた自負があるから。その意識がないと、得たお金を原資に割り算していくだけになる。それだと発展していかない。それができない市場だっていうのはよくわかってるけど、どうせ苦しいんだから、せめて予算書くらいは理想から書くべきだと僕は思うんだよね。最初の2年は言えばもらえた時期でもあったから、僕がこれを言うのはずるいかもしれないけどね。

**谷津** でもその状態はある程度予想できたことだよ。拓さんがいなさやARCTは回るわけない」ってけっこういるんな人から言われたと思うし、私もそう思ってた。

**鈴木** 2年目の終わり頃に、新体制をどうするかって話をみんなできてたじゃない。僕はアーティストに制度設計は難しいだろうと思っていたけど、本人たちが望んでいるんだから気が済むまで話し合えばいいと思っ

いた。でも結局、僕から見ると理想論しか出て来なかった。僕はずっと制作者の集団にするのがいいと思ってたから、最後の会議の時に、アーティストは属さず、制度設計と行政提言と事業企画をやるアーティスターのチームにすることを提案した。アーティスター達は「ネットワーク作り」をしたいと言ったんだけど、僕はネットワークを作るつもりも無理だなと思って。震災後、いろんな団体が「ネットワークが大事だからネットワークを作ります」って言ってたけど、結局一つになれずにバラバラにやっていたから。それに、インターネットがもうネットワークを擬似的に作っちゃってるから、「ネットワーク」っていう概念自体が無理でしょ。

**谷津** インターネットで事足りてしまう。

**鈴木** そう。インターネットでは本来のつながりって絶対作れないんだけど、でもインターネットがある以上、今からネットワークって言うのもう仮想世界にしかそれは作れないと思う。もし本来の意味でつながるんだったら、つながる人を限定していかないと。

だから、次の体制でアーティストも混在したネットワーク組織にするということに僕はものすごく違和感があったけど、みんなが望んでいたのはそっちだった。それでも、1年目は理事になって、意識改革も相当やったんだよね。だけどやっぱり変わらなかったから、2年目は理事も辞めた。さつき、2012年の初頭に決断したって言ったけど、その時点では全部から引こうとは思ってなかったから、徐々にそうなっていったっていうことではあるんだよね。理事をやってみて、この時間をもったいなって思い始めた。法人化を目指すんだしたら多少社会のことも勉強した方がいいと思うんだけど、みんな資料すら読んで来ない。でも理事も僕以外はみんなアーティストだから、強くは言えないよね。でもARCT全体としての意志がそっちだったから、その場にはいない方がいいのは僕。そうなたらもう引くしかないよね。

**谷津** 制作者のプロ集団を育てるためにARCTをやってきて、それを引き継ぐうとしたけどみんなの意志がそうではなかつ

※16  
ARCTが2013年4月に2年間の活動を終えた後、その活動を整理して引き継ぐ形で誕生した。体制を見直し、理事会を設置、代表・事務局長も新たに人選するなど運営体制は変わったが、すでに「アルクト」という名前が広く知れ渡っていたため、読みを変えずに「ARCT」から「ARCT」に団体名を変更した。

たからうまくいかなかったと。そういう意味では今の状況になっているのは想像通りだと。**鈴木** 困難な道だろうと思ってはいたけれど、それでも理事として関われば変えていけるんじゃないかと思っていたのが、そうできなかったことは不本意だよ。

**谷津** 内部からは引き止められなかった？

**鈴木** 少なかったですよ。内部は、とにかく僕が言うことなすことに懐疑心がすごく大きかった。でも外からは相当引き止められた。谷津さんが言ったみたいに「回るわけないじゃん」というリアクションをいろんな人にされて、すごく悪いことしてる気分だよ（笑）その分、期待してくれてたんだと思うけど。ただ、ARC>Tでは僕は起きたことに対応しただけだから、あれは自分の力じゃないっていう思いもある。だから、もう一回ゼロからちゃんと挑戦したい気持ちもたぶんあったと思うし、いろいろです、理由は。でも、ARCTのことを「もういいや」とはぜんぜん思わなくて、しょっちゅう話してはいるよ。



東京の演劇人を講師に招いて開催したワークショップ「ウォーキングアルクト」

**谷津** このあいだ澤野くん（※17）にインタビューさせてもらったら、制作者だけの集団にするかアーティストの集団にするか、どっちかにしなきゃいけないかと思ってるってだよ。問題が先に進んでいないと言ってしまうかもしれないけど。

**鈴木** そう言ってた？1年かけて気づい

たっていうことだよ。制作者だけにして法人化するんなら、また理事になってもいいと思ってる。悪い意味じゃなく、アーティストがいると話にならない。アーティストと制作者は利益相反だから。手をつないで同じところを目指すんだけど、求めるものとその対象が完全に相反してると思うし、むしろそれが拮抗してた方が力強い。だから、会議をしても絶対に同じ結論にはたどりつかないと思う。話すことは大事なんだけど、決断はコーディネーター側だけでやれた方がいい。それはアーティストをおざなりにしているわけではないって言うことが、当時の僕の言葉では伝わらなかった。20人くらいだったら一人一人酒飲んで話をすればよかったかもしれないけど、まあ僕、酒飲めないけど（笑）、150人もいるとちよつと、どうしたらいいかわからなかった。それでも一人一人会って話をするべきだったのかなと思ったりはするけどね。

**谷津** 澤野くんも自分でやってみて初めてわかったということなのかな。「演劇家としての活動とARCTの代表としての活動に気

持ちの上でどういう整理をつけてるんですか？」って聞いたたら、それを聞かれたのは初めてだって言ってたんだけど。そうなんだ、と思って。それが内部的に問題にならないことが問題なのかもね。

**鈴木** そうだね。二足の草鞋でやるのが前提になっちゃってるんだよね。でもそこに疑問を持たないと先に進めない。

**谷津** まあでも、みんなARCTに存続してほしい気持ちはあっても、自分がコーディネーター側のプロになろうという人はいないって言うことなんだろうとは思うけど。

**鈴木** 昨日ちょうど文化庁の派遣事業のコーディネーター会議があつて同じような話をしたんだけど、実はもう限界で。今、派遣するアーティストを選ぶことがほとんどできてないのね。会員の中で手を挙げた人は誰でも参加できる状態にある。そうすると、そのアーティストを派遣するのがいいと思っていなくても仕事でコーディネイトするじゃない。そのモチベーションがもう限界なの。ARCTがアーティストを選別するのは今の段階では

※17  
ARC>T解散後に新体制として始まったARCTの代表。P162よりインタビュー掲載。

無理だよ、だってアーティストに権限があるんだもん。お金を払って会員になっているアーティストを外す道理がない(※18)。僕は、ある一定の水準を設けて、それを越えるように切磋琢磨してみんなが成長していくっていう作りにしないともう成り立たないと思って。実行委員会にもこれは当てはまって、文化庁の依頼を受けて、実行委員会が推薦できるものだけを派遣するんじゃないと仙台市としてもまずいっていうことになってきているのね。プログラムの質を上げるためにアウトリーチラボ(※19)をやってみたりとか。だから市には、もう少し権限を使ってくださってお願いしてる。基準の設け方は難しいんだけどね。

**谷津** 「市認定アーティスト」とか言うと、「お上が勝手に決めた」みたいに言われちゃうしね。

**鈴木** だから、誰にでも納得できるような基準を5つくらい作るとかね。ジャッジする人を外部に3人くらい作って、全プログラム1回ずつ見てもらって改善要望書を出して、応

えなかつたら次の年使わないとか、そういう風にしようってずっと言っていて、やっとそういう機運になってきてる。

**谷津** たぶん、全部の結論が出るのはずっと先だと思うんですけど、あえて今の段階で、震災とARC>Tの経験を通して、仙台的演劇界なり拓さん自身が得たものってなんですか？

**鈴木** それはあんまり考えたことがなかったな。僕にとつて一番大きかったのは、多様性を受け入れられるようになったことかな。

震災前は、僕は世界はある程度論理で解決すると思っていたから。100%じゃなくても概ね正しい論理というものがあると思ってた。でも今は、正解なんて何十もあって、優劣もつかない可能性があると考えようになった。それが前提だと、偏ったことを力強くやる理由にもなるんだよね。「絶対にこれが正しくて他は全部間違いだ」という強さで闘っていたのと、「自分がやっているのは何十もある答えの一つで、もしかしたら優劣もつかないかもしれないからこそ、自分が突出するよう

に頑張る」っていうのはぜんぜん違うと思っ

空白になっても残るってすごいよね。

ていて。後者の考え方ができるようになったのはARC>Tのおかげだね。あれだけのことが起きたら、仙台っていう田舎で演劇なんてマイナーものをやっている人間はみんな同じ方向を向くだろうと思っていいたら全くそうじゃなかったし、「ネットワークを作ろう」っていう意志のある団体が同じテーブルについても、結局一緒にはできない。もうそういうもんなんだろうと。これからの僕の人生であの震災以上のことは起きないとすると、あれで変わらなかったものはもう変わらないと思ってるんだよね。それ以上のことは理想でしかない。理想はもちろん持ち続けるけど、人が作るものの限界がわかったっていうか。僕は震災が起こった時、何か法律が変わったり、今までは絶対にあり得なかったようなことが起こると思っただよね。だけど実際はあつという間に元に戻って、忘れ去られていく。人類が作ってきた社会とか町とかって、そういうシステムはすごい強固だなと思った。あれだけ、建物も概念も、人の命すらガサツと

あと、仙台っていう土地が得たものがあるとするば、「アルクト」っていう名前がいろいろなところに残ることだと思う。こないだも早稲田大学から連絡がきて、震災後のことをまとめたたいから写真が欲しいって言われたりとか、全国紙の記者に「震災の特集を来年の3月にやるからその時に記事を出したい」って言われたりとか。パブリックで歴史に残っていくものの中に「アルクト」っていう名前が刻まれるのは価値だよ。で、今後一番その価値が輝くのは、あつてほしくはないけど日本のどこかでまた同じようなことが起きた時。その時に僕らがやれることはけっこう大きいと思ってる。神戸では、7年後に初めてメセナ協議会が当事者に話を聞いてまとめるんだけど、リアリティが薄いんだよ。だけど僕らは最初の会議の映像から全部残ってる。それはきつと未来のためになるよね。僕たちと同じことをやる必要は無いし、その土地によっていろいろな葛藤が生まれるだろうけど、一つの歴史資料になるっていう

※18  
ARCTでは年会費を支払う「正会員」が議決権を持つ。

※19  
「仙台市震災復興のための芸術家派遣事業」で活動するアーティストを養成するために企画された研修事業。

のは意義深いと思っっている。どこかで次に何が起きない限り証明されることはないけど、ああいう有事の際にパフォーマンスアーツが何ができるかっていうことを考える時の、答えではないけど、一つの大きな材料になるんじゃないかという気はします。

**谷津** 仙台の演劇界なり行政は震災とARC>Tの経験を通して変わったのかな、拓さんの目から見えて。

**鈴木** 僕個人の視点で言えば、文化振興課(※20)が僕とか澤野と話すチャンネルを開いているっていうこととか、仙台市市民文化事業団がARCTをきちんと一コーディネート団体として認識しているっていうことだったりとか、いろいろ変わった。でもやっぱりシステム、体制って考えると、変わらないっていう気がする。わかんないですね、仙台の中にいるから。組織っていうよりは担当者がどうかによるし。そうそう組織の理念とか論理は変わらないと思うし、組織の論理を変えるのも人だからね。誰がやるかに起因してくるんだなと思うと、難しいですよ。

**谷津** ここまでの話とはスケールがだいぶ違っちゃうかもしれないんだけど、ASTTと一緒にやった二つの会議(「なんのためのアート」(※21)と「みやぎぶんか3ねんめ会議」(※22))、とARC>T-ARCHEIVE(※23)はどういう役割を果たしたかっていうことを一応聞いておきたいんですけど。

**鈴木** 「なんのためのアート」と「みやぎぶんか3ねんめ会議」は、ざっくり言っちゃうと森さん(※24)からいろいろ勉強したなっていうことだよ。人を集めて対話の場をやる時の仕掛け方とか、それに必要な人材を座組みしていくこととか、森さんは敏腕だなあ。そういう意味であの2つのイベントは大きかったかな。あの2つのイベントは、参加した人たちにとって記憶に残るものになって書いたのが全部WEBサイトで見れるようになって(※25)、パブリックコメントになった。舞台上の人が話したこと、自分が書いたパーソナルなコメントと、6人でしたグループディスカッションと、それが最終的

※20 仙台市文化スポーツ部文化振興課。文化行政を担っている。

※21 ARC>Tが事務局を務め、Art Support Tohoku-Tokyoと宮城県共同主催で2013年1月に開かれた対話型のイベント。P160〜161参照。

※22 「なんのためのアート」を引き継ぐ形で2014年3月に開催。宮城県の文化事業「芸術銀河」の一環として開催され、ARCTが事務局を務めた。東京都と東京文化発信プロジェクト室は後援。震災後、仙台圏で芸術文化活動を継続してきた6名がテーパーリダーとなり、参加者は任意で参加するテーブルを選択。それぞれのテーマでディスカッションした後、全体で共有した。

※23 ARC>Tへの支援と「ART Support Tohoku-Tokyo」で実施したプロジェクト。P172〜173で解説。

と一緒になって、世界中の誰でも見られるパブリックデータになったっていうのが面白いみたいなんだよね。畠山さんの基調講演(※26)が良かったとか、そういうことも併せてだとは思っただけ。」「3ねんめ会議」では六つグループを作ったんだけど、そのうち二つのグループがいまだに定期的に会ってるんだよ。

**谷津** へー！

**鈴木** 森さんは「空間の作り方も進行もうまく演出されていたのが功を奏したんだ」って言ってくれているから、それは単純に嬉しい。「対話の場」って、今「流行り」って言ったらおかしいけど、ワークシヨップとかまちづく

りとか、建物を建てるにしても必須になってきていて、形式化し始めてる気がするんだけど、その場が終わった後も自主的に集まるコミュニティができるようなことが起こせるとしたら、それはアートの力だと思っただよね。そういうストーリー立てとか話しやすい場の作り方とか、僕ら演劇人は得意分野なんじゃないの？って思ったりする。

アーカイブは、今でもあれでよかったのかなって思うけど。今読み返しても面白いけど。ああいうことをやらせてもらえたということが単純にありがたかったなあと事務局としては思うけど、それがたぶんアーティストには伝わっていないし、100万あったらもっと別なことできなかったの？って言うよね。あの紙(※27)が残ってることの価値を見出せるのはたぶん10年後だと思っしね。そういう、僕ですら「ほんとにこんなお金の使用方でいいんですか？」って思うようなことをやらせてくれたことに、すごく価値があるよね。

(2014年12月10日 仙台市 boxes 事務所)

※24 東京アートポイント計画およびArt Support Tohoku-Tokyoのディレクター・森司、NPO等と協働したアートプロジェクトの企画運営、人材育成プログラムを手がける。

※25 参加者が対話の時間に自らの考えを書き込んだワークシートを終了後にスキミングし、原本は本人の手元に残しながら、データをWEBサイトで公開。イベントが終わってもその場にいた人々の考えを共有し合える試みを行った。

※26 「なんのためのアート」では、岩手県陸前高田市出身の写真家・畠山直哉が基調講演を行った。巨大な震災に向き合うときの「被災者」や「アーティスト」といった立場の曖昧さとともに、そこに一人の人間として向かう姿勢をストーリーに表現し、聴くものに強い印象を残した。

※27 ARC>T ARCHIVEで行ったインタビュアーの回答は、最終的にA1サイズのパスター状の印刷物にまとめられた(P173に掲載)。

## 震災後、芸術文化の担い手はどのような活動を形にし、つづけていっているのか。

2011年3月11日に発生した東日本大震災は、沿岸部を中心に甚大な被害をもたらした。その後、被災地では芸術文化に関わるさまざまな活動が展開されました。その活動の一部を共有するとともに、震災という非日常を契機に生じたこれらの動きが、日常へ向かう今後の復興過程でどのような継続性を持ちうるか？ そもそも芸術文化には、どんな必要性や意義があるのだろうか？ 試みの報告を聞きながら、集まった者同士で考え合う、4時間半の場をひらきます。

# なんのたのめのアート

2013年1月26日(土) 13:00-17:30 (開場12:30)  
 せんだいメディアテーク 1階 オープンスクエア

<p><b>写真家</b>                  梶山直哉                  Art Revival Connection                  TOHOKU 事務局長                  鈴木拓</p>	<p><b>アーティスト</b>                  東京芸術大学教授                  日比野克彦                  水戸芸術館現代美術                  センター学芸員                  竹久侑</p>	<p><b>東京芸術大学教授</b>                  梶倉純子                  東京アートポイント計画                  デレクター                  森司</p>
<p><b>せんだいメディアテーク                  企画・活動支援 策画長</b>                  甲斐賢治</p>	<p><b>写真家</b>                  著述家                  港千尋</p>	<p><b>リヒングワード代表</b>                  西村佳哲</p>

## なんのたのめのアート

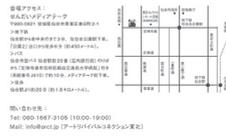
報告者、復興文化の担い手はどのような活動を形にし、つづけていっているのか。

タイムテーブル

13:00-13:05	開場挨拶
13:05-13:15	基調講演 梶山直哉
13:15-14:00	基調講演 梶倉純子
14:00-15:00	トークセッション
15:10-16:10	トークセッション
16:10-17:10	トークセッション
17:10-17:20	閉会挨拶

日程：2013年1月26日(土) 13:00-17:30 (開場12:30)  
 会場：せんだいメディアテーク1階 オープンスクエア  
 定員：200人 (要予約)  
 参加費：無料

申込方法：募集、抽選、選考(抽選番号、メールアドレスを公開し、以下のいずれかの方法にて応募)申し込みください。  
 ●メールで「20130126」をキーワードに  
 ●FAX「022-7461-6665」で「なんのたのめアート」をキーワードに  
 ●「なんのたのめ」をキーワードに「なんのたのめアート」をキーワードに  
 10-0000 宛、〒980-0001 仙台市青葉区中央1-1-1 せんだいメディアテーク1階



http://n-t-a.net

## なんのたのめのアート

「なんのたのめのアート」は2013年1月26日、Art Support Tohoku-Tokyoと宮城県の主催で行われた。東日本大震災後に文化芸術分野でアクションを起こしたアーティストや写真家、キュレーターなど7名をゲストに招き、基調講演と3つのトークセッションによる活動報告で構成。働き方研究家の西村佳哲氏をファシリテーターに迎え、中央の舞台をとり囲むように6席の丸テーブルを配す独特の会場構成を採用した。各セッションの合間に、参加者は西村氏の導きに従

って同じテーブルの6人で感想を共有し合い、配られたワークシートにその時の思いを書き込んだ。ワークシートは終了後に全てスキャンされ、「なんのたのめのアート」のWEBサイトで公開された。ARC>Tは事務局を担い、鈴木拓が会場構成や制作を取り仕切った。当日は大雪であったが、会場は予約者でほぼ満席となった。この時の模様は、「3がつ11にちをわすれないためにセンター」WEBサイトにて公開されている。

<http://recorder311.smt.jp/movie/25155/>



前掲の鈴木拓が事務局長を務めたARC>Tは、当初から宣言していた通り2年間で活動を終了した。その後、ARC>Tが築いたネットワークや実施してきた事業を引き継ぐ形で誕生したのがARCTである。現在は20代の澤野正樹が代表を務める。

澤野は仙台の演劇界期待の若手だ。演出家として、日本演出者協会が開催する「若手演出家コンクール」で2013年の優秀賞を受賞した。演

出家として大きく飛躍するタイミングであるとも言える時期に、澤野はARCTの代表としても奔走している。そのような人物がARCTのマネジメントを引き継いでいる辺りに、鈴木が指摘する、制作者の重要性への仙台演劇界の無自覚が現れているとも言える。だが「いない」と言っても始まらない。澤野はARC>Tが築いた価値を存続させたいと願ってARCTの代表になり、そしておそらく、鈴木が抱

えてきた悩みを理解するに至っている。鈴木は発信力は効力を発揮し続けており、「アルクト」の顔としては今でも鈴木の名前が取り沙汰されがちであるが、澤野はその陰で、仙台のアーティストと社会をつなぐ方法を前線で模索している。震災後の状況下で鈴木が誕生させたARC>Tを、澤野や、彼とともに歩むメンバーがどう展開させていけるかが、仙台演劇界の未来の姿を左右するだろう。



## 澤野正樹

Masaki Sawano

ARCT代表  
短距離男道ミサイル総合演出  
仙台シアターラボ所属俳優

秋田県出身。仙台を中心に演出家、俳優として活動。作品や俳優の本質的な魅力を引き出す力に長け、劇場やアウトリーチの現場等、様々な場所で広く支持される舞台を生み出し続けている。2013年若手演出家コンクール優秀賞受賞。

**谷津** 澤野さんはARC>T発足のきっかけになった最初の「演劇人会議」(※28)には参加していたんですか？

**澤野** 最初の1日だけ参加して、その後は参加できなかったんですよ。メーリングリストには加わっていたけれど、僕自身ははじめARC>Tとは別な活動をしていて、気付いたら徐々にARC>Tのロゴマークなんかできてきて。

**谷津** 違う活動をしていたというのは、何か被災地に対しての活動をしていたんですか？

**澤野** そうです。僕らなりにですが。

**谷津** それは自分の劇団で？

**澤野** それもあるし、他にも例えば、僕は当時C.T.T.sendai(※29)という団体に所属していて、そこで5月の頭にすごく小さな公演を行ったんです。6団体が参加して、名古屋と東京からも出演者が来てくれて。お客さまはぜんぜんいらっしやらないような状況の中だったんですけど、まだ劇場が使えなかったからバレエダンスのスタジオをお借りしてやったんです。その中で短距離男道ミ

サイル(※30)でも作品を作っていました。そこでは「裸一貫で何を届けられるのか」みたいなことで作品を作っていて。

それと、震災前から京都のダンサーと東北をツアーで回るといふ企画をしていて、それを実施することになったのでその作品作りに参加しました。

**谷津** それは立場としては？

**澤野** どちらも主宰の一人としてですね。短距離男道ミサイルの作品は演出しましたが、ダンサーさんとの公演では出演もしていました。

**谷津** 澤野さんがARC>Tの活動に参加し始めたのはいつくらいなんですか？

**澤野** 2011年の11月くらいからだと思います。10月11月に2ヶ月間関西に滞在していたので、戻ってきてからです。なので、立ち上がりの時期からARC>Tの根幹にいたかというところいうことではなくて、お手伝いしたりとか、文化庁の派遣事業(※31)には参加してたけど、それも最初は主指導者じゃなくて補助者として参加してたりと

※28 「東北復興に向けての舞台人会議」。P139〜140参照。

※29 2010年4月に発足。C.T.Tとは「Contemporary Theater Training」の略で「現代演劇の訓練」の意。演技や演出の実験や自分の表現のプレゼンテーションと検証、観客との意見交換のために試演会を行っている。

※30 澤野が主宰し、総合演出を務める仙台市の劇団。

※31 P143 ※12参照

いう感じで。ARC>Tというものが分かり始めたのは、それから徐々にという感じでしたね。

**谷津** 2012年になって、文化庁の事業は淡々と続いていながらも、2年間の活動期間終了後はどうするんだ？というムードになってきたと思うんですけど、理事になるまでのことを教えていただけますか？

**澤野** たぶん2012年の12月頃だったと思うんですけど、「ARC>Tのこれからを考える会」(※32)というのがARC>Tの中心でできたんですね。そこに、遅れてだったんですけど参加しました。すごく最初はシンブルというか、単純な思いからだったんですけど、ここまで震災に対応してきた、復興に舞台芸術で寄与してきた団体が無くなってしまうのは悲しいなと思ったんです。活動の数も内容も(※33)、あれだけのことをしたのは日本にARC>Tしか無いだろうし、他の地域の動きと比べても非常に特殊だと思っ

としてはアウトリーチの重要性や可能性に気づききっかけになり、受け入れる施設にとっては新しい芸術と触れ合う機会になり、芸術が復興に寄与する可能性が生まれたんですね。仙台市のように大きい自治体の公共の視点からも評価されていたし、その活動が一切無くなってしまうかもしれないというのは非常に悲しいことだからもう少し頑張った方がいいなと思って、まずは「ARC>Tのこれからを考える会」に参加したんです。そこでいろいろ話をしていくうちに新しい体制を作るということになり、理事に立候補して。で、理事の中から投票で僕が代表に選ばれたという流れですね。

**谷津** 澤野さんはこれまで演出家になろうというところで活動してきたと思うんですが、ARC>Tの代表としてやっていくとなると、仕事量も多いし、違う頭と力を使わなきゃいけないですよ。その辺りの兼ね合いは、ご自分の中ではどうなっているんですか？

**澤野** ありがとうございます。僕その質問されたの初めてです。ARCTの内部でも、自

身の活動とARCTの活動の両立のことってほとんど話せてなくて。僕はたまに言ってるんですけど、あんまりみんなピンと来ない

のか、みんなそうだからまあいいんじゃないという感じなのかわからないんですけど。最初はここまで大変だと思っていなかったんですけど。両立できるだろうと。実際それまでの代表のみなさんはそうされてきたから、僕も

できるかなと思っただんですけど、僕の読みが甘かったというか。徐々に被災地に向けてれる視線が少なくなっていくのを今実感してるんですけど、その中で震災から立ち上がった団体を強く残していくことの難しさを非常に感じながら活動している状況ですね。もともとと僕、俳優志望で演劇に関わるようになったんですけど、性格なのか、企画したりとか、もうちょっと広い視点での活動をするのが多くて、徐々に俳優からは遠ざかり、短距離男道ミサイルで演出家としての可能性を見出したんです。そっちも全力でやっているの、演出家としての自分とARCTの代表としての自分という両輪をなんとか回せないかと

思ってやっているところなんです。それは今も調整中というか、苦しみながらですね。

**谷津** 難しさというのはどの辺りにあるんでしょう？震災があつてあの状況があつて、「何かしたい」ということで最初はまっとうていたものが、だんだんと日常に戻っていく中でARCTを存続させようというパワーがバラバラになつてきているということもあるんでしょうか？

**澤野** 仙台の演劇界は広くないので、中心的に活動している人はみんな知り合い、顔見知りのような感じなんですけど、その方たちみんながけっこう忙しい。徐々に劇場機能も回復してきて自分の団体の活動も戻ってくると、もともとの自分の活動と、ARCTをはじめとした震災後に新しくできた活動と、自分の生活との3つを抱えなきゃいけない状況になってきていて。その中でARCTの優先順位は低くなってきているのかなと感じています。文化庁の実施件数は増えてるんですけど、参加するアーティストは徐々に減っているし、ARCTの会員の人数も、新しい

※32  
ARC>Tの存続を求めるメンバーを中心に、2年間の活動期間終了後の体制について、ARC>Tの定例会とは別に話し合う場が設けられた。

※33  
ARC>Tは当時、30団体、個人131名が登録し、2年間で373件の出前活動を行い、そのほかに文化庁芸術家派遣事業、ワークショップの開催、プログラム研究なども行っていた。

システムにみなさんが慣れていないという問題もあると思うんですけど、前の登録人数に比べれば少なくなっているし。僕らも悩みながらやっています。誰に聞いても言うのは、「ARCTは残った方がいい」と。それは言うてくれるんだけど、じゃあどうやって残すかとか、残すために手を貸してくれませんかというところに関してはみんなピンとこない。「わからない」と。具体的なことがわからないということもあるし、さっき言ったようにみなさんお忙しいのかなと感じています。ただ、僕たちが派遣事業を届ける施設側と、実行委員会(※34)として僕らを支えてくれている仙台市をはじめとする公共の機関は今も変わらずARCTに期待してくれているし、今後の強い活動を望んでいる。それが現状です。

基本的には舞台人て、共有力というか、同情する力とか思いを結びつけるような能力に長けていると思うので、例えばアルバイトをしながら自分のやりたいこととして舞台活動をやるという、ある意味生産性の無い活

動から、誰かから必要とされる活動に変わるというのは非常に強いエネルギーにはなると思うんですけど。だからARCTは活動できてきたと思うし、今もそうなんだけど、それに応えうるだけのマンパワーというか、具体的な中身が不足している状況ですね。事務局の体制もそうだし会員一人一人の意識もそうだし。震災後に当たり前のように全員が共有していた思いというのが、ちょっとずつほつれてきているんだろうなと思っ

※34  
P144※13参照。  
※35  
初代代表の樋渡宏嗣は代表就任時点で50歳、2代目代表の原西忠佑は32歳であったのに対し、澤野は26歳で就任している。

澤野 そうですね。悩みながらではありますけど。僕自身、こういった立場の経験は無く、本当に探りながらだし、もしかしてARCT>Tに最初から関わっていて代表になっただけなら、もつとやれたことがたくさんあったのかもしれないけど、そうではなくゼロからという感じなんですよね、僕の中でも難しいと感じながら、でも希望になっているのは、広報力が充分じゃない中でも新しい結びつきだったりお話をいただくことが続いているので、そういう声に答えられるうちはずっと返していきたいと思っています。ちょっと思い切った転換がここから必要なんだとは、多分全員わかっているんですけど、まだその一手が見えてないという感じですかね。

谷津 新しい動きの一つが防災会議(※36)だと思っんですけど、その他にもあるんでしょうか。

澤野 代表になって1年間活動してみているんですけど、まさにおっしゃる通りで。事務局のメンバーも僕も、基本的には実演家として活動している。会員もアーティストで、基本的には僕たちと同じ立場の人たちがお金を出してARCTの活動を支えているというか参加している。そうすると、我々がアーティストだということを事務局外の人は忘れ

※36  
第3回国連世界防災会議。  
2015年3月14日から4日間、仙台市で開催された。開催に向け、市民が広く関われるよう、さまざまな切り口で関連企画が設けられ、ARCTは2014年9月11月11日、防災をテーマに舞台芸術による複数のプログラムを配した「ふりかえる」はなす、すすめるプロジェクトを企画・制作した。

ちやうし、僕らも「なんでこんなことを言われるんだろう」みたいなこともあります。事務局の作業がいろいろ困難な部分があるのは、僕は基本的にアーティストの思考回路で活動してるっていうところは大きいと思います。だから今、早めに決断しなきゃいけないと思って考えているんですが、どっちかに振ろうと思っていて。制作者集団としてのARCTなのか、アーティストの集団なのか。理事も、今のARCTが立ち上がる時にこの活動を残したいと強く思った実演家がいる状態なので。やっぱりいろんな視点があってこそ、広がりのある活動が見えてくるんだろうなとは思ってます。それは他の理事とも共有しているのですが、ここからどう踏み出していくか、僕らにとっても大きな転換がこの先近いうちにあるだろうなと思います。

**澤野** 「なんのためのアート」の時は、僕はお手伝いのスタッフとして現場にいました。個人の感想になってしまいますけど、僕たちアーティストが、町の中で一般の方と直接関わって一緒に悩むような感覚というのは、あれ以前には体感したことがなかったです。僕らもアーティストでありながら一市民なんだという自覚が芽生えたことと、一緒に考える場をメディアアーク(※39)で盛大に行えた、こういう状況を作れるんだと思えたのは希望でしたね。

アーカイブプロジェクトのアンケートに関しては、最初よくわからなかったんですけど、ボックスの中で回答しながら思ったんですけど、自分と向き合う時間ですよね、あれは。自分とARCT>T、自分と生活、自分と震災の距離をあらためて確かめながら整理をつけるということがあの時期に非常に大切だったと思うんですけど、それをやらせてもらったかなど。申し訳ないんですけど、結果をまとめて印刷したのに関しては家にはあるんですけどほとんど読んでなくて、そこにはあ

※37  
P160〜161参照

※38  
ARCTへの支援としてART-Support Tohoku-Tokyoで実施したプロジェクト。P172〜173で解説。

※39  
P142※9参照。

ARC>T\_ARCHIVEで行ったアンケートは、最終的にA0サイズのポスターにまとめられた



んまり僕は興味が湧かなかったです。自分の気持ちの整理という意味で使わせていただいたかな。今後のARCTの活動を考えるという時に、ここに広げて見たりはしたんですけど。

**谷津** それはいつ頃ですか？

**澤野** 新しい体制を作ることが決まって、まだ会員もいなくて、どう声がけしていくかという段階で、ARC>Tに関わってきたアーティストのみなさんが一体何を求めているのかということを考える一つの材料として、頼れるものではありません。

**谷津** ボックスの中で質問に答える行為が自分を振り返るきっかけになったということですが、ちょうど次のARCTに参加するかどうかという時期でしたよね。決断をするのに役に立ったんでしょうか。

**澤野** 具体的に記憶してるかというところ怪しいんですけど、冷静に考えても情熱的に考えてもARCTは必要だと、残すべきだと思えて参加できたのは、自分のこれまでを振り返れる時間があったこそだと思おうので。勢いだ

けで残そうとか、お金があるから残そうというのではなくて、現実的に考えた上で踏み出せたということでは、あの体験、アンケートはよかつたんじゃないかと思っています。

**谷津** 「これがなくなるのはまずい」というのが情熱の部分で、「だけど本当にやっていいのか」というのが冷静に考える部分で。それを確かめる一つのステップにはなったということですね。

あと、話が戻ってしまうんですけど、ARC>Tの活動によって「それまで出会わなかったような人と直接触れ合い、自分がやったことが喜ばれているのをダイレクトに感じられたことがアーティストにとつてすごく大きかった」という話を事務局にいた時に聞いていたんですけど、澤野さんご自身もそういう体験はありましたか？

**澤野** 僕の場合は、それが短距離男道ミサイルの自分の活動に直結しています。ARC>Tの活動に参加する中で、演劇の範疇みたいな、考え方みたいなものを押し広げられたような感覚が明確にあつて。劇場じゃなくたつ

て、ふだんカフェにいたり、街中を歩いている時でも演劇的な体験はありうるし、それで人生がちよつと楽しくなるみたいなことを僕たちも自分の劇団でやりたいなと思うようになったし、これまでの演劇の当たり前みたいなことに縛られてたんだなと思つて。これは、アウトリーチ活動をする中で考え方が大きく変わったことですね。アーティストの中には、自分たちの活動とアウトリーチ活動に乖離がある方もいらっしゃると思うんですよ。けど、僕を含めて今も文化庁の事業に関わっている多くのアーティストは、そこを直結させてやれている人たちだと思います。その中で自分の活動が大きく変わった人たちもいます。アウトリーチ活動で、この4年間を通じて現場で味わってきたことは自分たちの活動に直結してるし、小さなことも大きなことも、見えることも見えないことも全て引くくめて、変化は着実に起こっていると思います。

(2014年11月17日 仙台市 ARCT事務所)



## ARC>T\_ARCHIVE

ARC>T\_ARCHIVEは、ARC>Tへの支援として2013年2月から3月にかけて、Art Support Tohoku-Tokyoで実施したプロジェクトである。当時、ARC>Tは2年間と定めた活動期間の終了を前に、解散か継続かを含め次の体制を模索していたが、鈴木拓を含む事務局は百数十人におよぶメンバーの意向を正確に捉えることを困難に感じていた。そこで、記録と表現に関する活動に実績のある甲斐賢治氏を監修に招き、「現時点でのARC>T」を検証するための企画を立てた。手法としては、構成員一人一人が「なぜARC>Tを必要

としたのか/参加した結果どう思っているのか」を探るための11の質問を設定。できるだけニュートラルな本音を引き出すべく、これらの質問はその他の質問に混ぜてランダムに配置し、周囲の環境を遮断した一人きりの空間で映像を見ながら回答してもらった。こうして得られた回答をA0サイズのポスター（実際にはA1サイズ裏表に印刷され、2枚をつなげると完成する仕様になっている）にまとめ、構成員に配布。数人でこれを囲みながら、個々の思いを共有する場を持った（P169の写真）。

## ARC>T\_ARCHIVEのアンケート項目

### ▼ 質問（※が記録対象）

- 1 お風呂と布団とごはんとお酒。どれが一番好き？
  - 2 自分を動物にたとえると？
  - 3 出身地はどこ？
  - 4 ひとこと言うと、そこはどんなところですか？
  - 5 仙台、東北を代表する文化・芸術といえば？
  - 6 被災地に行きましたか？
  - 7 ARC>Tに期待したことは、どんなことでしたか？※
  - 8 それは達成されましたか？※
  - 9 尊敬している人は？
  - 10 小さい頃、なにになりかった？
  - 11 ARC>Tのいいところをひとつ教えてください。※
  - 12 ARC>Tの嫌いなところをひとつ教えてください。※
  - 13 仙台は好きですか？
  - 14 あなたにとって、社会とはどういう場所ですか？
  - 15 ARC>Tは社会に必要ですか？※
  - 16 人生最後のご飯。パンにする？お米にする？
  - 17 震災後の活動で、社会に役立つことができたと思う瞬間はありましたか？
  - 18 このインタビューは答えづらいですか？
  - 19 生まれてすぐ話すことができるとすれば、あなたなら何と言う？
  - 20 人生の目的をひとこと言うとしたら、それは何？
  - 21 今後も、ARC>Tを続けるべきだと思いますか？※
  - 22 ARC>Tが続く場合、何をすべきだと思いますか？※
  - 23 布団の中で何を考えながら眠りにつきますか？
  - 24 ずっと行きたかった場所がようやくやってきました。そこはどこ？
  - 25 そこで、何をします？
  - 26 なぜ、ARC>Tに関わろうと思ったのですか？※
  - 27 ARC>Tは、あなたの役に立ちましたか？※
  - 28 あなたは、ARC>Tの役にたちましたか？※
  - 29 いま、ARC>Tにひとこと言うとしたら？※
  - 30 いま、いちばんしたいことは何ですか？
- 最後に一言

# 7 CASE

## つながる湾プロジェクト

塩竈 — *Shiogama* —

日本三景として名高い「松島」は、仙台湾の内側に位置する「松島湾」の一部であり、松島湾は実は東松島市、松島町、利府町、塩竈市、多賀城市、七ヶ浜町の三市三町に隣接している。温暖で穏やかな松島湾は古来多くの恵みをもたらしてきた海であり、沿岸地域はその恩恵を受け、有機的に関わり合いを持ちながら歴史を重ねてきた。内湾である松島湾は、津波被災地域全体の中では比較的被災の程度は軽かったものの、甚大な被害を受けた地域もあり、他の被災地域同様、地域アイデンティティの再構築は必須の課題となっている。そうした中、「つながる湾プロジェクト」は、松島湾沿岸地域の文化的な営みを再発見しようと2013年にスタートした。

2011年	3月	東日本大震災発生 第1回「東北復興に向けての舞台人会議」開催	
	4月	第3回「東北復興に向けての舞台人会議」にて Art Revival Connection TOHOKU (ARC>T) が発足 「出前部」の活動が始まる	
	5月	「あるくと券」発行開始	
	8月	「仙台市震災復興のための芸術家派遣事業」開始	
	9月	出前活動のための勉強会を開始	
	10月	外部講師を招いたワークショップ「ウォーキングARC>T」を開始	
2012年	12月	発足後初めての主催事業 年末企画「来て、見て、あるくと。」開催	
	2012年	1月	「出前プログラム研究会 (DPK)」が始まる 宮城県「新しい公共の場づくりのためのモデル事業」 協議体に参加
	2月	文科省「復興教育」(ダンス)を 浦戸中学校で実施	
2013年	4月	「あるくと100人会議」開催	
	2013年	1月	「ARC>Tで知り合ったみんなとこれからを考える会(仮)」が 作られ、話し合いが始まる 「なんのためのアート」に事務局として参加
	4月	ARC>Tが活動を終了	
2014年	7月	ARCTが発足	
	2014年	3月	「みやぎぶんか3ねんめ会議」に事務局として参加

※他にも多数の活動を展開

高田彩にとって「つながる湾プロジェクト」とは、異質なものの出会いの連続であるようだ。彼女は震災後、それまでの関係性をもとに保育園や避難所、仮設住宅の人たちを支援していた。そこで、被災した離島から仮設住宅に移り住んだ人と知り合ったことから、活動が思わぬ方向に展開していくことになる。

高田に新たな出会いをもたらした浦戸諸島は、塩竈市の「近くて遠い」離

島だ。定期連絡船でわずかに30分程度の距離ながら、塩竈の人に聞くと「小さい頃に海水浴に行ったことがある」という答えが返ってくる程度である。しかし、この小さな有人島での活動を通して、高田はこの地域の暮らしの原点を発見してゆく。

私たちの周囲に「近くて遠い」場所は無数にある。私たちは知らず知らずのうちに慣れた人や場所のみと関わって生きているが、予期せぬ災害や外か

らやってくる来訪者が、そうした見えない境界線を越えるきっかけを作る。ことがある。

最初、予定外の来訪者に戸惑いを隠さなかった高田だが、今は異質なものと出会い、変化することを楽しんでいる。他者の視線を通して自らの存在を顧みることが、被災した故郷で生きる人びとの手がかりとなるように、この試みは多くの人を巻き込みながら続いている。



## 高田 彩

Aya Takada  
ビルド・フルーガス代表  
塩竈市杉村惇美術館統括

宮城県出身。カナダ・エミリーカ美術大学卒業後、2006年にビルドスペース（宮城県塩竈市）をオープン。北米アートの紹介やアーティストネットワーク、出張ワークショップ、イベントなどを開催。アートの価値や存在意義を高める取り組みを実践している。2014年11月より塩竈市杉村惇美術館統括。

### 谷津

2011年度はASTTの枠組みで伊保石仮設住宅のみなさんを支援するプロジェクト（※1）をしていて、浦戸諸島へ行き始めたのは2年目からでした。それから徐々に「つながる湾プロジェクト」ができていったわけですが、2012年はまだプロジェクトの形にはなっていないので、リサーチをしていた感じでしたよね。

高田 森さん（※2）から、ASTTとしては2年目は福祉的な支援ではなく、震災後の地域文化を末永く支援するような取り組みをやりたいんだと言っていたのを感じています。その頃には本土側はある程度復旧復興が進んでいた（※3）ので、被害の大きかった島の方たちが求めていることに何か寄り添えれば良いと思っています。伊保石仮設住宅には島の方が多かったです。話をしていたら、若者が集まる寒風沢島（※4）の秋祭りを復活したい。それで、お祭りを復活させることは私たちにできないけれど、復活に向けて意識を高めることだったり、津波で流されてしまった道具類を思わせ

るようなものを芸術家たちと作る企画を立てて提示させていただき、まずは文プロ（※5）のみなさんとリサーチに行きました。そして、浦戸諸島は寒風沢島だけじゃなく4島5地区あるじゃないかと言われて。他の地域でも離島でプロジェクトをしているけれど、一つだけの支援というのはいまいかないよ、と。でも当時の私にとっては、浦戸諸

島はほとんど知らない場所。寒風沢島は仮設住宅でお知り合いになった方の故郷だったので私にとって比較的近い場所になったけれども、浦戸諸島全体となるとあまりに対象が大きすぎると感じて「どうしたらいいかわかりません」と正直にお伝えしました。そうしたら、じゃあとりあえず離島でのプロジェクト経験があるアーティストに話を聞こうということになって日比野さん（※6）や五十嵐さん（※7）をご紹介いただいて、視察に入っていたんですが、その時点では私自身はこれから何が始まるのかよく分からなかったし、まだ不安の方が大きくて、戸惑いと反発の中で同行していましたね。そうした混乱

※1 アーティスト中島佑太の企画で、住民が集まるお茶飲み会をラジオ番組にして仮設住宅内に放送したり、住民たちとともに故郷を想う歌を作るプロジェクトを展開した。

※2 塩竈市を襲った津波は本土側では標高1.5m、4.8mだったのに対し、浦戸諸島では8mを超え、本土側に比べて被害が大きかった。

※3 塩竈市を襲った津波は本土側では標高1.5m、4.8mだったのに対し、浦戸諸島では8mを超え、本土側に比べて被害が大きかった。

※4 浦戸諸島は松島湾と外洋の境に位置する島嶼群であり、寒風沢島は四島ある有人島のうちのひとつ。

※5 ASTTの主催者である「東京文化発信プロジェクト室」の略称。

※6 アーティストの日比野克彦。

※7 アーティストの五十嵐靖晃。

※8 塩竈市を襲った津波は本土側では標高1.5m、4.8mだったのに対し、浦戸諸島では8mを超え、本土側に比べて被害が大きかった。

は2013年まで続いていました。それはやっぱり、自分が理解できないものに対して好奇心を持って楽しむ余裕が無いまま、責任を抱え込んでしまったから。本当はもっと柔軟になれたのかもしれないけれど、その時はできないでいましたね。

**谷津** それは、高田さん自身が被災の影響で余裕をなくしていたということなんですか？

**高田** それはありますね。ちよつと後の話になりますが、2013年の秋に三宅島に行った(※8)経験がすごく大きくて。20年に一度火山が噴火する、いわゆる被災地ですよね。千年に一度、大地震と津波がくる塩竈と、20年に一度被災地になる三宅島。こういう土地に日本人は生きてるんだっていうことを理解できたときに、被災感のようなものが拭い去られて、急に海の景色が変わって。つながる湾プロジェクトで出会ったいろんな方々が交わしてくれた言葉は「こういうことだったんだ」と理解できた。被災心は大きかったです。あんなにも引きずるものなんだと、自分が経

験したし、もしかしたらまだまだ苦しんでいる方も多いと思います。

**谷津** ここが被災地であることが特別だという感じ？

**高田** 日常が苦しくて、いろんなことを負荷に感じてしまうんです。乗り越えなきゃいけないことは知っているから向き合うし、手を差し伸べてくれることに対しては感謝の気持ちがあるから頑張るんだけど、どこかで「早く楽になりたい」と。新しいものを築こうとするというよりは、過去の何かに戻ろうという精神状態だったのかもしれないです。

**谷津** 今は非常事態であって、通常の状態に戻りたい。

**高田** 自分の精神状態が正常じゃないことを前提に生きていたというか。今もまだそうなのかもしれないし、何が正常なのかはわからないけれども、アップダウンが苦しかった。アイデアが浮かばないと、すごくネガティブなことを言い続けるとか、異常な状態になって。そうなった時に「おかしいよ」と言ってくれる仲間たちがそばにいたから、



仲間とともに避難所に支援物資を届けていた頃の高田(右)

「もしかすると私は今ハイな状態だからこう言ってるのかもしれないけれど、どう思う？」と聞いてみたり。自分が正常じゃないことを前提に生きてるといふのはありました。

**谷津** それは、いつ頃までそうだったんですか？

**高田** 三宅島に行くまでかもしれないですね

(笑)

**谷津** ちょうど1年くらい前ですね。

**高田** その後に「つながる湾フォーラム」(※9)があつて、そこでやつと感謝を伝えられた(笑)ほんとに苦しんで、新しい視点を築くにはもがき苦しむことにも気付きました。やることに對して慎重になることは変わらなけれど、その先に待っていることを信じられるようになった。それって当たり前のことじゃないですか、何をやるにも。でもそれまではそうじゃなかった。私たちはただ生きるのにもこんなに大変なのになんでこんな負荷を与えるの？みたいな。この人たち、私たちに何があつたかわかつてんの？って、攻撃的な目線で周囲を見ていたと思います。

**谷津** すごく怒ってましたよね(笑)

**高田** 暗闇でしたもん(笑)とかく島の人に迷惑をかけたくなって、日常もまっさらな方々に何かをお願いするだなんて、「私はとんでもないものをこの町に持ってきてしまった」と思つて。「私だ、私がやると思つ

※8  
つながる湾プロジェクトで「そらあみ(後述)」を展開した五十嵐靖晃がそれまでに全国で編んだ網を、「そらあみ」誕生の地である三宅島で一斉に展示する「帰島式」が2013年11月に行われ、高田もそこに参加した。

※9  
2013年度の「つながる湾プロジェクト」の締めくくりとして行ったフォーラム。P187※28参照。



2013年度の活動の集大成として開かれた「海辺の記憶をたどる旅展」

**谷津** それを見て私も「どうしよう、私、大変なことをしてしまったかもしれない」って思いました(笑)ただ、そういう風に拒否反応を示しながらも「やりません」とはずつと言わなかったじゃないですか。それはどうしてだったんですか？

**高田** 自分自身が異常事態であるということには自覚していたので、理解できないのは自分だけだと思ってたんですね。私にはわからないけれど他の人は理解してるんだろうと。それで、早く理解したい、でもできない、ついで。でも、どこかでは可能性を感じてたんでしょうね。何か得られるんじゃないかと。自分自身がもともとアートを信じていたからだと思いますんですけど、やるやらないの選択肢ではなかったですね。ただ、どうしたらいいか。How? がわかりませんでした。

**谷津** 具体的なプログラムとしては2012年5月の「のりフェス」(※10)で初めてタネフネ(※11)を運行したわけですが、あの時はどう思っていたんですか？

**高田** 基本的に「のりフェス」は私が企画し

たものではなかったので難しい立ち位置でしたが、タネフネを受け入れるには、いろんな人が島に来る、島の扉が外に開くタイミングの方が良いと思ったんですね。タネフネのために人を集めるのではなく、島が外から来る人を歓迎している時に一緒に島を盛り上げる方がいいと思って。ましてや、のりフェスの方からアートの何かしてほしいと言われていたので。あれが結果的に良かったかどうかは私もわからないですけど、あの時タネフネと出会った人が今一緒に「つながる湾プロジェクト」をやるメンバーになっているので。町のイベントに関係なくタネフネだけの企画をやっていたら、彼らと出会ったり出会わせたりすることはできなかったと思います。アートって予定調和じゃ意味が無いので、そういう意味ではいいタイミングだったように思います。ただ、私がタネフネについてきちんと理解できていなかったのも、みんなにもうまく共有できなくてすごく混乱してはいました。

**谷津** で、それでタネフネは帰ると思っていた

たら、ずっといるらしいということに気づいた(笑)

**高田** そうです(笑)

**谷津** のりフェスの前に、そのことについてちゃんと話をするタイミングが無かったんですね。日比野さんたちが浦戸諸島に視察に来たけど、まだ何をやるのか地元側で具体的には話せていない状態で「六本木からタネフネを移動しなきゃいけない(※12)から宮城に持って行きたいんだけど」という話が先に来た。

**高田** で、船を置く場所を確保してって言われて。津川さん(※13)が提案した場所が長く置ける場所じゃなくて、うちは父の会社の駐車場があったから、「野ざらしになるけど一応ありますよ」と。

**谷津** 今だから言えるんですけど、高田さんがずっとそれまで「わけがわからない」と言っていたのを知っていたので、高田さんが船を「置けます」と言った時に「いいのかな？」と思っていたんです。私は、タネフネが来るということはしばらくここで活動する

ことになるだろうと思っていたので。だから実はあの時驚いたんですね。「え、いいの？」って。そしたら、高田さんののりフェスまでの間だけのつもりだったということが、後から分かって。

**高田** とにかくタネフネを島で動かしたいんだらうから、のりフェスで実行できればいいんだと思っていました(笑)

**谷津** どうやって気付いたんですか？ のりフェスで終わりじゃないんだって。

**高田** 覚えてないです、とにかく混乱してました(笑)

**谷津** のりフェスが5月26日で、その夜に日比野さんたちも含めてミーティングをして、6月にはもう喜多さん(※14)が塩竈に来てるんですね。

**高田** 日比野さんに「とにかくレジデンスでいる場所を見つけてくれればいいから」と言われて。「それさえやってくれば、あとは喜多がやるからもう心配しないで」と。だから必死で五十嵐邸(※15)を借りるように整えました。それで少し気が楽になって。自分

※10 浦戸諸島の復興支援を目的に市民有志により開催された「塩竈浦戸のりフェステイバル」。

※11 アーティストの日比野克彦が監修・デザインして造船された5人乗りの自走船。正式な表記は「TANEFUNE」。海からの視点」を伝える航海を2012年に日本海で開始し、松島湾を次の航海地とするべく塩竈へやってきた。

※12 TANEFUNEは2013年3月に行われた「六本木アートナイト」で展示され、その後の移動先を探していた。

※13 つながる湾プロジェクトのメンバー、津川登昭。

※14 後につながる湾プロジェクトのメンバーとなる喜多直人。2012年のTANEFUNEの航海に同行しており、2013年のつながる湾プロジェクトにおけるTANEFUNEの活動では船長を務めた。写真家でもある。

※15 TANEFUNEの運営チームが塩竈に滞在する間、宿泊のために借用した民家の愛称。かつての住人の姓が「五十嵐」であったことからこう呼ばれるようになった。

がどうかしようと思うと、船のことも港のこともすべてがわからないけれど、わかっている人がいてくれるということ。

**谷津** タネフネはタネフネで動き始めて、地元側はまだそれを自分たちのこととうまく結びつけられてはいなかったけれど、「つながる湾」の元になった津川さんのコンセプト（※16）も、もうその頃から話には出ていましてよ。

**高田** タネフネの話をする中で「海からの視点」とか「湾」というキーワードが出て来たので、そういえば津川さんは、すでに湾をテーマに地域の人と活動していると思って。それで津川さんに入ってもらって、コンセプトになる部分を組み立ててもらったんですね。

**谷津** で、タネフネが塩竈で動ける体制ができて、津川さんが藻塩焼神事（※17）の取材にタネフネで行ったり、ちよつとずつ、集まってきたメンバーがタネフネをどう使うかを考え始めた。

**高田** 私は喜多さんに、市役所の方を紹介したり、ベイウエーブやマリネット（※18）を



「TANEFUNEカフェ」。島の住民や汽船で訪れる人との対話の場が海辺に出現した

紹介したり、とにかく人を紹介していました。タネフネについてはよくわからないけれど、紹介すれば喜多さんがあとは全部展開してくだらうと。

**谷津** ただ、その間も高田さんは相当試行錯誤してましたよね。

**高田** 私は関わってはいるけれどもイニシア

チブをとるような立場ではない、でも責任があるから「理解したい」と思って試行錯誤していた気がします。自分がある意味がわからなくて、ただタネフネの受け皿が無いから受けているだけっていう状況が苦しくて。ただ、塩竈の人が喜多さんと出会うことでいろんな可能性が生まれるのはいいことだとは思っていました。

**谷津** 喜多さんがやっていることはどういう風に映っていたんですか？

**高田** 私は日比野さんの今までの現場を知らないのですが、喜多さんがやっているのが理想的な動きなのかも判断できず、よくわからなかったです。もともとやろうとしていたことや、育んできた言語や定義が違うと感じたので、どう対話していいかわからなかったし。ただ喜多さんは、もがきながらも誰よりも島に足を運んで、あの時の島の方々の声を聞いていたので、それを私たちがうまく共有できずに辛かったらうと思います。

**谷津** そうしているうちに7月くらいに一度日比野さんが来て、「TANEFUNEカ

フェ」（※19）の企画とスケジュールを決めたんですよ。

**高田** で、たぶんタネフネはタネフネチームでやってくれるだろうと。それでだんだんと、私たちは「タネフネってなんなんだ」っていう議論から離れて、自分たちなりの勉強会（※20）を始めていきました。

**谷津** 勉強会が一番最初にやったのが「三陸汽船」（※21）の話で、それが面白くてすごく盛り上がったんですよ。

**高田** 講師の大和田さん（※22）の興味関心の引き出し方が素晴らしくて、あれで、地域の文脈を掘り下げること「面白い」というスイッチが入って。もってこの土地のことについていろんな話を聴きたい、知りたいって思うようになりました。

**谷津** で、7月下旬から「TANEFUNEカフェ」が始まって、プロジェクトが具体的に動いていきました。

**高田** その頃にはタネフネに関してはもう見守る感じになっていました。8月に入って「そらあみ」（※23）がスタートしたので、「そ

※16

つながる湾プロジェクトは「松島湾に面する塩竈市を含む三市三町はひとつながりの地域である」というコンセプトのもとに活動している。これは、津川が東日本大震災後の松島湾の洋上から陸側を見た経験から発想されたものだった。

※17

塩竈市の御釜神社に伝わる神事で、古代の製塩法を伝えていると言われる。この神事に用いる海藻と海水を採取する様子を津川が取材するにあたり、TANEFUNEを用いた。

※18

ベイウエーブは塩竈のコミュニティFM放送局。マリネットは同ケーブルテレビ局。

※19

浦戸諸島の4島5地区にTANEFUNEが日替わりで滞在し、滞在中「カフェ」と称して冷茶を振る舞いながら訪れる人と交流する企画。

※20

塩竈を中心とした周辺地域の人びとで地域を知るための勉強会を2013年6月から開始した。正確な名称は「Teamwan勉強会」。

※21

明治期に就航していた塩竈港と若手島の宮古港を結ぶ汽船航路。

※22

NPOみなとしほがまの大和田庄治氏。

※23

アーティストの五十嵐靖晃によるアートプロジェクト。海辺の地域の人と、その地域をイメージする色に染めた糸で漁網を編み、出来上がった網を空に向かって展示する。2013年のつながる湾プロジェクトでは「TANEFUNEカフェ」の一つのメニューとして「そらあみ」のワークショップを行った。

らあみ」を通してタネフネにも関わったり。  
**谷津** 五十嵐さんが塩竈に入ったのが8月10日ですよね。「そらあみ」が始まって、彩さんがまたちよつと変わりましたよね。

**高田** 「そらあみ」は伝わりやすかったですね。海辺で網を編むというシンプルな所作が時空を越えた体感を与えてくれました。「何千年も昔の人も同じように編んでいたんだな」って純粹に感じられたり、それを隣の人に話すとき共感できたり、最後に見た網越しの風景も美しく、理解しやすかった。抽象的ではあるんだけど、一つ一つが感性に訴えかけるものがあった。

**谷津** そこから高田さんが、自分が心から勧められるものということであるんなりに声をかけるようになったな、という風に見えました。

**高田** 心を揺さぶられたものは伝えたいと思えるし、そういうものに出会えたことで救われたのはありましたね。

**谷津** で、そのあと三宅島に行つて。

**高田** それまでずっと、どこに行くのかわか

らずに漂って、でもその先に面白い風景が広がっていることに三宅島で気付いた。計画された航路じゃなかったのがよかつたって気づけたから、その後も漂うことができるようになりました。

**谷津** リーディングの企画(※24)が始まったもその頃ですね。

**高田** 浦戸の小中学校では毎年全員で演劇をやるんですけど、長年その支援をしている10-BOXの八巻さん(※25)が、その台本を題材に朗読をするのはいかがかと提案してくれて。それで興味を持って、リサーチし始めました。

**谷津** 高田さんとしては「つながる湾」の枠組みでは初めて、自分が完全にイニシアチブをとる企画をやることになったわけですが、島を題材にしたプロジェクトを実際に自分の企画でやってみてどうでしたか？

**高田** 島の物語を島で伝えることができたのはよかったです。寒風沢島出身の漂流民の物語がとても興味深くて、私自身が「知る」欲びを感じながら取り組むことができて。どう

して今まで興味を持てなかつたんだろうと思いました。純粹にプロセスが重要だったような気がして。場の作り方も、ストーリーテラーになってくれた笹吾くん(※26)とのやり取りにも、リーディングをした後に土見くんと加藤くん(※27)の案内でお客様に実際に島を見てもらったことにも、すごく意味が

あった。細かい課題はあったかもしれないけれど、私が浦戸諸島と関係性を作るのにはいきつかけだつたと思います。島自体を自分のルーツの一部だと思えたのはすごく嬉しかったですね。

**谷津** リーディングは「つながる湾フォーラム」(※28)の関連企画として翌日に実施しました。あのフォーラム自体はタネフネ側が伝えたいことに沿って組み立てたようなところがあったと思うんですけど、でもあれをやつたことで、今仲間になつている人たちがスタッフとして参加してくれましたよね。

**高田** ああいう場を、それまで接点のなかつた人たちと作れたことに価値がありました。あの形がベストだったとは思わないけれども、機会を設けてもらえたことが重要だった。今は当たり前な場を共有できるようになりましたよね。それは「つながる湾」があつたからこそです。喜多さんが長期間滞在してくれて、地域の人びとと関係性を結んでくれたから、普段はアートの現場を敬遠してしまふような人も「わかんないけど、まあ喜多く



「そらあみ」の展示風景。2013年は養殖用の種牡蠣を育てる牡蠣棚の上に展示した

※24 高田が企画した「語り継ぎのためのリーディング」。江戸時代に漂流した浦戸諸島出身の船乗りたちがロシアへの滞在を経て帰郷した実話を題材に、朗読、作曲、調理などさまざまな手法を用いたワークショップで参加者自身がストーリーテラーとなる体験を創出している。

※25 P56よりインタビュー掲載の八巻寿文。

※26 2013年12月に行つた「語り継ぎのリーディング」でストーリーテラーを務めた少年。題材とした漂流民の物語を自分なりに読み込んで作つた「語り継ぎの台本」を暗誦した。当時浦戸第二小学校6年生。

※27 土見大介と加藤信助。浦戸諸島の寒風沢島に祖父母家を持ち、浦戸の地域づくりに取り組んでいる青年。つながる湾プロジェクトの勉強会に参加していた。

※28 2013年につながる湾プロジェクトが経験したことを地域の人びとに共有する目的で12月に開催した活動報告とパネルディスカッションを行った。

んが言うから」みたいな感じで参加してくれる。私たちはアートを理解してもらいたいわけではなくて対話の場を作りたいわけで、ふだんアートラバーじゃない人たちが集まって、考える場を共有できる関係がこの土地で作れたのはすごく大きい。もともと土地の歴史に関心のある人たちはその人たちが集っているし、私たちもふだんから集まっているけれどどうしても芸術文化関係者が多くなくなってしまっているので、そのどちらでもない人たちが関われる場は、「つながる湾」がなければ、私では作れなかったと思います。そこに私自身も巻き込んでもらえて得たものがあつたから、2014年もやろうと思えた。自分じゃできないことだから。予期せぬ出会いだったり、いいハプニングが起こるのがアートプロジェクトのいいところなんだよなと、今は思える。

**谷津** 今年(2014年度)に関しては、私が戸惑うくらいに高田さんから「これをやる」「これをやる」っていうのが出て来ましたよね(笑)

**高田** スイッチが入ったので、「こういう文

の中で伝えたいものとか見せたいものが生まれてきたような状況があつて、さらにそれと同時に、チームを運営していくということがもう1本の柱として出て来た。

**高田** 「こういうことを持続可能にするための体制作りが重要でしょ?」と言っていたので、その通りだなと。それから、関わる人たちの興味関心や問題意識がどこにあるのかを確認しながら進めるような気をつけるようになりました。

**谷津** チーム作りをテーマに今年ここまでやって来てみてどうですか?

**高田** 難しいです。普段は役割分担が明確な仲間たちと活動しているんですが、「つながる湾」では、アートや地域の文脈というものにピンと来なかった人たちとどれだけ一緒に場を作っていけるかが重要なので。地域文化に興味を持ってもらうところから始めて、それぞれの人が得意なことや役割を見つけてもらって、場作りをしながら志を共有していくというステップが必要になるので、期間と予算がある中でやるとなるとすごく負荷も与え



「語り継ぎのためのリーディング」。島に伝わる物語を表現者それぞれの方法で伝える

脈を伝えるならこんなこともできる!」って欲張り過ぎた(笑)したら「そうじゃないよ」と言われて「えー?!」って(笑)

**谷津** 「そうじゃないよ」ということではないんですけど、「盛りだくさんすぎない?」というツツコミは文プロからありましたよね。初年度は受け身だったのが、今年高田さん

るし、その中でモチベーションと意識を持続させるのは労力がかかります。私は意義があるとあつてやっているとあつて、まだそこまで問題意識を共有できていない人も多いし、私自身が「つながる湾」を通して視野を広げたり育まれてる立場でもあるので、模索しながらやっているとあつて、

**谷津** 今まで接点はなかったけれど、町に対しての思いとか、動こうという意志がある人たちに、違う視点を知ってもらうということですよ。

**高田** いろんな見方、考え方、アプローチの仕方に出会える場が「つながる湾プロジェクト」だから。このプロジェクトは、アーティストだったり勉強会の講師だったり、人の出入り、考え方の出入りがあつて、豊かな視点があつて、それらを共有できる場所になり得るのが面白いと思つていて、そういう場を作るのに予算を伝えるのはすごく贅沢だと思つています。人やモノやコトが循環して、考えや感性の共有ができる場所。何かはつきりした一つの概念を掘り下げるのであればそれを

伝える一人がいれば充分だけど、「つながる湾」ができることはそれだけではないから。

**谷津** みんな引つかかるものが違いますからね。そういう意味では、つながる湾プロジェクトではある程度バリエーションを用意できているんじゃないかと思います。

**高田** フックが多い方が豊かな取り組みにもなるし、誰か一人の思想についていくわけではなく、アートの柔軟性、寛容性が発揮できると思います。参加してくれる人個人については、「つながる湾プロジェクトとは何か」ということを理解する必要は無いと私は思っています、何より、参加した場で何かを得て刺激され、新しい視点が一つ加わる経験になれば成功だと思うんです。全体として何をやっているのかについてもある程度は理解してもらわないともったいないなとは思いますが、理解してもらえようように工夫はしますが、このプロジェクトが何なのかを理解させることが目的になってはいけないと思うから。

**谷津** どういう事業かということを理解してもらわないといけないけど、何をやろうと思

ているかのイメージが伝わるといいですよ。

**高田** 上手く伝えることができなくて「どうして伝わらないのー？」つてもどかしいこともありますね。私も、自分が「ここは面白い」と思った部分に取り組んでいるだけで、もしかすると本当にまだ形の無いものなのかもしれない、私がわかっていることというわけでもないんですけど。

**谷津** けっこう人ってみんな、気付かずに自分の狭い視野の中で生きていて、「こうあるべき」みたいな考えを持っているから、それと違うものに出会うと戸惑うんじゃないか。

**高田** まだフックが足りないのかもしれないですよ。それぞれ地域への強い思いがあるからこそ、既存の関わり方を越えるのが難しくなっているんだけど、あまりとられすぎずに自分の関心があることとリンクさせていってもらえるといいんですが。

**谷津** コアなところだけはしっかりしていて、周りは曖昧なんだけど共有してるものがある。そこにそれぞれが好きに出入りしてるようなイメージですよ。海には漁船だったり

ヨットだったりいろんな船が出入りしていて、やっていることやポリシーが違ったとしても海と接しているということが大きな共通事項で。陸だと海に比べたらその関係は見えづらいんだけど、本当は同じ地域の文脈の中で共通するものを持っているはずなんじゃないかと思います。

**高田** 「つながる湾」はアートのためにやっているわけではなくて、地域を掘り下げるのが得意な人と呼んできているだけなんですよね。アート作品を創るためにやるのとは語る内容がぜんぜん違ってくる。

**谷津** それを震災後にやっているということについてはどうですか？山元町では、被災とその後の復興に向けた動きでどんどん変わっていく町の景色を、町の人たちが思い思いに撮影するというプロジェクトをやったんです。参加してくれていた人に先日インタビューをしたら、震災の体験があまりにも強烈で、それ以前のことを振り返れずに震災後のことだけを見ていたんだけど、本当はそうじゃなかった、建物が流されても、それ以前

に築かれてきた町の文脈は流されていないか、たことに気づくことができたって言っていたんです。（※29）塩竈の場合も、島を除けば比較的被害は軽かったかもしれないですが、震災がある一つの起点にはなっているはずで。震災後にここでどうやって生きて行くかとなった時に、この土地に過去に確実にあったものを振り返ることが必要だっていうのは、やっぱりあるんじゃないかと思うんですけど。

**高田** 「記録しないと失われる」という意識はすごく強いんです。震災後、建物の取り壊しも進んでいるし、とにかくまちの記憶だった記録だったり歴史だったり、いろいろなものが平気で更地になっていく感じはあるので、震災直後からずっと「残さなきゃ」っていう異様な焦りの中で生きてますね。それは地域のことも家族のこともなんですけど、残したい気持ちは、震災以降に強くなってるのかもしれないです。

**谷津** 当たり前にあるように思っていたものが、失われてしまうこともあるんだということを実感させられましたよね。

※29  
CASE5の阿部結悟のインタ  
ビュー参照。

**高田** だからもう、失われてしまう前提で生きてるといふか。自分も一つの過程の中にか生きていなくて、残された時間がこれくらいしかないからこれをしようとか、以前とは違う時間軸でものを見るようになりました。

**谷津** あらためて、これから先、つながる湾プロジェクトにどういふビジョンを持っていますか？

**高田** 単純に、こういうことを一緒に考えていける人が増えればいいと思ってます。そのためにこの機会があると思ってるし、自分が関わらなくても当たり前にこういうことが起こっていてほしいと思うから。海からの視点、湾のつながりというのがテーマではあるけれど、何よりも地域のことを語り合える、掘り下げることができる、経済発展のためだけではない人や価値観の循環を作れるということが大事だと思うので。だから、私自身がこのプロジェクトで何かをしたいというのははやなくて、むしろ次はどんな風に展開していくのかな、次はどんな人と関われるのかなって楽しみにしているような感じですよ。

ね。私の中の「つながる湾プロジェクト」はあるけれども、必ずしもそれでみんなを引っ張っているというわけではなくて、でも指揮は取らなきゃいけないから、「これありますよあれありますよ」って言ってみたりはするんですけど、いまだにちよっと距離感が掴めていない。でもすごく可能性があるというか、自分が知らないところに連れて行ってくれるプロジェクトなのですごく楽しみではあるし、自分だけでは考えないことを考えるきっかけを与えてくれるプロジェクトですね。

**谷津** 将来的には自分が運営せずに誰かが運営していて、でもいつでもそこに参加できる状態になりたい？

**高田** そうなるのが理想です。ここで試行錯誤することで私たちは育まれていくけれど、私たち以外の誰かが加わって試行錯誤して、そこから新たな形に展開していくことに、5年10年続ける意味があると思います。「いつでもお手伝いするよ!」と言ってくれる人がいても、主体となる人がずっと同じだったらもったいない気がして。それから、私が

アートの文脈で「つながる湾プロジェクト」をやっているとされている状況を早く脱したいですね。

**谷津** ビルド(※30)の活動と同一視されてしまいがちではありませんよね。

**高田** だから、私ではない人たちがつながる湾プロジェクトの運営チームとして見えてく



「チームwan勉強会」。毎回10数人が集まり、知られざる地域の姿に触れる

るようになるかと思っただけで、アートっていうジャンルを超えているような面白いことが起こると思うから。

**谷津** 私はそういう点で、津川さんをはじめ、いわゆるアーティストではないメンバーがいるのは大きいと思っています。津川さんも、決してもととの自分のやり方を変えているわけではなく(※31)、高田さんも変えているわけではない。多分これがなかったら変わらなかったんだけど、湾という一つのキーワードを立てたことで一緒にやれていることがすごく意義深いと思うんですね。ツーリズムの企画(※32)では、「アートは俺わからないから」と言っているようなメンバーが本番に向けてのシミュレーションツアーで「これはいい!」と言ってくれたことで「この企画はいける!」って思えた。

**高田** あの企画はみんなの力を活かしましたよね。当日運営に参加できなくても、自分の得意なところを活かして広報に徹してくれた人がいたり。みんなの笑顔を見て「一人一人が能力を活かすところなんだ!」とあらた

※30 高田が2006年から運営するビルド・フルーガス。活動内容は高田のプロフィールを参照。

※31 津川登昭は2013年3月に一般社団法人チガノウラカセコミュニティを設立。地域を自慢する商品や体験プログラムの開発に取り組んでいる。

※32 ツーリズムの企画「つながる湾プロジェクト」で2014年10月に開催した「湾の記憶ツーリズム」。チームwan勉強会で学んだ題材を用い、勉強会の参加者らで企画・運営を行った。

2011年	3月	東日本大震災発生
2012年	1月～2月	高田彩が中島佑太らとともに伊保石仮設住宅での支援活動を行う
	8月	ASTT運営メンバーとともに浦戸諸島を視察
	12月	日比野克彦、五十嵐靖晃らとともに浦戸諸島を視察
2013年	5月	「塩竈浦戸のリフェスティバル」でTANeFUNe(タネフネ)を運航する
	6月～	後にTANeFUNe船長となる喜多直人が塩竈に滞在開始。TANeFUNeを町のイベント等で運航 「チームwan勉強会」開始
	7月	プロジェクト名が「つながる湾プロジェクト」に決まる
	8月	五十嵐靖晃が塩竈に滞在開始。 「TANeFUNeカフェ」および「そらあみ」ワークショップを実施
	9月	「そらあみ」を浦戸諸島で展示
	11月	「そらあみ 一三宅島」帰島式に高田彩が参加
	12月	「つながる湾フォーラム」開催。 「語り継ぎのためのリーディング」ワークショップが始まる
	2014年	7月～9月
8月～9月		「そらあみ 一松島」ワークショップおよび展示実施
10月		体験型島歩き「湾の記憶ツーリズム」を実施
12月		「浦戸食堂 まりこさんのカレーとその記憶」を実施 「海辺の記憶をたどる旅展(展示およびトーク)」を開催

めて思いました。お客さんもすごく感度が高くて。観客になる場合でも、受け身で舞台を見るんじゃないくて能動的に場作りに参加してもらえると全部うまくいくんですね。

**谷津** それはやっぱり、高田さんが以前から取り組んでいることではあるんですね。

**高田** とにかく私は、一人一人の個性や能力が活かされる社会になればいいと思っていて、普段もそのウエイクアップコールにアードで挑戦しているだけなので。それはギャラリイに来てくれるお客さんに対してもそうだし、「つながる湾」に関わる人たちに対してもそうで、出会うアーティストだったり新しい考え方だったり、手法はなんでもいいんですけど、人が備えている力を引き出すことで、地域の可能性を開いていきたいと思っています。

(2014年10月31日 塩竈市 ビルドスペース)

## おわりに

A S T T の現場に通いながら、未知のものだった「アートプロジェクト」の概念に私は少しずつ触れていった。それは基本的に、美術館やギャラリーや劇場「ではない」場所で行われる。アーティストと市民が共同制作をするようなものも多いが、ある時には、ただ対話の場を持つ、ということでもいいらしい。では「アート」の定義って何だ？ 最初の頃は、それが素直な思いだった。4年が経過した今でも、その問いにきちんと答えられるような知識と経験を持ち合わせてはいないのだが、今回のインタビューを通して振り返ってみると、この事業で出会った人たちは立場やアプローチ方法が違っていても皆「自分で考え、自分で動く」生きたための触媒として「アート」を扱っていたように思う。

私の実家は東京にある。震災当時乳児を抱えていた私は、ライフラインの麻痺した現地を離れてガソリンの残っていたハイブリッド車を13時間走らせ、2日後の3月13日には実家に避難した。しかし私はそこで、自分が後にしてきた被災地と東京とのあまりのギャップに苦しむことになった。両親や親しい友人とさえ感覚を共有することはままならず、快適な実家にいながら、私は孤独とやりきれなさを抱え続けた。4月の頭に自宅

に戻ってから、私の故郷である東京の人びとの反応と、今いる場所の現実とのギャップに憤る日々が続いた。あれだけの被害状況が具体的な映像として流れても、そこに起きる事態を正確に想像するのは難しいのだ。震災は、私に人間の想像力の限界を思い知らせた。

この本の編集作業をしていた2015年1月から2月は、政治や宗教の対立をめぐる話題や事件がメディアを賑わせた。インターネット上ではさまざまな主張が飛び交い、同じ画面の中で決して交わることのない議論が展開された。それらを眺めながら、私は震災後に何度か見た光景を思い出していた。何か危機的な状況、自分にとって不利益と思われる状況が訪れたり、それをイメージした時、人びとは分断されていく。まるで、人びとの間に次々と見えない境界線が引かれていくようだ。

「見えない境界線を越える」。

A S T T の仕事に関わってくる中で、何度もこの言葉に出会った。被災地とそれ以外の地域の話だけではなく、「被災地」の中にも立場や状況によって無数の境界線が引かれた。また、震災をきっかけに私たちは、もともと世界に引かれていた「見えない境界線」に気づくことにもなった。良いアートプロジェクトは、この「見えない境界線」を

越える回路を開くのだという。

自分とは異なると感じる他者と向き合うのは面倒で、時には嫌な思いもする。だが、他者との違いを意識することは自分を知らぬことにつながり、そのことが関係性をつなぎ直し、境界を曖昧にする。その時、それまで見えなかったものが見えてくる。そういった場面に、この4年間を通して何度か出会った。放っておけば固定されてしまう境界線に働きかけようとする時、媒介として「アート」が作用することが、確かにあるようだ。

東日本大震災とそれによる津波は多くのものを奪い去ったが、その跡に再び築き上げられる街は、知らない誰かが作ったものではなく、そこに暮らす人びとの手の跡が積み重なったものであってほしい。街は「人」がつくる。一人の働きかけが有機的につながり合うことによって街の歴史ができていく。その「一人」の心を耕すために、放っておけば眠っているが、何かのきっかけがあれば通じる「回路」を開く試みがアートプロジェクトなのではないかと、今は思っている。

海外で凄惨な事件が起き、SNSサイトが分断されていく人びとの様子を映し出していたとき、女川町の知人がこう投稿した。

「石巻線が家の前の線路を走っていった！4年ぶり！めっちゃくちゃ感動した。」

境界線の向こうと向き合いながら何かを創り上げていくには、「正しさ」を追い求めて気負うより、生活を慈しみながら楽しんで考えていく態度がきつと必要だ。何かを失った人びとが「日常」をもう一度獲得し、その先の未来に向かって歩んで行けるよう、私たちが行ったことが作用していたら嬉しいし、きつといくらかは、役に立てるのではないかと思っている。

試みは、これからも続く。

2015年3月

谷津智里

謝辞 この本を制作するに辺り、多くの方に多大なご協力をいただきました。この場を借りて深く感謝申し上げます。また、本文中、インタビュイーの皆さんの敬称を省略させていただきます。ここにお断り申し上げます。

本書には、東日本大震災を経験し、何らかの文化的なアプローチとともに、震災後の現地状況と向き合った9人のことが綴られている。とはいえ、決して震災後の文化活動を記録した「客観的」で「中立的」なものではない。本書を綴った谷津氏とインタビュイーの関係性が色濃く反映された対話の記録であり、東京都による芸術文化を活用した被災地支援事業(Art Support Tohoku-Tokyo、以下ASTT)の成果を振り返るための記録でもある。

ASTTは、東京都と東京文化発信プロジェクト室(公益財団法人東京都歴史文化財団)が共催し、岩手県、宮城県、福島県の3県を対象に、現

地の団体や人々と共に事業を実施している。本書で登場した人々は、ASTTの1年から、2年目の事業で出会った人々だ。谷津氏は、ASTTの宮城県でのコーディネーターとして、東京側と宮城県側に立つ役割を務めている。現場の経験や感情を共にした谷津氏との対話だからこそ、本書には淡々とした語りだけではなく、ときに生々しい感情すらも記録されている。

ところで、私は、本書に何度も登場する「文プロ」こと、東京文化発信プロジェクト室の東京アートポイント計画というセクションのスタッフをしている。その業務のひとつとして、東京アートポイント計画ディレクターの森(本書159頁参照)

とASTTを担当している。本書には、この私たち、「文プロ」との関係も見え隠れしていることだろう。そこで最後に、本書の伏線、もしくは後景として、私たちのこと、ASTTのことを少し記しておきたい。

### 地域の多様な文化環境の復興を目指して

2011年7月1日にASTTは始まった。実施の根拠は、東日本大震災の発生を受けて、6月に東京都が作成した「東京緊急対策2011」にある。東京都が有する「人的・財政的・技術的資源」を活用し、「被災者・被災地が自ら踏み出す復旧・復興を後押し」することを指す本対策で、芸術文化の分野は「被災者・被災地へのきめ細やかな生活復旧への支援」の一部と位置付けられた(東京都報道発表「2011年5月」「東京緊急対策2011について」東京都ウェブサイトより)。

これを受けて、東京都の文化政策の一環として、都内のアートNPO等と共催で事業を進めてい

た「東京アートポイント計画」の手法が本事業に用いられることになった。既存のアートプログラムを被災地に持ち込むのではなく、現場のニーズを考慮し、現地のパートナーと共にプロジェクトを展開、もしくは、新たな活動を立ち上げる。都内事業の知見やノウハウを提供し、持続性の高い事業運営の体制づくりを支援する。後者は時を追うごとに重要性を増した。

私は2011年6月1日付で東京アートポイント計画に着任し、本事業の担当となった。宮城への初出張は同年6月26日。美術家のタノタイガ氏が自らのボランティア活動を「タノンティア」と称して展開していた活動のバスツアーに参加した。翌日、再び石巻を巡る。このとき、CASE4ユイノハマプロジェクトの荻浜小学校も訪問している。その翌日から2日間は、えずこホールの「藤浩志とカンがえるワークショップ」に参加。女川町から、南三陸町までを巡り、CASE1に登場する女川町の岡氏を始め、地域の復興への力強い意思と行動をもつ人々を目の

当たりにする。

現地を訪れ、状況を知り、人に会う。把握した現状に応じたプログラムを実施する。現地のパートナーと連携し、その地域に必要な文化的な環境づくりの支援を目指す。そうすることは私たちが都内で培った手法の強みを生かし、「押しつけ」ではない外部支援を行うためだった。しかし、その過程では、CASE6の高田氏の戸惑いに代表されるジレンマと向き合うことになる。

「私たちはただ生きるのにもこんなに大変なのになんでこんな負荷を与えるの？」(本書179頁)

最善を尽くした方法だとしても、そもそも「支援」自体が負担なのではないか。これはASTTに限らず、全ての「支援側」が持つジレンマであり、抱えるべき倫理的な視点なのかもしれない。

本書には疑念、迷いなど、ゆらぎを含んだことばも多く収録されている。いうまでもなく、それ

はこれまでの実践の意義を無化するものではない。その成否は、いまだ判断の途上にあるものだ。重要なことは、現時点の言葉を他者と共有可能なかたちで残し、後世も含めた他者に評価を委ねることかもしれない。本書を「もの」として残すことの意義はここにある。

#### 「震災後」から「震災前」に向けて

2011年9月9日。仙台市内で初年度の宮城県でのプログラムを決定する会議を開催した。

このとき、CASE3で登場する八巻氏が雄勝法印神楽(以下、法印神楽)の支援の意義を語ったことが強く印象に残っている。後に、私たちも東北の伝統芸能への支援の重要性を理解するが、当時はそれを支援の射程に入れることを明確には意識せずにいた。八巻氏の仔細な状況把握と切迫かつ熱のこもったことばはそれを理解させるに十分なものだった。同年10月2日の法印神楽の組立式舞台の仮組みの際に、舞台上で嬉しそうに舞う神楽衆の姿は忘れられないものとなった。そし

て、2014年11月22日に「忘れないための被災地キャラバン」で法印神楽を再び訪ねた。その際に、当時制作した舞台がもたらした大きな波及効果について想いのこもった説明と多大な感謝の言葉をいただいた。

この一連の出来事は私たちを勇気づけ、震災直後の支援活動のあり方にも示唆を与えてくれた。つまり、当たり前のごとくのようにだが、初期期の成果は事後的に分かるということだ。初期期はこれも混乱し、完全な状況把握は難しい。しかし、それを前提として対象の幅は出来るかぎり広げたほうがいい。その際、現場に近い八巻氏のようなネットワークの結点となる人と出会うことが、支援活動の多様性に直結する。震災後に随所で語られるネットワークの重要性はここにあるだろう。

本書の語りには、震災後の「4年」という時間が含まれている。この震災後の時間を考えるとき、2013年に宮城県で実施したフォーラム「なんのためのアート」登壇者の港千尋が放った以下の

ことばを思い出す。

「我々も、今を震災後と言っているが、もしかしたら、震災中、震災前なのかもしれない」(「なんのためのアート」記録冊子、2013年、18頁)

震災関連死は3000人を超え、福島県では直接的な被害で亡くなった方の数を超えた(復興庁/平成26年9月30日現在)。震災はまだ続いている。そして、この4年は、次の災害の何年か前なのかもしれない。そうでなくとも日本各地では、日々、さまざまな自然災害が起こり続けている。東北での経験を広く共有し、誰もが「自分事」としていくこと。その重要性は言うに事欠かないだろう。本書が、その議論のひとつの礎となることを期待したい。

## 2012年度

### 女川常夜灯ワークショップ

「あるく・かたる・火をかこむ」

期間：2012年5月～9月

場所：女川町内各所

コーディネーター：対話工房

講師：山田創平

主催：宮城県、みやぎ県民文化創造の祭典実行委員会、東京都、東京文化発信プロジェクト室(公益財団法人東京都歴史文化財団)、えずこ芸術のまち創造実行委員会、対話工房

後援：女川復興連絡協議会

### ユイノハマプロジェクト

「桃浦を想い、桃浦を担ぐ、桃浦を紡ぐ」

期間：2012年10月～2013年3月

場所：石巻市桃浦地区

アーティスト：岩間賢

主催：宮城県、みやぎ県民文化創造の祭典実行委員会、東京都、東京文化発信プロジェクト室(公益財団法人東京都歴史文化財団)、えずこ芸術のまち創造実行委員会、結浜プロジェクト実行委員会

### アートでHUGくもう!おあみキッズアート2012

期間：2012年11月4日(日)

場所：とめ女性支援センター hugおよび大東公園(登米市)

アーティスト：山田大輔

主催：宮城県、みやぎ県民文化創造の祭典実行委員会、東京都、東京文化発信プロジェクト室(公益財団法人東京都歴史文化財団)、えずこ芸術のまち創造実行委員会、特定非営利活動法人とめタウンネット

### 山元町「井戸端会議」支援事業

期間：2012年9月～2013年2月

場所：山元町内各所

アーティスト：岸井大輔

主催：宮城県、みやぎ県民文化創造の祭典実行委員会、東京都、東京文化発信プロジェクト室(公益財団法人東京都歴史文化財団)、えずこ芸術のまち創造実行委員会、アートリバイバルコネクション東北

協力：3がつ11にちをわすれないためにセンター

### アートポンプ計画\_気仙沼

「こどもと復興商店街ワークショップ」

期間：2012年2月5日(日)

場所：気仙沼復興商店街 子ども集会所みなみまち

cadocco(気仙沼市)

ディレクター：村上タカン

アーティスト：開発好明、門脇篤、斉藤道有

主催：一般社団法人MMIX Lab、えずこ芸術のまち創造実行委員会、東京都、東京文化発信プロジェクト室(公益財団法人東京都歴史文化財団)

### アートポンプ計画\_山元町

「山元町伝統工芸職人支援事業」

期間：2012年2月11日(土)

場所：山元町中央公民館(山元町)

ディレクター：村上タカン

講師：矢澤啓史、門脇篤、東京藝術大学学生チーム

主催：一般社団法人MMIX Lab、えずこ芸術のまち創造実行委員会、東京都、東京文化発信プロジェクト室(公益財団法人東京都歴史文化財団)

### マイタウンマーケットキャラバン

期間：2012年1月～3月

場所：福島県新地町

講師：北澤潤

主催：マイタウンマーケット実行委員会、えずこ芸術のまち創造実行委員会、東京都、東京文化発信プロジェクト室(公益財団法人東京都歴史文化財団)

### アートが被災地にできること。

被災地がアートと出会うこと。

～芸術文化による支援をカンがえるシンポジウム～

期間：2012年3月24日(土)

場所：えずこホール(仙南芸術文化センター)

コーディネーター：藤浩志

パネラー：小山田徹、岩間賢、村上タカン、坂口大洋、横田重俊、高田彩、北澤潤

主催：えずこ芸術のまち創造実行委員会、えずこホール(仙南芸術文化センター)、東京都、東京文化発信プロジェクト室(公益財団法人東京都歴史文化財団)

### アート・インクルージョン クリスマスプロジェクト 2011

期間：2011年12月16日～17日

場所：あすと長町仮設住宅広場、長町遊楽庵びすた～り(ともに仙台市)

出演：森司、水戸雅彦、八巻寿文、天野美紀、村上タカン、中川和寿、KEI、ウランゴフ、L PACK、アスカオリ、白田香織、非営利団体ふらいバンダ、さきらボランティアコミュニティ、門脇篤、ハッピーサンタ

主催：アート・インクルージョン実行委員会、えずこ芸術のまち創造実行委員会、東京都、東京文化発信プロジェクト室(公益財団法人東京都歴史文化財団)

協力：えずこホール(仙南芸術文化センター)、一般社団法人MMIX Lab

助成：ARTS NPO AID、東日本大震災復興支援財団「子どもサポート基金」

### 震災ケア・アートサロン

期間：2011年12月～2012年3月

場所：仙台市、石巻市、亶理町、塩竈市

講師：斎藤尚美、横田敏子、小黒三郎、飯野和好、川原直子、横田重俊

主催：こどもとあゆむネットワーク、えずこ芸術のまち創造実行委員会、東京都、東京文化発信プロジェクト室(公益財団法人東京都歴史文化財団)

### ユイノハマプロジェクト「カラダでぶつかり、汗を流す。

集え、21人の浜つたち」

期間：2011年12月～2012年3月

場所：石巻市桃浦地区

アーティスト：岩間賢

主催：結浜プロジェクト実行委員会、えずこ芸術のまち創造実行委員会、東京都、東京文化発信プロジェクト室(公益財団法人東京都歴史文化財団)

### アーティストラン!!イボイシステーション!!

期間：2012年1月～2月

場所：伊保石仮設住宅、海岸通仮設店舗、ビルドスペース(すべて塩竈市)

アーティスト：中島佑太、首藤健太郎、處美野、滝沢達史

主催：ビルド・フルーガス、えずこ芸術のまち創造実行委員会、東京都、東京文化発信プロジェクト室(公益財団法人東京都歴史文化財団)

協力：3がつ11にちをわすれないためにセンター、えざるプロジェクト、高橋正典、飛びだすビルド!

## 2011年度

### 藤浩志とカンがえるワークショップ

期間：2011年9月～2012年1月

場所：宮城県内各所

コーディネーター：藤浩志

講師：山内宏泰、鈴木裕治、高田彩、佐藤久美子、篠原久美子、納屋幸、影山裕樹

主催：えずこ芸術のまち創造実行委員会、えずこホール(仙南芸術文化センター)、東京都、東京文化発信プロジェクト室(公益財団法人東京都歴史文化財団)

### 雄勝法印神楽 舞の再生計画

期間：2011年9月～10月

場所：石巻市雄勝町、仙台市・榴ヶ岡公園

監修：千葉雄一

設計施工：片山鶴衛+仙台高専建築デザイン学科坂口研究室

出演：雄勝法印神楽保存会

主催：雄勝法印神楽再生実行委員会、えずこ芸術のまち創造実行委員会、東京都、東京文化発信プロジェクト室(公益財団法人東京都歴史文化財団)

### 女川コミュニティカフェプロジェクト

期間：2011年11月～2012年2月

場所：おちゃっクラブ(女川町地域医療センター前仮設コミュニティスペース)

講師：小山田徹、ティトゥス・スプリー、海子揮一、太宰聖一ほか

主催：対話工房、えずこ芸術のまち創造実行委員会、東京都、東京文化発信プロジェクト室(公益財団法人東京都歴史文化財団)

後援：女川復興連絡協議会

協力：震災リゲイン、ドイツ大使館

写真クレジット一覧

P12/34/56/78/96/101/102/118/125/ 138/162/176/180-181/184/188/193	喜多直人
P14	佐々木厚
P16-17/22	草本利枝
P19	海子揮一
P30	梅田彩華
P37/38-39/42/47/160 (上下とも)	越後谷出
P48	村上タカシ
P64-65/67	撮影:越後谷出 提供:3がつ11にちをわすれないためにセンター (せんだいメディアテーク)
P81/82/86-87/93	岩間賢
P106-107	大島公司
P121/122/126/128 (右中・右下)/169	谷津智里
P128 (右上)	岸井大輔
P141	原西忠佑
P144/154	鈴木拓
P187	五十嵐靖晃
P61/62/68/73	提供:雄勝法印神楽再生実行委員会
P149	提供:ARCT
P179	提供:ビルド・フルーガス

URL一覧

対話工房	<a href="http://taiwakobo.jimdo.com/">http://taiwakobo.jimdo.com/</a>
一般財団法人アート・インクルージョン	<a href="http://art-in.org/">http://art-in.org/</a>
ARCT	<a href="https://www.facebook.com/ARCT20130707">https://www.facebook.com/ARCT20130707</a>
つながる湾プロジェクト	<a href="http://kurashio.jp/tsunagaru-wan">http://kurashio.jp/tsunagaru-wan</a>

2013年度

つながる湾プロジェクト

期間:2013年5月~12月

場所:浦戸諸島および塩竈市内各所、南三陸町

講師:日比野克彦、五十嵐靖晃、喜多直人、大和田庄治、津川登昭、綿晋、高橋信社、星博、山田創平、伊藤栄明、菅原弘樹ほか

主催:ビルド・フルーガス+一般社団法人チガノウラカゼコミュニティ、一般社団法人 torindo、えぞこ芸術のまち創造実行委員会、東京都、東京文化発信プロジェクト室(公益財団法人東京都歴史文化財団)  
共催:塩竈市 助成:公益財団法人日本財団  
協力:ヒビノスペシャル、チーム wan

2014年度

つながる湾プロジェクト

期間:2014年5月~2015年3月

場所:塩竈市、松島町、東松島市

講師:五十嵐靖晃、増田拓史、木島裕、菅原弘樹、wool.cube,wool!ほか

主催:ビルド・フルーガス+一般社団法人チガノウラカゼコミュニティ、えぞこ芸術のまち創造実行委員会、東京都、東京文化発信プロジェクト室(公益財団法人東京都歴史文化財団)  
共催:塩竈市  
運営:つながる湾プロジェクト運営委員会

忘れないための被災地キャラバン

~いま、もう一度、見て、聴いて、カンがえる。

期間:2014年11月22日~23日

アーティスト:小山田徹、鶴見幸代、藤浩志、マルチナス・ミロト

ナビゲーター:佐東範一、吉野さつき

主催:宮城県、みやぎ県民文化創造の祭典実行委員会、東京都、東京文化発信プロジェクト室(公益財団法人東京都歴史文化財団)、えぞこ芸術のまち創造実行委員会

浦戸諸島リサーチプロジェクト

期間:2012年12月~2013年3月

場所:浦戸諸島各所およびビルドスペース(塩竈市)

講師:日比野克彦、五十嵐靖晃、山城大督

主催:宮城県、みやぎ県民文化創造の祭典実行委員会、東京都、東京文化発信プロジェクト室(公益財団法人東京都歴史文化財団)、えぞこ芸術のまち創造実行委員会、ビルド・フルーガス

なんのためのアート

期間:2013年1月26日(土)

場所:せんだいメディアテーク(仙台市)

出演:畠山直哉、甲斐賢治、鈴木拓、日比野克彦、竹久侑、森司、港千尋、熊倉純子  
ファシリテーター:西村佳哲

主催:宮城県、みやぎ県民文化創造の祭典実行委員会、東京都、東京文化発信プロジェクト室(公益財団法人東京都歴史文化財団)、えぞこ芸術のまち創造実行委員会  
共催:せんだいメディアテーク  
事務局:アートリバイバルコネクション東北

ARC>T\_ARCHIVE

期間:2013年2月~3月

場所:せんだい演劇工房10-BOX(仙台市)

監修:甲斐賢治

主催:宮城県、みやぎ県民文化創造の祭典実行委員会、東京都、東京文化発信プロジェクト室(公益財団法人東京都歴史文化財団)、えぞこ芸術のまち創造実行委員会、アートリバイバルコネクション東北

藤浩志とカンがえる!ドキュメント

期間:2012年4月~2013年3月

編集:影山裕樹

主催:宮城県、みやぎ県民文化創造の祭典実行委員会、東京都、東京文化発信プロジェクト室(公益財団法人東京都歴史文化財団)、えぞこ芸術のまち創造実行委員会

<http://asttr.jp/>

## 監修者

---

**谷津智里**  
Chisato Yatsu

東京都出身。出版社勤務を経て、2008年、家族とともに宮城県白石市へ移住。2011年9月、Art Support Tohoku-Tokyoの宮城県事務局を務める仙南芸術文化センター（えずこホール）の臨時職員となり、同事業を担当する。2013年より同事業コーディネーター。宮城県内で行われたほぼ全ての事業の運営に携わる。

---

## 東日本大震災後、4年目の語り。 —7つのケース、宮城の9人の声の記録—

発行日 2015年3月31日

監修・編集	谷津智里
デザイン	土澤 潮
編集補助	川村智美
協力	篠塚慶介 岸井大輔 3がつ11にちをわすれないためにセンター 対話工房 一般財団法人アート・インクルージョン ARCT ビルド・フルーガス
印刷	今野印刷株式会社
発行	公益財団法人東京都歴史文化財団 東京文化発信プロジェクト室 〒130-0026 東京都墨田区両国3-19-5 シュタム両国5階 TEL：03-5638-8800 FAX：03-5638-8811 URL：www.bh-project.jp

※「東京文化発信プロジェクト室」は、2015年4月1日より「アーツカウンシル東京」と組織統合する予定です。